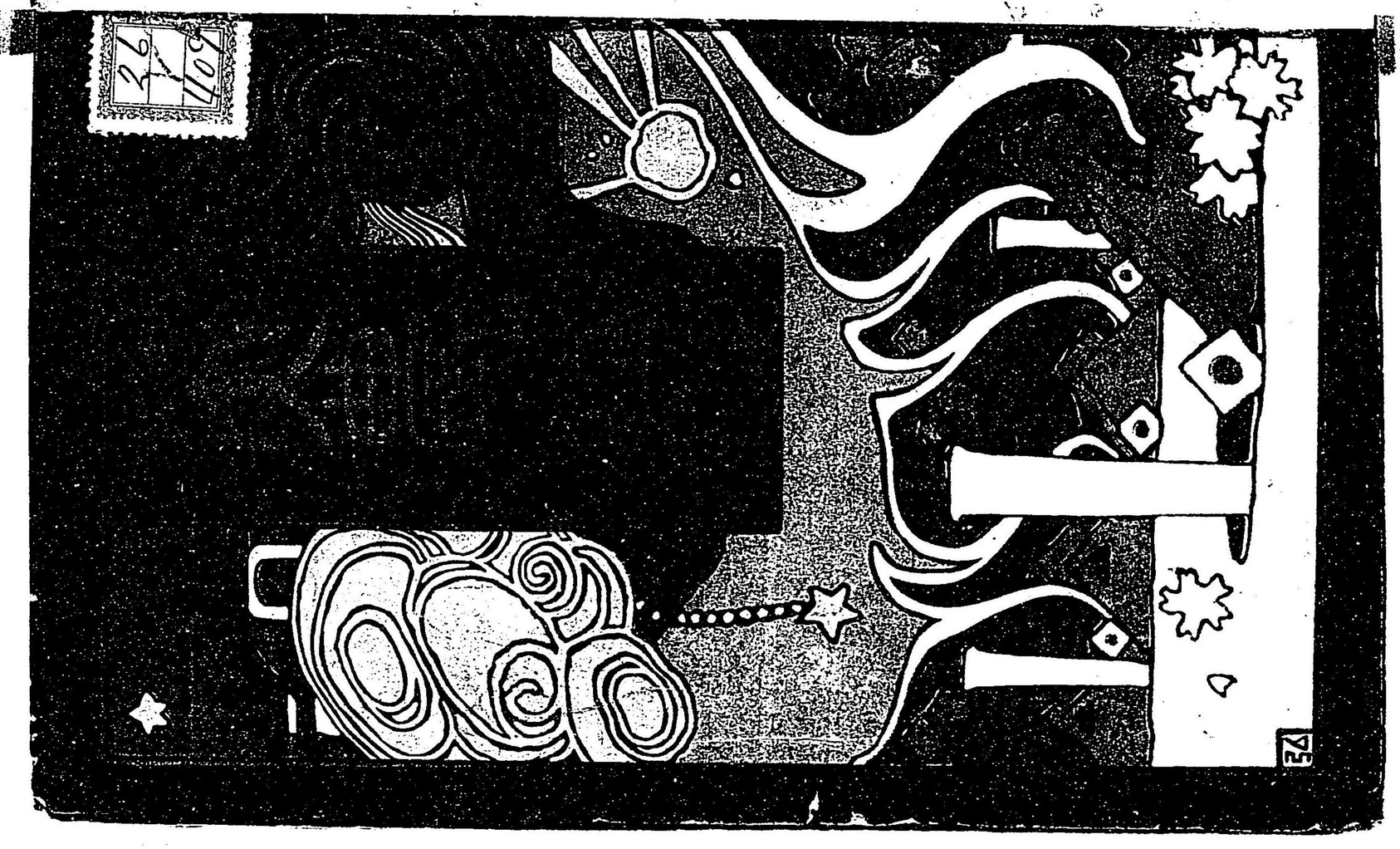


大幽居天簡

豐谷醒醒子真圖 桂葉

修羅地獄 禮簒

內交

序

今茲の春、我社は賞を懸けて新脚本を江湖に募りぬ、期に迨びて集るもの都て四十餘篇、上田萬年氏、上田敏氏、三木竹二氏、島村抱月氏、森鷗外氏に撰を乞ひ、五家は幾回の審議を重ねたる後、佐野天聲氏の作『大農』及び山田桂華氏の作『豊公醍醐花見宴』、神箭氏の作『修羅地獄』を佳作と決定せり、この篇に收むるもの卽是れなり、近年勃興の勢ひある劇界の風尙は、新なる文藝に要求するところ甚だ急なれば、其の盛運を扶翼せんとして我が社の敢て企圖したる斯の微擧が、僅かに三箇月の短かき日子の中に、容易にこの好脚本を獲たりしは最も欣幸とするところなり、抑も

亦た我社が此の新脚本を中央劇壇に推薦することを得ると共に併せて新たなる作家をも我が文壇に吹擧し得たるを喜ぶ

明治四十年七月

都新聞社

目次

序幕（秋季皇靈祭――九月二十三日）
(一) 鍛冶の工場
(二) 地主の寢室
第二幕（惠比須講――十月廿日）
地主の後園
第三幕（同日夜半より翌曉迄）
(一) 地主の家
(二) 鍛冶の家
(三) 地主の家
(四) 鍛冶の家

第四幕（十月廿一日）
（一）彫工の家
（二）利根河畔
大詰（十月廿五日拂曉）
洪水後の屋敷跡

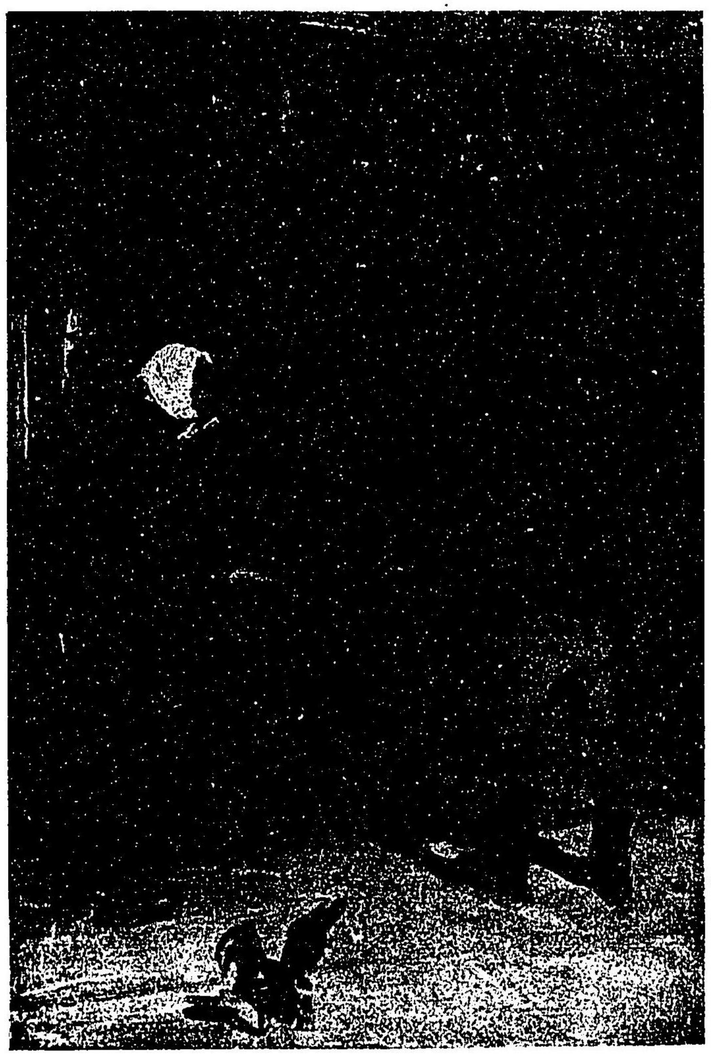
登場人物

老地主　加納安藤
新地主（安藤長男）　加納務
務俥　加納潔
彫刻家（安藤甥）　小松藤彌
陸軍騎兵大尉　三輪乙彦
受負師（務外男）　駒塚順一
農具鍛冶　櫻井慶治（元刀鍛冶櫻井四郎右衛門慶次）
醫報夫　木原嘉七（渾名吃の嘉七）
公證人　六角民輔
外科醫　齋藤市翁
醫部　若藤信定
刑事　桑山留太
同　朝田猛夫
加納家農番頭　米澤至平
同手代　白柄太助

同下男	太田又八
同	平川甚六
同	宮淵傳三
同	高砂軍二
小作人	島田源五
同	猿島熊吉
同	望月金助
同	鈴木五作
同	曽根彌十
同	豊田和七
慶次弟子	権吉
同	定造
法界節	鎌倉蝶吉
同	吹野東助
同	浅瀬渉

務	妻（順一郎）	加納庫子
務	妹（宏藏長女）	加納和子
藤彌	母	小松くみ
三輪大尉妹		三輪菊枝
東京藝者（元順一妾）		琴三升春吉
同	雛妓（庫子私生兒）	琴三升花助（本名お花）
東京藝者		琴三升 ぼん太
同		叶屋〆太
同		ことぶき屋秀吉
加納家女中頭		お櫂
同	仲働	お鶴
同	こまづかひ	お松
法界節		おりん
同		おそめ
村民大勢		
藝者大勢		
僕婢大勢		

TEIKOKU
TOSHOKAN
TOKYO



登場人物

時　場

所　下總國秋淵河畔加納村

秋（九、十月）

（秋季皇靈祭―九月二十三日）

鍛冶の工場

（正面上間が隧道で奥高き上框、其左下手寄りに爐、爐の後に烟突の喇叭口、喇叭口と上框との間に丸に慶の字の紋ぬき抜かれる紅暖簾かゝりて奥への通路あり、稀は水槽となりて、鐵砧は道具棚に隣る。

開幕に午の聲、幽の樫にて幕開くと老鍛冶親井慶次、左の手に鐵鉗を持ち、右の手に鎚を振りあげ、灼熱せる唐鍬を鍛ふ、相傾の若者植吉、定造、鎚を杖に上手にすまふ。）

慶次　今日はこれで遊ばせるぞ、晩まぢゃア放樂だ（唐鍬を水槽の中へしうと突込み）恁ういふ風に泡ア立てゝ遊んで見ろ、永源寺の方丈さま褒めなさるぜ。

植吉　（喜ばしげに）へ有難う御ざいます。

定造　

慶次　早く仕度して行くがひゝ

植吉、定造會釋して、奥へ入る。

村民望月金助、鈴木五作、古びたる中折帽、羊羹色の羽織、濁聲高く話しながら出づ。

金助　え、天氣、彼岸も先づ無事らしいな。

五作　今年も豐年は受合だ。

TEIKOKU
TOSHOKWAN
TOKYO

金助　これで洪水せなけりや、美い酒も飲めやうかい。

五作　洪水あつて堪らすか、今年の春、拵へたばかりの堤防だ、いかな暴風雨にも、切れるやうなこたアあんめえ。

金助　なけりやえゝがあつたら困る、あの堤防引受けて、ケレップ式に拵へ直した駒塚の旦那評判聞いたら、誰だッて、首い、ぶッかたげにヤおかねえよ。

五作　併し小旦那の舅だけに憎しみ増すのかも知んねえせ。

金助　うんにや、小旦那ア小旦那よ、駒塚の旦那ア駒塚の旦那よ、どろッくみにして批を打つ樣な俺ぢやアねえ。

五作　其れア左樣づら、お前だッて、加納の藏入頭も勤める身だ、證據のねえこたアいひもしめえさ、だがなア金さん、臭い物にやア蓋アしろで、へぜえつけれるもんなら、壓えつけた方がよかッべえ。

金助　俺だッて、何も好きで人の隱事探すでねえから、壓えること出來るこんなら幾らでも壓えるけんど、若しひよッとこれん本當で見さい、木下一圓は海の底だ、な、海の底——一昨々年の樣な洪水、堤番の吃弱のお袋を鉾杉のすてッぺんに突憑けた樣な洪水——可怖と〳〵、思つても身が戰慄る、だもの、默つてられすか、途方もねえ。

五作　途方もねえ、うん途方もねえづら、何うせな。だが俺ア、益もねえ陰口利いて、あッたら口に風引かすなア御免だせ——どれ慶さんとけえ行つて茶でも飲むべえ(行かうとする)

金助　怒つちやいけねえよ、よ五作さん、怒るもんぢやねえよ。

五作　怒れアしねえけんど、お前があんまり無茶だからよ。

金助　何俺が無茶なもんか、お前こそ無茶助だア。

五作　何故。

金助　なせッても、つまらねえ言葉咎めして、煮麺が箸の先いぶらさがつたやうにぶり〳〵するぢアねえか。

五作　へん其方こそ人の頭痛を疝氣に病んで——。

金助　疝氣に病むこたアねえ、頭痛に病んだらよかッべえ。

五作　何方だッておんなしもんだ。

金助　疝氣と頭痛と同じもんなら狸の頭も八畳敷はあッたらう。

五作　(歩きながら)　其樣洒落ア流行らねえよ(つんとする)

金助　(頭をちゞめて)　ぶり〳〵〳〵のぶり〳〵か。

五作　(聞えね振りして舞臺へ來り)　ほいもう慶さんとけえ來た——お前も入るか。

金助　入るとも。

五作　（戸を開けて）今日は。

慶次　（鎖の手をとめて後を振向き）おゝ五作さんに金助さんか、まア お入り、何處へな。

五作　彼岸の中日を忘れなさんな、お墓詣だ。

慶次　むゝ道いつア遣られた——永源寺の坊さん御ざッたかな。

五作　うんにや御ざらねえ、萩の餅食ひに加納へしけ込んだて、あこの小坊ン云ッてゐた。

慶次　萩の餅食ひに加納へな——。

金助　あの坊ンさま宮本無三四の二刀流だ不思議アねえ。

慶次　坊ンさましけ込むに不思議アねえが、此頃の大旦那に、お寺さんは大の不吉だ、北れでなくてせ、醫者だ藥だ牛乳だソップだと大騒ぎして、彼處の乘、寄ってたかって、ごッたかやしてるぢやねえか、面白くでもねえ、坊ンさまも坊ンさまだが、呼ぶ人も呼ぶ人だ、牡丹餅の馳走なら、小女郎でもやって、大重箱に二ッかたげも打呉てやれアいゝに氣の利かねえ。

金助　はゝゝゝえらく坊ンさま嫌はれたね、お前の口にあッちやア永源寺さまもおべこべに南無阿彌陀佛だ世話アねえ（といひかけてあたりを見廻し）時に小旦那アお留守かね。

慶次　河岸ッぷちの小杭新田の測量に、朝ッぱらから出なすッたが、もうおッつけ歸んなさらう、用かな。

金助　何用はねえが糾いて見たのさ、小指はへ。

慶次　奥さんも坊ちやん拉れて、つい今しがた出なすつたが、これアちと手間がとれやう、木下まで、旦那の着物、買出しに行かしッたで。

五作　あの人も苦勞なさるぞ、益もねえ人う亭主にしたお庇蔭でみじめなもんだ、なア金さん。

金助　（考へながら）左樣とも——。

五作　小松の祿旦那と夫婦になりや、今頃ア金鵄勳章で福々だに、運のねえこんだ。

金助　併し其れも此れも皆罰だよ、親の因果が子に報うで、惡いこた出來ねえもんだ。

五作　又金さんの述懷か、兎角お前は藷ぎの虫で、しめッぽいことばかり目につくな。

金助　目にもつかうで、今に見さい、ケレップ式築堤法だなんて、でッけえ法螺の貝吹いたッて、雨の二日も續かうもんなら、屹度ぶッ切れるに極つてら、火を視るやうなもんだ。

慶次　何うもお前は口に毒があるからいけねえ、其樣根も葉もねえ檣木の樣な噂とッこに取ッてわめき散らしたら世間の人ア皆泥棒のお揃ひだ益もねえ廢すがえゝ。

金助　よすがえゝたッて本のこッたら詮がゐんめえ、堤番の嘉七どんも同腹だとか聞いたものな油斷はなんねえ。

慶次　はゝゝゝ馬鹿なことを云はッせえ、餘人は知らず吃嘉に限つて其樣事あつてたまらすか、なァ五作さん、お前は何うだ。

五作　わしも嘘だらうと思ふだね、先刻も金さん其樣事云つてたが、何うも此人ア邪惟深えで困るよ。

金助　邪推深えで困れア、邪推深くねえやうにするんえゝだ、俺あの堤見ると、胸ん中ひッくりけえるやうで堪んねえ、早く何處え引越すべ思つてるだ。

慶次　昔唐に、天が落ちたら何うすべえと泣面搔いて逃げ廻つた粗相ッかし屋んゐッたてえが、金さんも丁度其れだ、つまり病氣さ、熱海いでも行んで、當分保養するとえゝ。

金助　ひゝ左樣すべえ、秋中行んでれア、堤ん切れても、死ぬやうなこたゐんめえから。

五作　はゝゝゝ眞面目なとこん可笑い、はゝゝゝ、憑狐も恁うなれア愛嬌だ。

植吉　（慶次に向ひ）親方行ッて來ますせ。

慶次　——。（頷く）

定造　何も用はありませんか。

慶次　左樣さな（考へてあたりを見廻し）昨日打つた加納の配鎌ア何うした。

定造　笊い入れて奥にあります。

慶次　持つて來ねえ、遊び仕事に鉛でも切らう。

植吉、定造心得て奥へ入り直ぐ鎌の入りし笊を持出づ。

慶次　よし〳〵もう用はねえ行くがえゝ。

定造　ぢや行ッて來ますせ。

植吉、定造喜び勇みて下手に去る。

五作　遊ぶことにかけちや目がねえせ、舞ふやうに飛んでッちやッた。

金助　（獨語のやうに）若い方が暴ッぽいな。

慶次　左樣よ樓から見ると定の方が敏捷い。

金助　（矢張り獨語の樣に）總領の甚六ッて、よくいッたもんさ、兄てえ名のつく奴に滿足な人間は駄菓子屋の店の最中の餡で勘ねえやうだ。

五作　（小聲に）小旦那も其組だ せ。

金助　（眞と大聲の）途ひなし、ロスの捕虜になるなんて、隨分氣のお利き遊ばした役廻だ。

五作　氣象の勝つた人間なら腹ア打ッ裂いて死ぬとこだが、金持ッて奴ア醜ねえもんさ。

金助　左樣よの、俺ア小旦那ん、無事で露助の陣に居るッて聞いた時、はゝア大將、金ん唸ッて死ねゝえなと、左樣思つたが案の條、大旦那ん村正の七首ロシヤまで送つて、露助の捕虜になるなんて見さげはてた奴だ、永源寺に納まつて御ざる、加納家代々の御先祖樣に對しても云譯ねえ、たッた一人の男の子を、一萬里も離れてゐる、異域で殺すなア惜しいが、之も運なりや仕方ねえ、此七首で立派に腹切れ、二度と日本の土を踏むな、骨になつて歸えれッて、赤の他人が聞いてせえ、涙出る樣な有難えお言葉を、何うだッべ、河童の屁ほどにも思はねえで、骨になつて歸える處か、肥え膩ぎつて歸えッて來なさるなんて、とッても人間の皮かぶッてるもんにや出來ねえ眞似だ。

五作　おいらも小旦那にや愛想ん盡きた、慶次さんの前だが、大旦那勘當さッしやるに無理ねえだよ。

金助　無理ねえ處か、俺ア當然だと思つてる、考えても見さい、何處の國に、親から腹切刀ア貰つて腹も切らず咽も突かず、呑子の酒蛙で歸えつて來る手合あるもんか、親不孝も此位れえすれア空腹いてたあんめえ、存分だア。

慶次　（一心に醜樣の鉛を切りつゝ）おい金さん、左樣小旦那ア尻から扱出したやうに罵詈すもんぢ

やねえ、鞘にだッて耳がある、知れるとお前等の損だッぺ。

金助　俺も罵詈したかねえけんど、小旦那餘まり圖太えから、其れでつい罵詈したくもなるだよ、もつと身の程知つて、小ッさくなッてなさりや、俺だッて其樣えに、捕虜々々ッて口汚く言やアしねん、本のこッた。

五作　人間は謹愼てえこと知んねえと憎しめう受けるもんだ、お前も緊がる緣だ、何うかしてもッと我慢の角おッぺしよる樣に氣いつけて上げねえと、飛んだ目に逢ひなさるも知んねえせ。

金助　闇の夜もあるし利根河畔もあるからね。

五作　祿彌さんて金鵄勳章があればこそ恁うやつて彼岸の中日にも大手振つて木下から布川の方へも行かれるだけんど、祿彌さんでもなかつて見さい、何樣に肩身狹めえか知れアしねえ、其れう思ふと小旦那ア、佐倉領の御城代で、村の爲めにやアなんねへ人だ、此間も源さんや熊さんが、小旦那打毆られる樣なことあつても鼻も引ッかけめえッて、內證話爲てえたッけが、無理アねえよ、あん人ッちやア勳八等瑞寶章の八十圓だ、手柄からいや、祿彌さん次い座るだからね。

金助　祿旦那見てえに金鵄勳章貰つても、齒痒ほどおとなしい人もあれば、此の小旦那の樣

に、ロシヤくんだり繩ア打れて引廻されても横柄顔して威張りくさる人もある、世中ア五色の糸のさま〳〵だッて永源寺の坊ンさまよくいふが、俺ア青天狗の青い色より、白禰女の白い色の方が好きさ。

務　加納務（洋裝）測量器具を小脇に抱へ、三尺ばかりの握太なる鋼鞭を突鳴らし、昂然として出づ。

（勢ひよく戸をあけて入り）爺や今歸つた。

慶次　（務を見て）お丶若旦那、大分お手間がとれましたね、今日はどちらを御測量で。

務　小杭新田から惣の方を一遍通り測量したが、僕の想像どほり實に眞平らなもんだぜ、あれなら畔畷を潰したッて水がかゝるよ、大丈夫受合いだ。

慶次　併し能く念を入れてお調べにならないと、後で困るやうなことが出來ませう、

務　其れア無論輕はづみな眞似はしない、恁うといふ見据ゑがつかにやア、神さまが來て、大慶法を實施しろと仰有つても、なか〳〵耳もかしやアしねえ、安心するさ（紐に腰かけて靴を脱ぎ捨て）どれ足でも洗つて一寢入りしやうかな（障子に身を寄せて奥を見込み）康子々々（と大きく呼ぶ）

慶次　奥様ア木下までお買物にお出掛けですが、何か御用なら私が致しませう。

務　ひ丶左様かい、ぢや氣の毒だが、湯を一つ汲んでくんな身體を拭くから。

慶次　かしこまりました。

（慶次心得て奥に入る。）

金助　（丁寧に腰をかゞめ）若旦那、え丶お彼岸で御ざいます。

五作　（これも丁寧に腰を屈め）お久しぶりでへ丶丶丶丶。

務　（冷かに）ひ丶お揃ひで何處へな。

五作　お墓詣で御ざいます。

務　ほう殊勝なこッた、お前がたも永源寺か。

五作　へッ左様で。

務　あすこの坊主は、腹だが、お大黒は話せる奴だ、僕が爺に勘當されて、恁うやつて、迂路ついてるのを氣の毒に思つて、いろ〳〵深切に世話して呉れるが、智慧のない人間ばかり蠢々してゐる加納村にも、道様のがあるかと思ふと、をかしくてならないよ。

慶次金盥を兩手に持ちタオルを肩にかけて奥より出づ。

慶次　此位でようがすかね。

務　どれ〳〵むゝ結構（洋服を脱捨て、裸體になり）二三日湯に入らないからむしや〳〵して持が悪い、此通り汗になつた（タオルを湯にひたして身體を拭く）

慶次　（務の逞しいからだを視ながら）若旦那ア見るたびに肥えなさるが、幾貫目御ざらッしゃる。

務　十九貫五百目はあるだろう。

慶次　うん左樣ぢら、えゝ身體な、まるで角力だ。

務　ロシヤで旨い物食つたからだと此間永源寺の坊主いつてゐたが、黑麵麭で恁う肥れア、黑麵麭も天下一の滋養物だな。

慶次　其れア人の惡口でさ、幾ら旨い物食つたつて、肥滿質の人でなけれア肥りませんよ。

務　左樣だらう、祿さんなざア隨分旨い物食つてるけれど、何時見ても寒雲雀の鹽漬だ、此頃ア又痩せたぜ。

慶次　戰爭でもな人の生血を吸ふ條虫でさ、祿旦那の樣に眞ッ正直に息隙油斷なく働いたら、幾ら丈夫な體でも堪りませんよ。

務　すると俺は不正直かな。

慶次　不正直でもあんなさるめえが、まア何方かでや、橫着な方でせうね。

務　ふゝむ、お前までが俺を橫着ッていふのだね、左樣か、成程、日本て國ア、尻の穴の緊りのいゝ人間ばかり住んでる國だ、橫着々々、橫着でロスケの捕虜かはゝゝゝゝ、爺やも

矢張り日本人だな。

慶次　氣を惡くなすつちやアいけませんよ、橫着ッてッたッて、かすり取りの親分や、いかさま師の才取の橫着た違ひます、つまり祿旦那と比べて見ての弗相場が低くゝねえからの言葉の綾さ、氣を惡くしちやいけませんよ。

務　何別に氣を惡くもしないが、言葉の綾にもよりけりで、橫着といふのは不正直といふ意味より外に取りやうのない言葉だから、腹の底ハモルヒネ注射の極量程染込んでも苦くなる、お前を捉まへて泥棒といつたらお前だッていゝ氣持ちやあるまい、孔子樣が盜賊面をして居ても孔子樣はぬすッとぢやないからね、見そくなはんやうにしておくれ、俺ほど正直者は世間にない。

慶次　（少しむッとせ！膝にて膝を進め）其れアあんたア正直者で御ざいませうさ、捕虜になつて、捕虜になつた恥も外聞もお隱しなさらない程正直で御ざいます、けんども世間が――世間といふお奉行さまが左樣見て呉れにやア何もなんめえと思ひますね、自分一人世界の中央に突立ッて、稼いで食つて寢て起きて糞をいきみ出してるだけならようがすが、近所も隣も血を分けた親兄弟も女房子もあつて見ると、其處へこだはりが出來やうてもんでさア、世中ア、左樣棒を呑んだ樣にぶッとう切りぢやをさまりません、七八年前に伊庭さんに殺された

務　星亭がえ〳〵手本だ、幾ら根が張ッて〳〵も喬い木は折れますからね。
　併し折れない木もあるだらう。
慶次　其れアあることはありますが、まア大抵は折れませうよ。
務　折れる木には折れるだけの原因があるからだ、根がゆるひとか虫が蝕ふとか、乃至は
　不相應にひよろ喬いとか其樣事で折れるのさ、根もゆるまず虫も蝕はず不恰好にひよろ喬く
　もなけりや、ちッとも心配することはない、鹿島さまの御神木は、蛭ケ小島へ流された才槌
　頭の惡戯小僧と同年齢だといふぢやないか。
慶次　――（俯向く）
　加納家の手代太助出づ。
太助　今日は。
慶次　（太助を見て）何か用かね。
太助　お前さんに大旦那急に逢ひなさりてえ仰有ッてだが、手隙なら來て下さい。
慶次　ほり不思議だねつひしか呼ばれたことのねえ俺だに、はアてね。
太助　（務に會釋しながら）先刻永源寺の坊ンさま來て、大分旨さうに牡丹餅食べて歸えんなす
　つたから、惡いこヅちやありますまいよ。

慶次　ふう左樣かね、ぢや直ぐに行くとすべえ（務に向ひ）若旦那留守う何うか願ひますよ、
　權も定も遊びに遣つたで無人だからね。
務　よし〳〵。
金助　五作　わしらも御免蒙りますべ。
慶次　お前等後で若旦那話對手になんなさい、俺直さに歸えッて來るで。
金助　併しもう晝だつべ、お邪魔になると惡い、歸えるべえ。
五作　歸えるべえ。
　一同務に會釋して去る。
務　（日本服に着かへながら）無論其樣事はあるまいが――あれば慶爺よりも俺を呼ぶ、左樣
　だ、其樣事は決してない。少くともお父さんが俺の說に服しておしまひなさらんうちは斷じ
　て俺と手を分つ樣なことはない。俺は左樣信ずる。左樣信じなければならない。
　大尉三輪乙彥出づ。
三輪　（戶口に立ち）加納君。
務　（此聲に振返り）お、大尉。
　兩人はゼよりて手を握る。

務　よく來ましたね、何うして此處が分りました、え、誰かに道で問いたのですか。

三輪　訊たとも、加納村の「負けるがかちぢや」は何處だッて、木下の停車場を降りると直ぐに訊出して、やうやッと邂逅ふたる百年目、僕ア親の讎敵に鼻を摘まれたより嬉しいよ。まづ其後は。

務　（含羞しながら）東京詰におなりださうでお芽出たいことです。

三輪　芽出たいか何うか分らんがね、まア生故郷に近くなつたゝけが儲物さ——時に此處の主人公は。

務　留守です。

三輪　君の友人。

務　いや僕の妻の乳母の亭主です。

三輪　え、君の細君の乳母の亭主、ぢや君はもう細君があるんだね。

務　子まであります。

三輪　（がッかりした樣に椅に腰かけ）左樣か些も知らなかつた。ふう君も妻子があつたのか、すると僕アまた當分、君を弟扱ひにや出來ないわけだ。

務　何うしてゝす。

三輪　實はね、今日恁うやつて出て來たのは——秋季皇靈祭の休日を利用して出て來たのは、僕の推薦の方法が下手な爲に、君に金鵄勳章を贈ることの出來なかつたお詫旁々戰地で受けた再生の恩報じせうといふ計畫、手ッ取り早く云へば君の幸福を增進する好伴侶を一人御周旋せうと思つて出て來たのだが、細君ばかりか子まであると聞いちやア此案は無論撤回だ、已むを得ない。俳し僕は一生のうち何うしても君に恩報じ爲にやア死なゝいから左樣思つてゝ呉れたまへよ、此胸に懸けてゐる功四級の金鵄勳章は君に貰つたも同然だ、あの時君が馬を捨て身を棄てゝ僕を救つて呉れなかつたら、僕の歴史は山家堡が打止めだ。馬革に包む軍人の本分は終つて居ても其れ以上の本分を盡すことは出來なかつたのだ。其れを思ふと、僕は身を粉に碎いても、君の爲に盡瘁しにやア男でない、今後君が若し友人を戀ひしいと思ふ場合があつたら、赤阪の兵營へ電報打つて呉れたまへ、僕は軍規に觸れても關はん、直ちに奔馳して君を慰藉する、これだけは誓つて置く、僕の妹——手紙の往復で名だけは君も知つてゐる妹の翁枝も、君の爲には、何樣事でもすると云つてる、可愛いぢやないか、尤も僕が戰地で死ねば自分も死ぬ氣だと云つて居たから、君と僕との關係以外、別趣の意味で、力瘤入れるに不思議はないが、僕と同じ血の通つた人間でなさや、なか〳〵左樣いふ決心は出ないものだ、面は醜いが腹は綺麗、竹を破つた樣な點も僕に似て居る、君を信じ君を慕ひ

君を愛する點は僕以上だ。戀といふのでは無論ない、が戀でなくもないかも知れぬ、落花流水、緑は異なるもの味なものと昔から相場が極つて居る。併し今は其樣事いつても無駄だ、僕はこれで——時間がないから僕はこれでお暇するが、何うか君十三里先方に君を信じ君を慕ひ君を愛する男と女とがあるといふ事を記憶しておいて呉れたまへ（といひかけて框を離れ）君も隨分苦勞するが、君の體格と意力とは、君を順境に導くだらう、自愛したまへ。

務　（大尉の顏を呢と視まもり）感謝します。

三輪　（手をのべて握手しながら）君の今後の方針は。

務　大農です。

三輪　覺期は。

務　新月似磨鏢。

三輪　十五夜を待ちますぞ。

務　——（頭を下げる）

三輪　失敬。

大尉去る。

殆ど擲逐ふばかりにして廚子潔の手を引いて出づ。

廚子　泣くもんぢやありませんよ坊は強いお父さんの子だ泣いちやいけない、泣くとお菰に呉れて遣るよ。

潔　（泣きながら）いやだ〜坊お菰いやだ〜。

廚子　だから泣くんぢやありません、なッきさへしなけりや、お菰になんて呉れはしませんん、さお入り、お父さんが待つて居なさる、ほら父さま、ね父さまがおいでだらう（務を見て）遲くなりました（お辭儀をする）

務　むゝ（潔を見て）又誰かにかまはれたな、意氣地なし、掙はれて泣く奴があるか。

潔　だつて坊を熊とこの芳が殴打んだもの痛いから泣くんだよ、坊掙はれて泣くんぢやないよ。

務　芳が殴打いた、何でたゝいた。

廚子　棒切で叩いたのです、私がね熊の家内と立話して居ますと突如後方から來て、此子の頭部をなぐッたのです、本當に憎い奴、私餘程殴りかへして遣らうかと思ひましたけれど、子供の喧嘩に大人でもあるまいと、熊の家内が頻りに詫るをしほに歸つて來たのですが、これ這樣に、耳の付根が腫れましたよ。

務　（潔の傷を見ながら）むゝこれは成程痛からう、早く何か貼付ておやり、病うといけな

い。

庶子 石炭酸で洗ひませうか。

務 左樣さなア、おゝいゝものがある、ほら日外慶爺が、金槌で指を潰した時買つて付けた、きいッぽんの肝油があらう、あれをつけて遣んなさい、直ぐ癒るよ。

庶子心得て奥に入る。

務 (潔に向ひ)また痛いか。

潔 あゝ。

務 泣くんぢやない、痛くても泣くぢやない、お前はお父さんの樣に強い。芳だの春だのッて弱虫とは違ふ。殴かれたら擲き返して遣る。復讐する。仇を討つ。岩見重太郎の樣に鐵材棒を振廻して、な、金時、桃太郎、強いだらう、鬼退治、うん、左樣だ、坊ば傑いぞ、泣いちやいけない、今に美味を御褒美にやるぞ、泣くぢやない〜。

庶子出づ。

庶子 これで御ざいますね(肝油の壺を務に示す)

務 うん其れ〜、指へ取つて付けてお遣り。

庶子 (肝油を潔の傷口に付けながら)ほらもう痛かないだらう、泣くぢやない、坊は強い〜強い

い父さまの子だからね(務に向ひ)あなた爺やは何處へ行つたので御ざいますか。

務 先刻お父さん許から迎へが來て、太助と一緒に出掛けたが、もう直きに歸るだらう。

庶子 (不思議さうに)何の御用でせうねえ、惡いことぢやありますまいね。

務 なに惡いことなんかあるもんか、大方俺に財産を讓るとか何とかいふことだらう、お父さんも馬鹿ぢやない、俺の正しいこと位知つて居るさ。

庶子 其れだと何樣に嬉しいか知れませんが、若しひよつと、和子さんに、後式をお讓りなさるなんて御相談だつたら何うしませう。

務 和子は俺の妹だ、お父さんの氣に叶つて、加納家の相續人になりや結構さ、ちッとも困ることはない。

庶子 いゝえ困ることが御ざいますとも、第一左樣なつたら、此村にいらッしやることは出來ますまい。

務 其ら出來ないこともなからう、役場の書記か助役になれア、お前と潔ぐらゐ養へるよ。

庶子 あなた其れア本氣で仰有るので御ざいますか、役場の書記——助役——田邊さんに矢城さん、おゝ忌な、あんな羊羹色の羽織を着て、壁のよぢれた袴穿いて、毎日々々お辨當持

つて役場通ひ、おゝいや、私左樣なつたら死んでしまふわ、耻しい。

務　耻しいことがあるものか、自ら働いて自ら食ふ、これほど立派な生活はない、田邊や矢城がみすぼらしく見えるのは、無信仰の影を辿るからだ、俺の樣な人間が、役場の書記になつて見ろ、辨當ぶら下げた腰付も、ミケランゼロの彫つた、ダビデの像其まゝだ、くだらない心配する間に、畫飯の仕度でもしろ、もう十二時大分過ぎた。

庶子　(物思はしげに立上り)女といふものは男の樣に歸めのいゝもんぢやありませんわ、六千石の大地主と役場の書記の釣合ひは、提灯に釣鐘、秤にはかゝりませんもの。

務　物質上からいや秤にかゝらん、俳し精神上からいや立派にかゝる、お父さんの舊思想と、俺の新思想とを比べて見ろ、金の目方はお父さんの方が重いが、智慧の目方は俺の方が重い、命後の舞台は智慧と意力の爭ひだ、金や地位は付けたり、あればあるに越したことはないが、無ければ無いで拵へるに手間隙要らぬ、馬鹿な、もう其樣繰言はよせ、秋の日は釣瓶落だ、夕飯と畫飯と一緒にされちや迷惑、潔も腹が減つたらう、俺も此躰軀で、六時間の斷食は徹へる、茶漬でいゝから食はせろ(潔に向ひ)さア坊や上へおあがり、お父さんと一緒にお畫だぞ。

庶子を先に潔を拉れて奥に入る。

よき程の時をおきて法界節鎌倉蝶吉、吹野東助、淺瀬湊、おりん、お染等、笛、胡弓、月琴など搖鳴らし唄をうたひつゝ出づ。

法界節　唄『佛蘭西革命のおこりを問へば、天定まりて人に勝つ、運のつきかよ月しろも、盈れば かくる十六夜の、まだ年若のルイ王が、おつきの貴族にまどはされ、黑白もわかぬ慾のやみ、權利の黑髪引きしぼり、專制の櫛齒手荒くも、民の油をすきとりて、天下の患ひを白妙の、鹽の稅まで厚化粧、貌は白くも腹黑き、からき政治を解きもせで、却つて結ぶ衿飾、咽喉にしめる禍も、月日と共にますかゞみ、磨きすましたる竹槍の、切尖揃へて席旗、上を下へと飜へし、萬國一の名にしおふ、巴里の御所の有樣も、忽ち變る修羅地獄、血しほの海に屍山、天吹く風も腥く、一時は身の手がよだちしが、嬉しや闘鶏に、コリヤナシダイ自由の花』

唄のなかば、奥にて庶子出ないよとわめくこと幾三度、此時たまりかねて走りいで。

庶子　出ないといつたら出ないよう、あれほど言ふに聞えないのかねえ、やかましい。

蝶吉　やかましい、へんやかましいもよく出來た、大騙、錢う呉れなきやア動かねえぞ。

庶子　なんだとへ、錢を呉れなきや動かない、乞食の癖に生意氣な。警察へいッつけるぞ。

東助　いッつけて見ろ、乞食でも門付でも、其れだけの勞力に酬いるのが當然だ、人に散々彈かしたり喋舌らしたりして、揚句の果に出ないたア何だ、其方こそ警官の厄介にならねえやうに用心しろ。

康子　何ッ（血相かへて立ちかゝる）

務奥より出でゝ康子を止め

務　無茶な眞似するもんぢやない（奥へおしやり法界節に向ひ）いくら遣るのか。

東助　へい、いえなに宜しう御ざいますが、あんまりお神さんが口穢なく云ひなさるから其れでつい、へゝゝゝ。

務　左樣でない、これでいゝか、十錢だ、少さやもッと遣らう。

東助　いへ何う致しまして、これぢや多う御ざいます。

務　ぢや取つて置くさ、其代り、もう一度、何か艶ッぽいものを彈いて行きな、

東助　へッ。

務、康子を伴ひて奥へ入る。

法界節　唄『あなたより外に男は持たぬゆゑ、あなたも其氣で居るがよい、若しもお茶屋のお客さんが勸めても、女嫌ひぢやといはしやんせ。』

法界節一回有難うさま。

法界節去る。

務出づ。

務　女子と小人は養ひがたし困つたものだ（歩きながら）矢張り家庭が惡ひのだ、お袋に早く死別れて、妾狂ひする爺の手に育てられたのがあれの不運、考へれば氣の毒さ、訓へてやらう（笛の中の鎗に目をつけ）なんだ、ほう爺め得意の慶次を刻つてたのだな、面白い、俺も一つ切つて遣らう（奥座の上に胡座をかき）はて何と刻らう、加納務造之もをかしくなし――むゝある〳〵、新月似磨鎌、これだ〳〵（俯向いて鎗を切る）

慶次出づ。

慶次　只今。

務　おゝ。

慶次　若旦那、大旦那があんたにお逢ひなさりたい言つてますせ、直ぐわしとおいでなせえ、南風だお芽出度い。

務　左樣か、ぢや直ぐに行くとしよう（鎗を持つたまゝ立上り）今這樣惡戯した上手だらう（鎗を見せる。）

慶次　（鎌を手に受けて眺めながら）今あんた刻つたですかい、六ケしい字だな、新月似る磨ぐ鎌で すかい。

務　新月磨鎌に似たり、三日月が磨いだ鎌の様だといふことで、希望を意味する詩の言葉だ。

慶次　なせこれが希望を意味するですね。

務　三日月は段々圓くなるぢやないか、希望があるさ、磨鎌の似しも解し様ぢやア活動とか奮闘とか努力とかいふ様な意味に取れる、つまり俺の腹の鍵よ。

潔出づ

潔　父ちやん何處えか行くの。

務　むゝ祖父さんの許へ行くのだが、お土産を澤山持つて來るから、おとなしく待ちゝ しといで。

潔　いやだゝ、坊も行く、父ちやんと一緒に行くよ。

務　困つたな。

慶次　お拉れなさいな、祖父さん懇ひしがつてるに違えねえ、わしおんぶして行きませう。

務　ぢや御苦勞だが左樣して呉れ。

康子出づ

康子　爺やお男さまはお變りもあるまいね。

慶次　へい別にお變りもないやうですが、胃がまだ痛むとか仰有つて、元氣のない、蒼い顔しておいでゝした。

康子　和子さんは居なすつて。

慶次　お枕頭におつきゝりだつて女中頭のお織どんが言つてました。

康子　さぞ胡麻を擂つてなさることだらうね。

慶次　（聞えぬ眞似して）さア若旦那參りませう、坊ちやまおんぶ。

潔、慶次の背中に乘る

務　（康子を見て）留守を賴むぜ（鎌を置く）

務、慶次、潔去る、

康子見送る。

繰綱　小松繰綱（右手裏失）美術家風の準奢な拵へ、石膏像を携へ出づ。

康子　康子さん。

康子　（びつくりして）えゝ。

緑彌　頃日は失禮しました。

康子　私こそ。

緑彌　お留守ですか。

康子　はい。

緑彌　慶爺も。

康子　はい。

緑彌　（笈の中の鏡に目をつけ）澤山な鏡、何にするです。

康子　何するッて、あなた御存じぢやありませんか。

緑彌　知りません。

康子　（仰山に）あらあんなことを仰有るわ、毎年惠比須講には小作へ鏡配りするぢやありませ
んか、其れですよ皆。

緑彌　あゝ成程、其樣例がありましたつけね、僕は負傷以來馬鹿に記憶力が減つて、他愛な
いことまで忘れる、頃日も、金鵄勳章の懸方を忘れて、お袋に笑はれましたが、實際困る。貧
血してるからでせうね。

康子　氣をおつけなさらないといけませんね、貧血から肺病になる人が幾らもあるていひま

すから。

緑彌　左樣でせう、何だか此頃は胸が痛いやうな氣がします。

康子　あら忌だ、本當に冗談ぢやありません、お醫者に診てお貰ひなさつたらいゝでせう。

緑彌　（臺の上に石膏を置き）臥目です、醫者の藥が何になります、僕はもう死ぬのだ、死んだら幾
ら冷酷なあなただつて、まさか大や猫が死んだと同一にはなさるまい、僕は其れを樂しみ
に死ぬ。あなたに捨てられたお庇蔭で貰つた金鵄勳章をあなたゞと思つて胸へ懸けて死にま
す。もう幾ら何と思つても歷とした亭主持のあなたを戀人にすることは出來ない、戰爭に征
く前、あなたの顏に似せて拵へた此像を――此像を視て下さい、似てゐます。僕が全力を擧
げて夜の目も寢ずに拵へたのだから似てなきやならん、あなた其まゝ、慾をいへば、此目尻
を尙少し此方へ延ばしたらばと思ふけれど、右の手がないから、思ふばかりで何うすること
も出來ん。察して下さい。昨日の曉僕は恁ういふ夢を見た、此像を拵へてると――右の手が
滿足なつもりでゞすよ――拵へてゐると、肩から羽根の生たスフインクスが出て來て、何をす
るのかと訊きますから、戀人の肖像を拵へてるのだと答へると、スフインクスは怖い顏して、
戀人だッ、戀人だッ、此姦夫、おのれ其まゝにおくものかッて、火の樣な舌をぺろり〳〵吐き
出して、僕の頭へ爪をさゆうッと突立ッたかと思ふと、其スフインクスの顏が、務さんとあ

なたのお父さんとを搗交せた樣な顏になり、僕が痛さに藥搔くのをさも心地よげに見据ゑて思ひ知つたかさア何うだ、これでもか〳〵、う〻痛からうせつなからう、は〻不憫な奴だと飽くまでも嘲弄した揚句、僕の頭を此石膏へこすり付けて、肩から生へた兩つの翼をばッばッと煽る拍子、不思議にも僕の頭が石膏の中へ滅入込んで、あ〻もうこれは堪らぬ、俺は惡魔の餌食になるんだ、情けない、戀人は奪られ、情は荒され、剩に生命まで奪はれるとは、よく〳〵拙い運命に生れて來たものだ、此位なら戰爭で死ねばよかつた、いや死ぬつもりで奮戰して——金鵄勳章貰ふほどに奮戰はしたのだが、右の臂を挫かれて、野戰病院に收容されて、人心地がつくと煩惱が出て、石に嚙付いても今一度日本へ還り、今は從兄の女房でも、昔は自分の戀人だッた戀しい人の手を取つて手を握つて、せめて不憫と一言いはれて死にたいもの生きたいものと岩をもとほす痴者の一心、キユピットの箭に魂を打込んで、未練にも生れ故郷の土踏んだのが今の苦痛を釀す原因、あ〻苦しい、あ〻切ない、何うしよう、扶けて呉れる人はないか、救つて呉れる人はないか、憐れむべき戀の奴の今はの際の苦しみを不憫と思つて呉れる人はないか、あ〻苦しい、あ〻切ない、胸が裂けるやうだ頭が破れる樣だ、救ッて助けて、扶けて〳〵、助けて〳〵、や、やす子、や、康子、康子々々康子さアん〳〵ッて二三度續けて呼んだと思ふと何時の間にか僕は康子さんの膝に抱かれて居る。あッ夢、

夢だ〳〵、夢ッと跳起きて突如あなたの手を取ると——（康子の手を矢庭に握る）

康子　あッ痛た〻〻〻。

綠彌　（愕然）何うしたです。

康子　何うしたッて（氣味惡るさうに綠彌を見て）ひどいことなさるんだもの、私手が拐れたかと思ひましたわ。

綠彌　やッ飛んだ失禮、つひ話に實が入つて、恐縮でした、勘忍して下さい。

康子　其樣に謝らなくてもよう御ざいますよ、さッ其後を伺ひませう。

綠彌　（恨しげに康子を視つめて）いやもうよしませう、あなたの冷ッこい顏を見ると、話す元氣も消えてしまふ、實にあなたは冷酷だ、まるで此石膏像の樣に冷い、六年前の十一月十四日の晩、僕に、あの苦いくるしい引導を渡した時の、あなたのお父さんの顏つきにそッくりだ、夢に見たスフインクスは、務さんぢやなくて、あなたと駒塚さんだつたかも知れない、僕が今日恁うやつて來たのは、昨夜見た惡夢のことはさ恐しさをあなたに話して、此裸美人の石膏像を捧げたなら、情け知りの往時の康子さんにかへッて、忘れても言ふまい、陰氣にも出すまい、目付にも覺られまいと、無理無體に、駒塚さんの前で誓はされた兩人の中の大秘密をも六年振に語りあひ、藪の上から人手に渡した罪の子の行方をも聞かれることと思込んで來た

のだが、手首を僕に握られたといつて、剽輕な聲出したり、顏しかめたりなさる處を見ると
もう僕の事なざ、路傍の人ほどにも思つてなさらんことが分る。末の徹らぬ戀に寢れて戀に
死ぬ運命を背負て生れて來た僕の不幸は、貧血症が肺結核と改名して、地下六尺下らなけれ
ば尋常人になることは出來ますまい、ではもうこれでお暇します、二度とお目にはかゝり
ません、左樣なら、（行かうとする）

康子　（とめて）其樣に腹を立てるもんぢやありませんよ、まア下に居て私の言ふことをお聽き
なさいよ。

孫彌　いやもうあなたの異見は聞き飽きてます、また和さんと結婚しろといふのでせう、其
樣事なら御免だ。

康子　だッて其れがあなたのお爲だらうぢやありませんか、和子さんを奧さんにして早く身
を固めておしまひなされア、小母樣も安心なさるし、私達も何樣に嬉しいか知れませんわ、
和子さんだッてもう二十二におなりですもの、左樣何時迄もお父さんの世話ばかりして、萬
年新造でおいでなされるものでも御ざいません、務の勘當が赦て、私達が家へ還れる樣にな
れば、さしづめ用のなくなるおからだ、あなたさへうんと仰有れば、先樣は開いた口へ彼岸
のお萩、五六百俵の分家地持つて、二ッ返事で綿帽子お冠りにならうといふ此上もない結構

なお話し、其結構なお話しを、私のやうな柳原物に未練殘してお取外しなすッたら、あとで
屹度、御後悔遊ばすに極つてゐます、私だッて、金鵄勳章お貰ひなすッた勇士と、捕虜にな
つた卑怯者とを一緒くたにして、肩身狹い忌な思ひ致したくは御ざいませんが、世間といふ
奴小姑があつて見ると、左樣無茶な眞似も出來にくい仕儀、其りや情もないぶッとうぎりの
猪の毛のおッたッたやうな務を捨てゝ、菫の花の匂ひ床しいあなたと一緒になつたら、お互
ひの心持は此上もなく樂しいでせうけれど、其閉目は丁度務が村の人から後指さゝれると同
じやうになるばかりで、內の樂しみを外の苦しみが叩き消してしまふだらうと存じますから、
これは考へた上にも考へなけりやお互ひの損、慾う申したら、戀には損も德もないと仰有る
かは存じませんが、其れは若い處女の時分の戀、世の甘さ辛さを咀嚼わけた者の戀は、氷柱
の彩色ぢや滿足しません、漆でもつて固めた上、膠を塗り金蒔繪したものでなくちや忌です。
這樣事は百も、二百も承知していらッしやる癖に、其樣無理仰有るのは、矢張り御病氣の所
爲ですよ、發生して早く快くなつて、其れからゆッくら相談しようぢやありませんか、私は
何でも末のもとほらない事は嫌ひ、鎌の柄だッてすげかたが惡いと扱けちまひます。ね、左
樣でせう、此石膏像は、私頂戴して置きますよ、慶爺に預けて、鼠にも嚙ましません、御安心
遊ばせ。

此以前より康子の父、駒塚順一、勝口より入りたる心持にて、暖廊から折々首を突出して此方を窺ふ、兩人知らず。

緑彌　何だか僕には分らなくなつた、兎に角、此裸美人はあなたの所有です、今日はこれでお暇しませう、能く考へて見ます、病氣も癒るものなら癒しますよ、ぢや失敬。

康子　氣をつけていらッしやいまし。

緑彌　ありがたう。

緑彌去る。

順一出づ。

順一　(康子の肩をたゝき)康子。

康子　(少しおびえて)は——。

順一　惚いたな。

康子　は——。

順一　まだあんなこと思つてるのか。

康子　何がです。

順一　何がつて緑さんがさ。

康子　あなた其れを今御存じ。

順一　今御存じッて、お前が言はないで知るもんか馬鹿な。

康子　言つていゝ事なら云ひますけれど、面白くもないことをあなたに聞かせるでもないから言はなかつたの、惡いですか。

順一　惡いこともないが困つたものだ、邪魔になるからな。

康子　何の邪魔になるのです。

順一　(あたりを見廻し)なには何うした務さんは。

康子　家へ行きました。

順一　えッ家へ。

康子　はア家へ。

順一　歸つたのか。

康子　いゝえまだ歸れるか何うだか其邊は確かでありませんけれど、瀬踏みに行つて歸つて來た慶爺が、南風だッて、大層悅んでゐましたから、惡い事はなからうと思ひます。

順一　左樣か其れは何より結構だ、俺は今裏口から入ッて來たが、お前と緑さんばかりで、慶爺も相槌の若者も務も潔も見えないから、何うしたことと思つて居たが、ぢや皆本家へ行

ッたんだね。

庶子　はア若い者は遊びにでせうけれど、慶爺と務と潔は家へです。

順一　こいつは運が向いて來た、實は今日恁うやつて來たのは、お前の心持次第では務さんと別話しにして、布川の佐次へ嫁入せやうてえ魂膽の魂膽の、其又魂膽の魂膽を、ちつくり相談せうともつて來たのだが、左樣聞けば佐次よりも此方が蔓だ、堤防でどか儲けしても、樣利株が義務株に早代りした今の俺には、盲龜の浮木優曇華の、花待ち得たる今日唯今、いざ尋常にといふ大けれんだ、有難い〳〵、これで助かる、天道人を殺さず、よくいつたものだ、俺は直ぐに本家へ行くぞ酒でも買つとけ、前祝ひだ、賴むぜ。

順一去る

庶子　まア何といふ遽てかたゞらう、お父さんの樣でもない、いくら困つてるッてあんまりさもしいわ、まるで先刻の法界節みたいだよ、忌な(舌を出して首をちゞめる)

木原嘉七(前額に古疵あり)出づ

嘉七　(庶子を見て)お……お嬢さん、こ……今日は——。

庶子　お〳〵嘉七。

嘉七　おひ、おひ、おひ、お……。

庶子をかしさを耐へて俯向く

(二)　地主の寢室

上手金屏、下手板目の杉戸、正面床、違棚、押入。

床の間には老四郷の書『我有千糸髮、紫々黑於漆』云々の巨幅を懸け、違棚には、報德記、二宮先生金言錄、尊德翁一代記、給卷物、農業全書、農業器具圖解等の書類の紅紫金銀さま〳〵なる小口を見せ、違棚の前上床の中央よき處に尊德翁の木像を安置す。

老地主加納宏藏、病臥、娘和子と對話。

(道具廻る)

和子　お藥を召上りまし。

宏藏　うゝ(なかば身を起して藥を服む)　まだ務は來んかの、何しとるかな。

和子　だッて往復り一里はあるぢや御ざいませんか、幾ら急いだッて、左樣早く來られるもんですか。

宏藏　むゝ左樣ぢやの、年をとると氣がせいてならん(枕頭の時計を見て)　はうまだ廿分しか經たん、あと半時分は待たにやならんな。

和子　いゝえ、其樣にかゝらなくてもおいでるでせう、慶銀治は足が弱くても、兄さんは御

丈夫だから十五分かゝりやおいでられます、もう直き、ほら足音が聞えます。

宏蔵　はッはッ馬鹿をいふ、其樣甘い手には乘らん、俺にも耳がある。

和子　ほゝゝゝお父さまの耳はきくらげ。

宏蔵　なに。

和子　聞えなけりやよう御ざんす。

宏蔵　口の惡い奴はッはッはッ（病苦を忘れて笑ひながら）時になには――えゝと、鰐革の手文庫は持つて來たか。

和子　はア持つて參りました。

宏蔵　錠は。

和子　錠も此處に御ざいます。

宏蔵　開けて呉れ。

和子　はい（錠をあける）あかりました。

宏蔵　紫の袱紗に包んだ細長い物があるぢやらう。

和子　（文庫の中を探して）御ざいました、これですか。

宏蔵　おゝ其れ〳〵、此方へ寄越せ（袱紗包を受取りて結目を解き）これをお前知つとるか（七首を出して和子に渡す）

和子　（七首を恐しく手に取上げ）存じて居ります。

宏蔵　務の手から俺の手元へ戻つて來た理由も知つとるな。

和子　はい。

宏蔵　扨いて見い。

和子七首の鞘を拂ふ。

宏蔵　曇りはないか。

和子　（鉈子さきより視おろしつゝ）御ざいません。

宏蔵　どれ（七首を逆に拔き持ち）むゝ立派だ、一點の曇りもない、務を殺す爲にロシヤまで行き、殺す筈の人の懐に温められて又日本まで歸つて來た去年の夏見た時に寸分違はぬ燒刃の匂ひ、切尖の鋭さ、みだれの堅さ、村正は又格別、これを見い、此鉈子先に一筋抉る樣に食入つた痕があらう、此處だ、俺の意見と務の意見とが毎時火花を散らす燒點は、正宗が村正を破門したのも此殺伐の氣があるからぢや、な、分つたか、俺の亡い後はお前の便りは務ばかり、併し頼みにはならんぞ、糧繩があつてさへ傑い事をする男ぢや、糧繩が切れて見い、加納家の財産位一擲して悔いまい、其れが神の聖旨だと言はう、俺やお前の信念と、務の信念

とは全で違ふ、俺達は二宮明神の教へを奉じて保守的信仰に住して居るが、務は西洋風――基督教風の進取的信仰に立脚して、常に百尺竿頭一歩を進めようと心掛けてる。惡くはない、えゝ事ぢや、が、猛烈過ぎる、火の樣ぢや、風の樣ぢや、丁度此村正が人の血を嗽食る時の鋭さに比べられる。憎くゝはないが恐しい、よく話す事ぢやが、あれが六歳の孩、子守に手を引かれて、亡なッた阿母さんと一緒に、お宮詣りに行つた歸り、子供の喧嘩を見て中へ飛込み、人數の尠い方へ加勢して、十五を頭に六人の對手を此方は僅た四人で追卷り、逃損なつた水車番の倅の嘉七の頭を駒下駄の齒で踏付けて額口へ大きな穴をあけたといふ逸事があるが、吃の嘉七の口疵が大きくなると同じ比例で、あれの膽玉も大きくなり、到頭あゝいふ、我强い人間になッちまつたが、考へて見ると矢張俺が惡いのぢや、教育の方法さへ宜ければあゝはならぬ。强くなれ强くなれと、無暗に强くなることばかり奬勵した結果があれだ、蒔いた種は刈らねばならぬ、誰を恨むことも無い、運を天に任せて、二宮明神の仰有つた、天と地との法則に從つて行動すれば、我々は欲せずとも、天は必ず我々を助け給ふといふお言葉を服膺して、俺は今日財産の一部をあれに讓る。一時は殘らずお前にと思つたが、年長者をさしおいて年少者に不相應の權力を與へるのは、逆ぢや、暴ぢや、則を破るのぢやと恁う思ひついたから、三分の二をあれに讓り、三分の一をお前に讓る。お前の分は三分の

一、いゝか三分の一ぢやぞ、六千石の三分一は二千石ぢや、大掴み三十萬圓の地主、務から見れば半分ぢやが、縣下では二番目の地持ぢや、確乎しろ、劣敗取るな、祿彌と夫婦になつて、能く加納家の家憲を確守り、殖す事は出來ずとも、減らす樣な事はするな、之だけは俺の頼みぢや、餘裕があらば、務の監視も爲て貰ひたいが其れは何うでもえゝ、唯一身の清さを守り、人に後指示されちやならんぞ、えゝか（七首を再び和子に渡しながら）さッ此はお前に遺る、此亂れの上の一文字に心をつけて修業するのぢや、修業して村正の恐しさと正宗の尊さとを悟るのぢや分つたか、務と一緒にロシヤに亡びる運命を齎して行つた腹切刀がお前の前途を開拓する、護身刀に成るか成らぬかはお前の心の持ちよう一つぢや、心こそ心をはかる心なれ、心の仇は心なりけり、此歌の意が分れば、俺が此七首をお前に讓る理由も分らにやならん、あの幅を見い（床の間の幅を指し）我有千糸髮、毵々黒於漆、我有一寸心、皓々白於雪、我髮猶可斷、我心不可截（跪みさし）心の仇は心なりけり、な和、分つたか。

和子　（熱心に）能く了解まして御ざいます、此刀は一生肌身を離しませんから御安心下さいませ。

安藏　む、能く言つた。其れでこそ俺の精神を讓る俺の娘ぢや、其袱紗へ包んで、帶の間へ挿んで置け、落すなよ。

和子　はい（七首を袱紗に包む）

小間使お松出づ。

お松　若旦那様がお歸りで御ざいます。

宏藏　むゝ左様か直ぐに此處へ。

お松去る。

和子七首を帶に差込む。

務出づ。

務　（宏藏の枕邊近く寄りて頭を下げ）御機嫌よう。

宏藏　久し振ぢや。

務　（無雜作に）御病氣は如何です（宏藏の顏を視つめて）可厭お色だ（和子に向ひ）熱は。

和子　（辭儀して）は、熱はもう悉皆お除れなすつたので御ざいます。

務　其れはいゝ、熱さへお除れになれば心配は要らん（宏藏を見て）お心持は。

宏藏　今朝よりも大分快い、此分では死ぬ様な事もあるまいが、此冬は六ケしからう、胃病患者に寒さは敵ぢや。

務　冬になつたら熱海へでもいらッしやいまし、和を伴れて、彼處は寒さ知らずですから貴方には持つて來いだ。

宏藏　熱海へ行けるやうだとえゝが覺束ないよ。

務　左様いふ氣の弱いことを言つてらッしやるから病氣に負けるです、僕は阿父さんの不興を蒙つたけれど、自分に少しも病ましい處がないと信じてますたら、何時かは屹度あなたのお心が解けるだらう、心配することはない、呑氣にやれと、毎日自家の地所の測量ばかりして居たお庇蔭で此通り肥りましたよ、神經質の人間だと恁うはいかない、何うして小松の藤さんよりや痩せて〳〵鐵火箸の様に痩せますよ、心配は毒、呑氣は藥、阿父さんも少し呑氣になるか、進取的活動的になるかしなけりや不可せん、老齡だ〳〵と仰有つても、ピスマークやグラッドストンなぞから見るとまだ子供だ、隱居するなんてけちな考へがあるならおよしなさい、今日恁うやッて僕をお呼びなすつたのは多分其れだらうと思ふが、僕は反對だ、隱居するのは、棺桶へ兩方の踵をさらひ込んだ人間のする事です、其様不吉な不眞面目な事よりも僕の說に贊成して下すつて、所有地一切を大農法で手作する計畫を立てやうぢやありませんか、愉快ですせ、蒸氣犁を使用つて、一日に五六町歩すばア り〳〵耕して御覽なさい、自家の地所が幾百町歩あつても二三畑使用へば十日も出ないうちに耕いちまひます。ね、あなたが家に居て會計の括りして下されば、僕は外へ出て雇人を使役して勞働します、小作農と自作農の收入の多寡は僕が云はずとも知れきつた話し、自家の取米は幾らあるか知

らないが、まア假に二萬あるとして自作農に換算すると略と五萬にはなりませう、何うです二萬と五萬、今の小作を月給制度にして皆屋人としても此方が割ですよ、第一大國的巨人的だから面白い、滿洲や大ロシヤの悠々した大陸的の自然に觸れた一昨年の心持な、此加納村のせゝこましい島國的不自然の毒瓦斯に中毒して居た期當以來一年の心持に比較ると、一方は奈良の大佛の前で詰まつた小便を思ふ存分ひよぐる樣、一方は淺草觀音の厨子の前で、放きたい屁を放きかねて、ちんまりかしこまつてる樣なものだから、獅子と家鴨の足角力で、まつたくお話しにも何もなッたもんぢやありません。何うです、僕の說に從つて、病氣を癒して、之から一花咲かす氣はありませんか、お父さんに其氣さへあれば、藥も醫者も要らない、今日思立てば明日全快る、覿面です、之程利く藥はない、僕はロシヤで病氣したが、每時埃及のスフインクスの像と角力取る氣になると直ぐなほつた、えらいものです（床の間の幅に目をつけ）此に懸けてある老西鄕も、腹が太かつたお庇蔭で、德川三百年の天下を物の美事の切落し、返す刀に我と我胸板を二萬五千の健兒と一緒に屠ッたのです。死ぬならあゝいふ風に死なにやア嘘だ、死花咲かすといふけれど、實際死花咲かせなけりや人間と生れた甲斐がない、阿父さんなぜ親讓りの財產を後生大事に守つたといふだけで一生の歷史は地味なものだ、之から死花咲かす覺期でもなさらないと、加納家十五代の彩色は長者議員時代の金砂

子退けると墨畫の山水か四君子の淡彩になつてしまふ。僕は阿父さんに、色の強い油畫を强ひはしないが、せめて錦繪ぐらゐの彩色を加納家の明治史に殘したい（和子を見て）なア和、お前は何う思ふ、矢張り俺の說を贊成しようね。

和子　なんですか私には兄さんの仰有る事は分りません。

務　なに、了解ん、お前も高等女學校を卒業して女子大學の二年迄行つた女ぢやないか、此位の理窟が了解なくて何うする、馬鹿者。

宏藏　まア左樣大きな聲をして呉れるな、頭痛がしてならん。

務　でもあんまり譯が解らなすぎますよ、西洋なら三歲兒だッて解る理窟だ。

宏藏　西洋人と日本人の頭は別だ、俺にさへ分らない理窟をこれに何解るものか。

務　貴方にも解らない——。

宏藏　解るといつた處で實行することが出來にや解らんも同じぢや、和子が解らんといふ意味も多分左樣ぢやらう。

務　困つたものだ。

宏藏　困らずともえゝわ、今日お前を呼んだのは、お前の察し通り、全財產の三分の二をお前に讓り、殘部全額をこれに遺り、而して俺はお前の嫌ひな隱居するといふのが趣意。つま

り今後の家政をお前の自由に任さうといふ腹ぢや、えゝぢやらう、潰さうと起さうと油斗に せうと錦紗にせうと勝手氣儘、多年籠中鳥、今日負雲飛事も出來れば、思ふ存分驥足を 伸ばすことも出來よう、俺は今後四千石の身代と一緒にお前の奉養を受けるけれど、これも 全財産の三分の一貰つた以上、俺を養ふ義務がある、即ち精神的に俺を養ふ義務がある。と すれば、俺の肉はお前の物、俺の心はこれの所有ぢや、えゝか、親の靈肉を兄妹で二分する といふも可笑いわけだが、これも運命ぢやから仕方がない、諦めろ、今に公證人が來れば二 千石と一緒に俺の精神はこれの方へ移るのぢや。お前が村正の匕首を俺に返した刹那の行爲 が即ち今の結果を見る、河源の艙となつたのぢや、お前の主義は大農だ、俺の主義は小農 だ、小農にも利があれば大農にも利がある、其利のある處に立脚して、俺の靈がこれへ行 き俺の肉がお前へ行く、不思議はない、當然だ、無論反對ぢやあるまいな。何うぢや。

安藏　了解ました。謹んで貴方の肉と四千石の田地とを頂戴します。

和子　よし（和子を見て）お前は何うぢや。

安藏　私もお受けします。

移　其れで俺も安心した。

慶次、潔を伴ひて出づ。

潔　（手をついて）お祖さん今日は。

安藏　お、潔か大分見ないうちに成長くなつたな、阿母さんは達者か。

潔　達者だよ（和子を見て）叔母さん今日は。

和子　今日は、大層おとなになりましたね、此方へ來つしやい、美味を上げるから。

潔、和子の膝へ乘る。

仲働お鶴出づ。

お鶴　六角さまと仰有る方がいらッしやいまして御ざいます。

安藏　むゝ、待兼ねた早くこれへ。

お鶴去る。

和子　私はあちらへ行つて居りませうか。

安藏　何かまはん、慶假治も潔も居れ、證人ぢや。

公證人六角民輔出づ。

安藏滿圓の上へ起直る。

和子介抱。

六角座に着く。

務　さア何卒（蒲團をすゝめる）

六角　失禮（蒲團を敷き）御用は。

宏藏　（和子に向ひ）手文庫。

和子手文庫を宏藏の前に置く。

宏藏　（手文庫を探りて一束の書類を取出し）態々お呼びたて申したのは、家督相續、分家、此二つの公正證書を調製して頂きたい爲なのです。此に家督人の財産目錄と分家人の財産目錄とが御座います、御覽下さい（書類を渡す）

六角　（書類を見て）お妹子さんの御分家地に越穀は御ざいませんかな。

宏藏　ありません。

六角　貴族院議員就職中の積立金金額を和子に分與すと御ざいますが、これは、公債にでもなつて居りますか、其れとも銀行の方へお預けで。

宏藏　銀行へ預けてあります。

六角　分家宅地の選擇は矢張りあなたがお指圖になりますか。

宏藏　無論私が指圖します。

六角　（和子に向ひ）何卒お机を（宏藏に向ひ）御隱居料の件に就ては何の御指定もない樣ですが、

これは御無念ぢやありますまいか。

宏藏　其れは件の方でいゝやうにはからひませう、私は親から讓られた財産を、親が私に讓つた通り子供達に讓渡せば其れでいゝです。

六角　はゝア、では早速調製いたしませう。

和子公證人の前へ机を置く。（此以前より凝、慶次の膝に眠る）

公證人　證書を作る。

小間使お松出づ。

お松　駒塚の大旦那さまがお見えになりました。

順一出づ。

お松去る。

順一　其後よ、宏藏に挨拶して座に着く）

務目錄

宏藏　ようこそ。

順一　お加減は。

宏藏　何うもはッきりしませんでな。

順一　つかへますか。

宏藏　停滯る位ならまだえゝが、きゃ〳〵するのぢやからもう長い事はありません、何れわしの亡い後は、子供の厄介はあんたに見て貰ふ心得ぢや、引受けて下さい。

順一　宜しい、及ばずながら盡力します、併し其樣心細い事いはずに、石に嚙り付いても直る氣で居なすッたら宜からう、せめてこれが（涙を拭し）學校へ行く頃まで丈夫で居にやア嘘ですよ。

宏藏　わしも死にたい事はないが、壽命には勝たれない、覺期するのさ。

順一　（公聽人をさし招き）六角さんな（宏藏に）あんた財產を皆務に讓んなさるのか。

宏藏　いや三分の二讓る心得ぢや。

順一　あとはな。

宏藏　あとは和につけて分家さすのぢや。

順一　三分の一を和さんに讓つて分家、思切つた事しなさるな、三分一といへば三十何萬て身代ぢや、えらい、が、務は不憫ぢや。

宏藏　なせな。

順一　百の物が六十に減つちや、彦根の城の鯱鉾へ櫻田の血染の雪ひんなすッた樣なもので、御大老の首だからな。

宏藏　併し加納家の祀を絶やすまいといふのは是非恁うしにやア納まらんよ、お前の婿でわしの伜ぢやが、務は御承知の通りの我武者ものぢや、何を爲るか知れぬ。事によると、百萬の身代を、千萬にも一億にも殖すも知らんが、殖す力のある奴は又減すとも下手ではない、わしは其表裏が心配ぢや、紀伊國屋文左衞門がえゝ手本、恐いことぢや、掃部樣の首でも家の祀にはかへられぬ。

順一　感心に考へたね、宜からうよ、和さんが贏つか務が勝つか、見物だ、わしは長命して見物しよう。

深不意に泣出す。

和子聽せよる。

第二幕

（恵比須講――十月廿日）

地主の後園

築山泉水、處々に岩組、上手に二宮明神の祠、下手に榎の大樹、根下に瀬戸の樽を置く。
正面築山のなだれを透して、白帆點々青波簾の如き利根の長江、城壁に髣髴たるケレツプ式堤防、稲田、布川町の碧翠など見え、秋盒三四林の實を啄みて樹梢に鳴く。
賑かなる進軍曲にて幕開くと東京藝者春吉、榎の根下の樽に腰かけ駒塚順一と對話。

春吉　何うなさるお心得なの。
順一　何うッて仕方なけれァ婿に出して貰ふさ。
春吉　お婿さんて此處の旦那。
順一　左様よ。
春吉　駄目でせう評判の惡い方だから。
順一　評判が惡い――。
春吉　東京の新聞に出てましたよ、親不孝で卑怯者で、我の強い亂暴者で、戰爭に征つて捕

虜になつて、泣きッ面かいて、お情けでロシヤから送りかへされた、謂はゞ國賊同様の痴者だッて、其れは〳〵讀んだばかりでもはく〳〵する様な大袈裟な惡口、みだしは、前貴族院議員加納家の紛擾ッていふんでしたわ。
順一　愕いたね、其様惡口が出て居るのか、困つたものだ。
春吉　だから頼みにやアなりませんよ、およしなさい。
順一　なに人の噂程惡人ぢやない、あれでなか〳〵面白い處がある、俺が泣きつきゃ二三千位直ぐ出すよ、太ッ腹だ。
春吉　左様ですかね。
順一　逢つて見な惚れるぜ。
春吉　いやな。
順一　滿更でもあるめえ、俺の様な禿頭より、よッぽどいゝ筈だ。
春吉　頭が禿げてゝも深切な金放れのいゝ人が私ァ好きさ。
順一　へん、口と腹は更紗染の表裏だらう。
春吉　なんとでも仰有い、卅面下げて、返咲した女の目は、錦と襤褸位選擇けますよ。あんたのお世話になつてたのは此方の奥さまが十三の時だッたぢやありませんか。

順一　違ひなし、過つた〜。

春吉　其れは左様と、今日私を呼んだのは誰でせう、まさかあんたぢやありますまいね。

順一　俺のもんか康子の策略よ。

春吉　え、お嬢さんの策略（考へっ）ぢやまだ花ちゃんに未練があるんですね。

順一　大ありさ。

春吉　其様事して此處の旦那に知れたら何うします。

順一　何うするか康子の心意氣が俺に分るもんか。

秀吉、〆太ほか數人の藝妓、手に〳〵鬼灯提燈を提げて出づ。

秀吉　（春吉を見て）何處へ行つたと思つたら、本當に油斷もすきもならない、お樂しみ。

春吉　勘忍してお呉れよ、今ちいッと旦那に用があつて、其れであの——。

〆太　其れであの何うしたの、つねるよ。

春吉　あやまつた〜其代り何でもお前方の自由になるよ。

秀吉　ぢや罰盃といふ事に議決しようか。

〆太　罰盃は面白くない、罰踊とやらうぢやないか。

皆々　其事々々。

秀吉　多數決だよ、春吉ッさん何かお踊り。

春吉　仕方がない、ぢや三味線を彈いてお呉れ。

秀吉　何を踊るの。

春吉　外記猿。

〆太　よいしよ。

秀吉三味線を彈く。

春吉踊る。

皆々　やんや〜。

秀吉　（順一に向い）旦那あんたもお踊んなさいな、お神さんばかしに罪をかづけるもんぢやありませんよ。

順一　俺は藝無し猿だから外記猿なんか踊れやしない。

秀吉　踊れなさやお唄ひなさいな。

順一　唄うことも出來ないよ。

〆太　嘘々春吉ッさんのお仕込みで常盤津がお上手な癖に。

順一　常盤津はさておきトットコ節も俺には出來ない、御免々々（と逃げにかゝるを皆々袂を捉へて

逃がさず）

〆太　三國一の婿取嫁取。

皆々　三國一の婿取嫁取。

秀吉　唄『芽出た〳〵の若松さまよ、枝もさかえて葉も茂る』

皆々　唄『葉も茂る』。

秀吉　唄『さッさ葉も茂る（と唄ひながら順一を中にとぢこめ一同手をつなぎあはせてぐる〳〵廻る）大工殿より木挽は憎や、同じなかをば引分る』

皆々　唄『さても好い子や黒木賣の娘、戀の重荷か擔ぎつれ』

皆々　唄『山を通ればいばらがとめる、茨放しやれ日が暮れる』

〆太　日が暮れる。

秀吉　ほんに日が暮れますよう（といひながら順一をひッとらへ）さあさ皆さん手を貸した。

皆々　わッしよい〳〵わッしよい〳〵。

一同順一を肩上げする。

順一ひッくりかへって腰を打つ。

春吉はせ寄って介抱する。

農番頭杢平、下男數人に配銭を入れたる大笊を持たせて出づ。

杢平　（苦い顔して）大分賑かぢやがアせんか、お前方、お客さまを粗末にしちや困りますよ、百姓も人間だ、もつと眞面目に酌をして遣つて下さい、店座敷も奥座敷も、女衆無人で天手古舞だ。

秀吉　おやまア、すみませんね、ちつとも知らないもんですから、皆さんお座敷へ參りませう。

〆太　春吉さんも旦那を拉れていらッしやいな。

春吉順一をいたはりて先に立つ。

藝者皆々氣の毒氣にまはりを固み、何か饒古りちらして下手に入る。

杢平　困つた奴等だ、怠者、忌になるぜ。

下男甚六　酔つてるんでせう。

杢平　何うだか。

下男又八　高え錢う取れアがつて朝から何もしやアしねえ。

下男軍二　昨夜だッて汽車勞れだとか何とかいッて早くから寢た癖に、本當に冥利知らずだ。

下男傳三　番頭さん、一人前十圓だッていひましたね。

李平　左様よ。

傳三　何故其ねえに出してまでもあんな女ッちよ呼ぶづらね。

李平　俺にも分んねえが、若旦那が――ほいもう若旦那ぢやアなかつたッけ、旦那が呼べッていひなさるから呼んだのよ、高いたッて安いたッて俺達にや歯がたゝねえ。

甚六　駒塚さんを撫つてた藝者ア何處で見たような顔ですね。

李平　左様よ、俺も先刻から考へてるが思ひ出せねえ。

軍二　あいつアもう婆アだせ。

又八　九尾の狐ッて代物だね。

李平　九尾か十尾か知らねえが其様事より這様事だ、鎌を早く二宮様へあげるがいゝ。

傳三　ほんに左様だッけ、よいしよな。

皆々笈を搖いて社前に運ぶ。

李平　（社前にぬかづきつゝ）南無二宮大明神いやちこなる大御心をもちて諸々の凶難、災難、困難、魃難、疫難、火難、水難、風難、雷難、虫難、病難、劍難、盜難、天難、地難、一切の禍をはらめきよめて此秋の實りの彌榮えに榮え山鳥の尾のしだり尾の長々と稲の穂末の地を掃くばかりの豐作に腹皷うたしめたまへと恭ひ〳〵畏み〳〵恐れみ〳〵て此の例年の配鎌三千一百本のうち新鍛への逸物精選て卅一本を御前に供へ常にあらたかなる御惠の萬分一に酬い奉るとかしこみ〳〵まをす。

一同禮拜。

李平大笈を社前より取りのける。

下男立ちて笈を擔ふ。

皆々無言にて上手へ入る。

順一出づ。

順一　や、ひどい目に逢つた、腰を打つたは未い丶が、大切な紙入を振落した、はて誰ぞに拾はれねばよいが（四邊を捜し）確か此邊でどんとやられて、あッといふと腰が痛んで目がくら〳〵とした筈、むゝ、此芝の中にあるも知れん（芝原をあちこち捜す）

康子出づ。

康子　お父さん、何をお捜しなさるのです。

順一　お丶康子か、よい處へ來て呉れた、今紙入をおッことしたが、何處へいつたか見えないゝ、十圓紙幣七枚の存亡だ捜して呉れ、お前のい丶目で。

康子　捜當てたら一枚私に下さいますか。

順一　こすい奴、仕方がない奥らう。

康子笠取眼にて庭中を捜廻る。

康子　ありましたよ。

順一　あつたか。

康子　(笹の葉をつまみとり)これでせう。

順一　(手をさし出して)ばッ、馬鹿な。

康子　ほ、、、、。

順一　冗談ぢやない、無いとなれア今日の客殘らずを泥棒と見にやアならん大事だ。

康子　此處でお落しなすたんですか。

順一　左樣とも。

康子　覺え違ひぢやありませんか。

順一　(かぶりを振り)いや確かだ、間違ひなし、正眞正銘、大丈夫間違ひなし。

康子　酔ッてらッしやるから當にやアならないわ。

順一　當になるよ、どんと落されて目が眩つて、其れから彼方へ行つて春吉と別れると懐がもぬけの空、取つてかへしての今がこれだから大丈夫、正眞正銘間違なし。

康子　幾ら入ッて居るんですッて。

順一　七十圓。

康子　何うして其樣に持つてらしつたの。

順一　務さんに借りたのだ。

康子　何時。

順一　今朝。

康子　早いわねえ、私ちつとも知らなかつたわ、何するッてッてお借りなすッたの。

順一　まア其樣調立は後でもいゝ、肝腎の紙入が紛失したらもう俺の頭は下りさりだ。

康子　其れ程大切な物なら粗末になさりやいゝに。

順一　粗末にしはせんが胴上された時振り落したのだ。

康子　誰に胴上なんかされたのです。

順一　盜者によ。

康子　春吉。

順一　うんにや他の奴。

康子　本當にあなたは助平ねえ、年甲斐もない。

順一　まア左樣頭ごなしにするな、お花を春吉に預けてあるから、俺も彼奴等にや坊ちやま扱ひされて態と甘くなつて默つてるんだ。潔よりもお花の方が俺の爲にや初孫で可愛さが別だからな。

康子　うまく仰有るよ。

順一　うまくてもまづくてもいゝ、さアもう一遍搜して呉れ。

康子　此方にはもうありませんよ、其泉水の水草の中ぢやありませんか。

順一　左樣さな。

康子　（水草の中を搜し）ありましたよ。

順一　今度はほんまか。

康子　これでせう（紙入を出す）

順一　むゝ其れ〳〵（紙入を受取りて中をあらため）萬歲々々。

康子　お約束の一枚。

順一　うんよし〳〵（紙入より一圓紙幣一枚を出して康子に渡す）

康子　一圓紙幣ぢやありませんか。

順一　一圓紙幣よ。

康子　十圓紙幣一枚ッて約束ぢやありませんか。

順一　紙幣一枚ッて約束だから一圓紙幣一枚で澤山だ。

康子　あら――。

順一　はゝゝゝ。

康子　（恨めしげに）覺えていらッしやい。

順一　はゝゝゝ。

康子　いゝわ私お父さんのいふ通りにならないから。

順一　これ〳〵其樣事いつては困る、お前より外頼のない阿父さんだ、悉皆冗談、悉く皆冗談、ほら十圓（と紙入から十圓紙幣一枚を惜しさうに拔きとり）いゝだらうこれで妥協だ、其代り先刻頼だ事は今日中に目鼻をつけて置かないといかないせ。

康子　（紙幣を帶にはさみ）大丈夫よ、先方が私に惚れ拔いてるんだから、懸引もなにも要れアしないわ。

順一　併し務さんに知れちやアまづい、餘ッぽど旨く遣らないと、出るの引くのッて騷ぎになるから用心するがいゝ。

康子　出るの引くのッて騷ぎになれア、なほといゝぢやありませんか。

順一　なぜ。

康子　なぜッて祿さんのふしだらがお員さんに知れるからよ。

順一　其れァ知れるに極つてるが、お前迄巻込まれた日にや面蜂取らずだ。

康子　いゝえ其樣事はありませんよ、務の氣前は私ちやんと呑込んでゐますから、恁うならば、恁う、あゝならあゝと旨ァく糸を引ッ張るわ。祿さんとなんしたッて、無理になんされたッて泣いて見せれァ、直ぐ私を勘忍しますよ、其樣事は平氣だから。

順一　左樣か知ら。

康子　左樣ですつて、まァ見ていらッしやい、下手な眞似はしませんから。

順一　何分頼む、祿さんと和さんの緣さへ切れりァ、祐之助を後釜に据える魂膽は案じるよりゝ産むだ、宏藏さんを丸め込むなァさのみ六ケしいこともなからう、八合目泊りの九合目だからな。

康子　分つてますよ。くどいわねえ。鍋に耳あり藥罐に口よ猪口と話しと出來にくいッて都々一を私あなたに教はつたわ。

順一　違ひなし密かに〳〵。

康子　（祿彌を見出したる心にて）來ましたよ。

順一　誰が。

康子　祿さんが。

順一　どれ何處に。

康子　ほら先方に。

順一　むゝ成程、俺は外すぞ旨くやんな。

順一横込の中に忍ぶ。

祿彌出づ。

康子　祿彌さん〳〵。

祿彌　（康子を見て）おゝ康子さん（つか〳〵と進みより横の下の相（腰かけ）どんなに捜しましたらう、いつから居ました。

康子　今少し前から。

祿彌　僕は務さんの大農演説をあなたも聽いてるとばかし思つたから店座敷の方ばかり捜してましたが左樣ぢやなかつたんですね。

康子　ほゝゝゝあんな陳芬漢な演説が私に了解もんですか馬鹿らしい。

祿彌　其れァ左樣だらうけれど、夫婦の情は格別だからね。

康子　夫婦の情ッて、あなたと一緒になつてれアしまいし、お門違ひですわ。

祿彌　嬉しがらせを言ひますね、今日は何うかしてるらしいね、酔ッてるの。

康子　いゝえ。

祿彌　だッて毎時の冷淡た大分目つきも顔つきも違ふもの。

康子　あなたのお神さんになりたいからなの。

祿彌　ふゝ、其手にやア乗らない、僕アもう頃日で懲々した。

康子　だッてあれア人目があつたからですよ、爹が暖簾の後で聞いてゐましたもの。

祿彌　えッ阿父さんが。

康子　はア。

祿彌　本當に――――。

康子　嘘をいふものですか、私後で叱られましたもの。

祿彌　むゝ（腕組して考へる）

康子　ほゝゝゝ其樣に心配しなくてもいゝわ、爹はあゝ見えても、此處のお舅さんの樣に無粋ちやないから、一時は變に思ッたッて直き忘れッちまひますよ。

祿彌　惡い事は出來ないものだ。

康子　あら此人は眞面目だよ、忌だぬえ。

祿彌　（康子の言葉を耳にもかけず）實際惡い事は出來んものです。僕ア、僕ア本當に罪人だ、惡人だ、從兄の家内に惚れて、いや家内にならん前に不義をして、其れにも懲りず、かさね〳〵、淫奔を勸め墮落を強ひるなんて、殆ど人獸の所爲だ。あゝ何の因果で、恁うも昔の戀人が戀しいだらう、惡いと思へば思ふほど戀しさが增し、諦めやうとすればするほど意地惡く戀人の優しい聲が耳に聞え姿が目にちらつく、康子さん、察して下さい、不憫と思つて下さい、可哀さうと思つて下さい、僕は戀の奴です、惡人といはれても罪人といはれても之ばかりは諦められない、諦める時は死ぬ時だ、死なゝけりや諦めることは出來ない、あゝ苦しい、あゝ苦しい（胸をおさへて）僕が死んだら康子さん、ち、ちつとは、ちつとは、ち、ちつとは（咳入りて喀血する）

康子　あら（飛退く）

祿彌　（淋しげに血を見ながら）もう駄目です。

康子　（氣味惡るげに）せつなくッて。

祿彌　苦惱いです、併しかまひません僕は此まゝ死ぬのだから、さッ離れて下さい傳染しますよ。

康子　（ふるへながら）本當に――――。

祿彌　本當ですとも。

康子　（顏をおほいて）辯忍して頂戴よ。

祿彌　（冷かに）肺病患者の血を嘗めるほどに僕はあなたを信じちやゐない、御道理だ、諦めさせう。血を吐いたのもはじめてだが、あなたの冷たさを痛切に感じたのも今が初めて、左樣なら、もうお目にかゝりません（行きかけて振返り）此間あなたにあげた貴方の肖像は何うしました。

康子　――――。

祿彌　直ぐ出すことが出來るなら返して頂戴。

康子　――――。

祿彌　無論手元におありでせうね。

康子　（聞えぬほどに）い、え。

祿彌　ぢや、ど、何處に、ど、何處にあります。

康子　慶爺とこへ置いて來ました。

祿彌　（憤然と）廢れ女ッ（突きたふす）

康子　あれえ。

祿彌　思ひ知れ汚女（踏みにじる）

康子　人殺しい（氣絕する）

順一出づ。

祿彌去る。

順一　（康子を介抱して）氣をしッかり〳〵、これ康子氣をしつかり。

康子　（目をあき）祿さんは。

順一　逃げて行つた。

康子　こはかつたわ。

順一　大失敗。

康子　慾も德もなくなつたわ。

順一　俺も血を見ちやア閉口だ。

康子　命あつてのお金ですわね。

順一　左樣よ。

康子　卅萬圓は惜しいけれど。

順一　肺病患者は恐れる。

康子　あゝ本當に恐かつたわ（いひかけて向ふを見込み）小作達が此方へ來ます、這樣風してる處見られちやまづいわ、行きませう離座敷へ。

順一　むゝ左樣せう。

順一、康子の手を引いて上手へ入る。

木原嘉七、望月金助、狩島熊吉、島田源五、野根彌十、豐田和七、鈴木五作、名々配錄を手拭に括りぶらさげながら出づ。

源五　喫驚すらアな、何うでえ飯の食ひあげだせ。

彌十　左樣よ大農法だなんて、出來る譯のもんぢやアねえが、出來ねえからッて、横に車アを挽かれて見れア默つてられねえやなア熊さん。

熊吉　左樣とも二千五六百人もある小作の腮を干乾にせうてえな無理だ、俺ア飽くまでも反對する。

和七　一日に五六町歩も耡かうてえ犁と働きッ競ア御免だせ。

金助　一俵扱きの稻扱ん後家だふしなら、四十石扱の稻扱ア小作倒しだ、俺ア死んだッて其ねえな妖物う此村え入れるこたア承知しねえ、ひちりけッぺえだア、呸。

熊吉　先ア先刻の演說う聞いた時、小旦那横ッ面張歪めて遣りてえ思つたせ忌々しい。

源五　やッつけべえか。

彌十　此人數で。

五作　よかッぺえ。

源五　面白え。

熊吉　腮う乾上げる間にや咽う絞ろだ、寧そ燒きッつぶさうぢやねえか。

金助　燒潰しも結構だが、大屋に罪も報いもねえ、小旦那一人の憎しみだア、荒療治ア狹えがいゝ、

五作　（嘉七に向ひ）お前は何う思ふ。

嘉七　お、おれも、せ、狹え方ひゝと思ふよ。

五作　其れで極つた。一番しめよう、よひ〜〜〜。

一同　よい〜〜〜（手を打つ）

宏藏（病後）杖に縋り和子と共に出づ。

宏藏　何か芽出たい事でもあるかの。

源五　（頭を振き）いえ、ちッと其へゝゝゝゝ。

五作　前祝いでへ〳〵〳〵。

宏蔵　其れはえ〳〵、併し酒に呑まれてはならぬ、狂水ぢや、度を過すと無茶になる。

熊吉　へッ大丈夫其樣事は御ざいません。

宏蔵　左樣か、なけりや結構、感心ぢや。

金助　時に大旦那さま、あんたにお願ひが御ざいますが、お聽きなすッて下さいますか。

宏蔵　改まつてなんぢやな、事と品によれば、強ち聽かぬでもない、言つて見な。

金助　有難う御ざいます、他の事でも御ざいませんが、今日若旦那の御演説で——大慶法とかいふ七ケ六ケしい御演説で、わし共皆おッ魂消てるでがすが、あんたのお心添へで何とか若旦那理解して頂くこたァ出來ますめえかね。萬人助けだ。廿俵入れの小作ばかりが小作ぢやアがアせん、わし共も親の代から恁うやつて此方の永小作して居るだ、ちッたァ譯う察して呉んさらにや明日から路頭に迷ひます。ほんのこッた、廿俵入れ卅俵入れてえ大けえ小作達ア幾らか貯蓄もありますべえが、五俵入れ十俵入れの小ッせえ小作になると、其日のお汁の實にも差支へる者あるだんて、今若旦那いはッしやるやうに大けえ小作衆の作つてる田へ俺共の田を一緒にされちや、飯の食ひあげでわしらァへい、餓死するばかりだ。涙金の四十や五十貰つたッて燒石に雨滴浸つかせる樣なもんで何もなんねえ、ぶッかける直ぐ乾く、饑饉

年の嬰兒に乾びた乳呑ませなッて泣きやまねえと同じこんだ、二千三百五十一人の小ッぽけな小作打ッちめて、百四十七人の大ッけえ小作肥らせる趣向はえ〳〵が、二千三百五十一人の怨恨ァ何處えも行かねえ皆若旦那の魂へ乘掛るだ。幾ら膽玉太えッても、二千三百五十一人の小作共に恨まれて、安穩に眠られると思つたら間違えだッべ、其りや我武者の若旦那ん事たから、鐵砲や地雷火伏せて、屋敷周圍りよう旅順見てえにしなさるか知んねえが、此方ァ元來死狂ひだ、鐵砲だッて地雷火だッて何のこえ〳〵事あるもんだ、千人打殺す豫期なら、後の千人で立派に若旦那の首取つて見せるだ、嘘ぢやアがアせん、這奴ばかりァ爭はれねえ勘定だ、一寸の虫にも五分の魂、やすく見ると飛んだ目に逢ひますべ、なァ大旦那、あんたァ眞逆若旦那づきぢやがんすめえ、這樣綺麗な築山も泉水もいざとなりや潰されるか崩される瀬戸際だ、若旦那說きつけて、狂氣染た眞似廢させてくんさろ、金助ばかりのお願ひぢやがアせん、廿俵入れ下の小ッぽけな小作二千三百五十一人のお願いだ、尤も表向でなきや不可え、連判狀拵えて來い仰有るなら、其りや拵えても來ますべえ、あんたへなら——若旦那ぐやがアせんせあんたへなら——拵えても來ますべえ、けんども、小作と地主樣ァ親子だァ、其樣嚴格い小面倒臭え儀式せずとも、つひ此處で呑といつてしまつて、私等心安堵めてくんさろ、よ大旦那、お慈悲だ、首肯てくんさろ。

宏藏　ひ、お前の説は道理ぢや、圖星ぢや、けれども、俺には、火の玉の潰れた樣な伜を厭迫ける根氣が無い、貴族院へ出て、縣の爲に氣を吐いた頃の宏藏ぢやと、まだ〳〵幾らか務に楯突く氣力もあるが、六千石の身代兩に割つて肉も靈も骨離れした今の宏藏を、堤を突破つて勢ひ猛に突進して來る水の勢其まゝの今を盛りの務に比べると、一方は玉屋の招牌の舌出時計、一方は文明の利器とたゝへられる新聞紙刷る輪轉機其まゝぢやもの、とつても同日の談でない、氣の毒ぢやが、俺はまア手を引く、手を引いて、お前達二千三百五十一人の好きに任せる。冷淡の樣ぢやがこれより他に手段はない、不承して呉れ、賴む。

金助　はい――――。

宏藏　（和子の肩につかまりながら）俺はこれで御免蒙る、まだ何うも具合が惡い、時々胃がきや〳〵するでな。

一同　お大事に（辭儀する）

宏藏、和子と共に去る。

和七　何うすべえ。

五作　泣ッつくかな。

金助　俺ア忌だ。

熊吉　俺も忌だ。

源五　俺もよ。

熊吉　俺ア勳八等の瑞寶章だ、捕虜に頭下げ、理由ねえ（氣色ばむ）

嘉七　ぶッばなせ（吃りながら）ぶッばなせ、な、なア、お、おれ、ぶッばなさア。

熊吉　ぶッばなす。

嘉七　うんぶッばなす（鍬を打振り）も、貰つた、か、鎌で、こ、此、曰鎌で、あ、あいつん首う。

源五　面白え〳〵。

金助　賴んます。

佐十　嘉七ッさんにやア儲かる仕事だ。

熊吉　廿年前の復讐、しつかりやんねえ。

嘉七　（鍬の疵をおさへて）呸。

務出づ。

務　皆其處に何をして居る。

熊吉　（呼かれたかといふ顏で務を見ながら）へッ、ちつと其へ〳〵〳〵。

務

（平氣に）彼方へ行つて見な、今丁度蒸溜釜へ石炭を入れた處だ、人間よりも上手に働くせ、論より證據、俺の說が無理か見て御覽。さッおいで。

一同務に從ひて去る。

嘉七殘る。

李平出づ。

李平　嘉七ッさんぢやねえか。

嘉七　おゝ番頭さん、なんか用かね。

李平　若旦那知らずかね。

嘉七　いまそけえ行きなすつたばかりだ。

李平　左樣か、おほきに。

李平行かうとするを嘉七止め。

嘉七　ま、ま、待ちねえ、お、お前に、ちつと、き、聞きてえ、こ……事がある。

李平　なんだね。

嘉七　わ、わ、若旦那ア、此頃、ど、何處え寢なさるだね。

李平　お前其樣事聞いて何にするだ。

嘉七　な、なにも、な、何もしねえだけれど、ただ聞いて見たばかりよ。

李平　何もしねえなら其樣事聞かずともものこんだ。益もねえ。

嘉七　益もねえことねえだよ、ば、番頭さん、後生だから敎えて吳んさろ。

李平　敎えねへたア言はねえが、若旦那毎晩寢所變えなさるから、敎えたッて詮がねえ、駄目なことだ。

嘉七　毎晩寢所變えなさる、本當かね其れ。

李平　本當とも、嘘と思ふなら太助や軍二に糺ひて見な。

嘉七　何故だッぺ。

李平　お前の樣な人に恐いからさ不思議ア無え。

嘉七　――。

李平　はゝゝゝ喫驚サずとも分ッてらア、何うせ祿なこたアねえ、自業果だア。

嘉七　――。

李平　どれ行くべえ。

李平去る。

藤若春吉（大酔）よろめきながら出づ。

春吉　百姓つてもなア、ひつッこくてせうがない、飲めないッていふものをお祝ひだから飲めだッさ、へんお祝ひ、お祝ひもないもんだ、小作の生血を搾取つて拵へた金の捨場所に困つてる癖に馬鹿な面な（嘉七を見て）おやお前は見た樣な人だねえ、先刻から左樣思つてたけれど今見ると尙と其樣氣がするよ、お前私を知ておいでか。

嘉七　（春吉の顏を視ながら）知りません（吃らすにいふ）

春吉　知らないッて、ぢやお前の名は何てえの。

嘉七　わしは嘉七ッていひます。

春吉　嘉七ッさん、聞いた樣な名だけれど、思出せない、幾歲になるの。

嘉七　二十八です。

春吉　若いねえ、私よりも五ッ下だよ、お神さんはあるの。

嘉七　ありません。

春吉　大層言葉が奇麗だことね、兵隊さん見たいだよ、戰爭に行きなすつて。

嘉七　いゝえ。

春吉　お前さん駒塚の旦那知つてなくッて。

嘉七　（せき込みつゝ）し、知つてますとも、しッ知つてますとも、あの旦那ア、わッわッしの命の親だッ。

春吉　おやお前吃るんだね。

嘉七　（面目なげに）はい。

春吉　其れで漸と思出したよ、お前さんは忘れてるだらうけれど、私ア十年前に駒塚さんのお世話になつてたお春だよ、龍ケ崎の。

嘉七　え、お、お前さま龍ケ崎の、お春さまでがんすて——。

春吉　覺えてゐるの私の名を。

嘉七　覺えてる段ぢや御ざいません（吃らすに云ふ）お顏だつて覺えてるで御ざいますが、あんまりお變んなすつたで、すッかり見違へちやつて、何うもすみません。

春吉　濟むも濟まないもあつたもんかね、以前は駒塚さんの妾だつて、今ぢや新橋藝者の春吉だよ。分らないのが當然さ。

嘉七　でも忘れちやア濟みましねえだよ、十二年前の大晦日の晩、借金に責められて、すんでの事に利根川からどんぶりやる處をお前さまと駒塚の旦那に助けられて、お金迄拵えて顏の立つやうにしてお貰ひ申した宏大恩あるだもの、忘れたりしちや罰當るだ、勘忍して吳んさろ、な御新造。

春吉　いゝさ〳〵分つたよ。昔は昔今は今、水の流れと人の行末、左樣ぢやないか。

嘉七　へッ。

お春　はゝゝゝ其樣顏すると笑はれますよ。

嘉七額をおさへて俯向く。

春吉　可愛いね、本當に初心だよ（肩をおさへて）此頃は何してるの矢張り百姓。

嘉七　いゝえ此頃ア警報夫をして居ます。

春吉　警報夫ッて何なのお巡りの樣なもの。

嘉七　いゝえ堤番の事です、大雨が降つたり大風が吹いたりすると堤が險呑だから寢ず番する役目です、あんまり氣の利いた商賣でも御ざいません（靜かに丁寧に吃らすにいふ）

春吉　あんな立派な堤でも切れることがあるのかねえ。

嘉七　ありますとも一昨々年も木下一圓は水の底になりましたよ。

春吉　へえ恐いことだね、人が死んだでせう。

嘉七　死にましたとも加納村ばかしでも十五六人死にました、わしのお袋も其中の一人で、これは鎭守樣の鉾杉の素天邊へ吊上げられて三日の間、晒し物になりましたが、今から其事思ふと胸が打裂ける樣で御ざいますよ。

春吉　おやまアお氣の毒な、お母さんお幾つだッたの。

嘉七　四十二で御ざいました。

春吉　まだお若かつたにねえ、でもお前さんが無事で仕合せだよ、逆まは老人の大敵樂だから若しか其れが反對であつて御覽、今頃は何うなつてるか知れアしないよ。

嘉七　まア左樣とでも思つて諦めるより外に仕方ありません。

春吉　もう今年は二百十日も無事に過ぎたから其樣心配はないだらう。

嘉七　いえまだ〳〵安心ッてとけえ行きません、惠比須講も舊曆ならいゝが、舊閏の新曆と來ちや納まらねえでがんす。

春吉　左樣かねえ大變なものだねえ。

嘉七　だから私等天氣のえゝ日は閑ですけれど、雨ッぷりには御難です。

春吉　ぢや今日は閑なんだね。

嘉七　左樣です。

春吉　私これから駒塚さんと何處かで一杯飲みなほさうと思ふんだがお前も付きあッてお呉れでないか。

嘉七　有難う御ざいます。

春吉　ぢや直ぐに行かうね。

嘉七　――。

春吉　何うしたの。

嘉七　些と紛いて來たい事がありますから、其れを濟ましてから、お供、お……お供します。

春吉　何を紛くの。

嘉七　若旦那寢る所う紛きてえんで。

春吉　其れなら私も知つてるわ。

嘉七　えッ知つてなさる。あ……あり、がとうございます。

春吉　其れはねえ、西の離れの取ッ付の六疊さ。

嘉七　よ、よく、し、知つてるだねお前さま。

春吉　知つてるとも、今若旦那に紛いたんだもの。

嘉七　す……すんなら、わ、わし、見……見て來ますべ。

春吉　わゝ見ておいで、併し變に思はれちやいけないよ。

嘉七　だ……だいでうぶです。

嘉七去る。

順一植込よりひよッこり出づ。

順一　御苦勞々々々。

春吉　大變なお芝居ね。

順一　慾だァな。

春吉　罪ですよ。

順一　仕方がねえ。

春吉　（身づくろひして）行きませう。

順一　うん（泉水のふちを廻りながら）祿彌の吐いた血が和子の血で、据膳の大山石尊の薙刀料理が外れて鯉の膾ア新しい、首尾よくいけば三十萬は婿の所有、婿の所有は貝の所有、芽出たゝの若松さまよ枝も榮えて葉も茂げるか、はゝゝゝ。

花火の音。

春吉　（順一にしがみつき）あらびッくりするわ

（終）

第三幕

（同日夜半より翌曉迄）

（一）地主の家

正面金襖を隔て、寢室あり、上手障子、下手杉戸、中央よき處に爐、風呂釜かゝる。
闇燈影淡く、蟋蟀の鳴音さびし。
幕開きたる時座に人なく、よき程の時をおきて、吃の嘉七、右手に燭を提げ、全身雨にひたり、草鞋穿きのまゝ窺ひ〳〵下手より出づ。
一陣の魔風嘉七と共に入りて燈火を消す。
暗黑。
嘉七襖を開けて寢室に闖入す。
物音。
悲鳴。
襖たふる。
嘉七暗中に血に染みたる鎌をふるひ、一散に下手に去る。
引違へて和子（寢卷姿）あわたゞしく出で、風呂釜に躓き、尻居に倒る。

小間使お松（寢卷姿）出で。

お松　泥棒々々（呼びながら走せ廻る）

女中頭お鶴以下の下婢大勢（思ひ〳〵の打扮）手燭を提げて出づ。

（起上りて身づくろひし）　靜かに（と立騷ぐ女共を制しあたりを見廻す）

和子　倒れたる襖越しに宏藏の死骸見ゆ。

和子　あッ（はせよりて抱き上ゞ）　お父さま〳〵お父さまア（耳に口よせて呼び生ける）

宏藏無言、和子悲泣、一同呆然。

務　務出づ。

務　（宏藏の枕頭に片膝突き）　お父さん〳〵お父さん（のりべにを見てあたりを睨む）

和子　（務を見て）た、大變なことになりました、に、兄さん、早く醫者を、は、早く醫者を——。

務　よし（立たうとする）

お鶴　私が參りませう。

務　む、、太助を呼べ。

お鶴去りて太助出づ。

務　（太助を見て）大急きで外科の齋藤さんを呼んで來い、怪我人だといつて、早くしろ。

太助　はッ。

太助去る。

務　（敍布を引裂いて宏藏の傷口をしつかとゆはへ、和子を見て）曲者をお前は見たか。

和子　いゝえ。

務　見ない（一同に向ひ）お前達は。

一同　私共もわの一向——

務　（頷きてあたりを見廻し）證據物も落ちては居ないな、うん（立上りて杉戸を開け）ひどい風だ

（戸をしめて座に復す）

李平以下の下男大勢上手より出で障子越しにづらりと列ぶ。

李平　唯今太助から伺ひましたが、何うも飛んだこつて御ございます、御容體は——。

務　——（腕を組む）

一同無言。

務　（やゝありて）李平。

李平　はい。

務　御苦勞だが分署まで行つて來て呉れ、俥で飛ばしたら十五分で行けるだらう。

李平　へッ、何て申してまゐりませう。

務　曲者が離座敷の雨戸をこぢあけて忍入り、隱居を斬つたといへばよい、餘計な事言つちやならんぞ。

李平　へッ。

務　早く行け。

李平　へッ。

李平去る。

和子　（誰にいふともなく）お醫者さまはまだかねえ、遲い事、早く來て下さらなけれァ——。

お鶴　もうおッつけいらッしやるで御ざいませう。

和子　お前表まで行つて見て來てお呉れ。

お鶴　はい。

お鶴去る。

一同沈默。

遠寺の鐘二時を報ず。

雨の音、風の響。

お鶴出づ。

お鶴　齋藤さまがお見えになりました。

太助と共に外科醫齋藤市翁、蹤卷の上に羽織を纏ひ醫具を鷲掴みにして出づ。

齋藤　唯今はお人で――飛んだ事でしたな、御容體は。

務　人事不省に陷つてる樣で御ざいます、何卒直ぐに御診察を――。

齋藤　承知しました（診察する）

一同環視。

務　如何ですな。

齋藤　氣管を十分お切られになつたのぢやから、とても治療はかないません、絶望です。

務　絶望。

齋藤　招魂の術があつたらいざ知らず、左樣でない限り、十分が十分絶望です、面部の傷と額の傷とはさのみ深くないからこれだけなら何うにか手當もつきましたらうが、咽喉部の環狀傷は十分氣管を掻切るに足る深度を以てナイフの樣な鋭利な兇器の挿入された形跡が見ますから、到底施術の餘地はありません（といひながら座に復し）分署へは人をお遣はしになりましたか。

務　遣はしました。

齋藤　では後程改めて警官立合ひの上檢屍の手續きに及びます（醫具を拔寄せてあたりを見廻し）此お居間は御老人のお居間ではないやうですね。

務　左樣です――妹の（和子を見返り）これの居間で御ざいますが、御承知の通り父は病後の根氣弱く、八時頃になると毎時眠りたがるものですから、昨夜も、十二時過ぎ、一時二時迄續いた惠比須講の混雜を嫌つて、此離室へ――和の部屋へ――和と入れかはつて眠つたのが父の不運、殘念な事をしました。

齋藤　すると曲者はお孃さんを何うかせうといふ心得で闖入つたのぢやありませんかな。

務　いや左樣ぢやない、私を刺さうといふ考へで闖入したらしい、小作に恨まれるのは私だけで、和も爹も恨れる譯ないですからな。

齋藤　何うして加害者が小作だと分りますの。

務　其れは椽側や壘の上の足跡と杉戸へかけた手の跡で分ります。人を殺害めるに、足固め手固めする者は、百姓より外に無いですからな。

齋藤　成程御明察ぢや、探偵以上の御明察ぢや、感服敬服、わしの治療より、あんたの治療

を、お父さんはお望みぢやらう、警官が來たらよゝ其邊のお話しなすッて、立派に復讐なさるがえゝ、ぢやわしはこれでお暇します。後刻また(立上る)

一同無言にて頭を下ぐ。

齋藤去る。太助見送る。

和子突と立つて奥に入る。

一座寂然。

和子、白無垢に脱ぎかへて再び出づ。

和子　(務を見て)兄さま。

務　(和子の服裝を訝しげに見ながら)うん。

和子　あなた加害者にお心當りは御ざいませんか。

務　ないでもない。

和子　誰でせう。

務　迂濶に指名は出來ない。

和子　私なら致します。

務　なに。

和子　私なら二宮先生のお前でゞも加害者の名を立派に指してお目にかけます。

務　むゝ左樣いふ確信があるなら言つて御覽(膝を進めて)定期小作のうちか。

和子　いゝえ。

務　無定期小作か。

和子　いゝえ。

務　村の者か。

和子　いゝえ。

務　外の者か内の者か。

和子　内の者も内の者、立派な内の者で御ざいます。

(妹僕目を視はる。

務　待て〳〵滅多な事を言つちやならん、加害者に逃げろと敎へないばかりだ。

和子　いゝえ逃げる樣な優しい人なら、だいそれた阿父さまを殺しなぞは致しません。

(和子を視つめる)

務　お分りになりましたか。

和子　解らん。

務　お分りにならなけりゃ申上げませう加害者の名は。

務　ひゝ加害者の名は――。

和干　（大きく強く）加納務。

務　（冷かに）加納務、俺の名だな、よし、理由を聞かう。

和干　賓朝を弑した者が公曉でなくて時政ならお父さまを殺害た者は貴方です兄さまです。

務　（憐れむが如く和干を視て）成程お前の頭腦はお父さん其まゝだ。隨分拗れて居る、俺を北條に比べるなんて、會津の桑螺堂に足をかけた樣なものだ、見當違いも甚しい、春秋の筆法からいへば、成程賓朝を弑した者は、公曉でなくて北條だらう、時政だらう、けれども、原因結果の妙理法を觀得した者の眼から見れば、賓朝を殺した者は頼朝で公曉でも北條でもない、努力、活動、精力、根氣、此等に附隨した罪惡が知らず識らずの間に父子三世を蠱毒したのだ、北條は首切役、公曉は首切刀、刑の執行者は頼朝、首切刀は首切役の命を聽き、首切役は執行者の命を奉じる。公曉、北條共に罪なく、獨夫の心骨肉を殺戮す。身から出た錆に砥石を恨む愚人があつたら、其れこそ癲病患者の癒根み、一嗾に附するにも足らん話だ、とすれば、俺を北條に比べた理由、這奴が頓と了解ない、お前の心では、俺が大農の新法を主張して、小作共の恨みを買つた結果が、今の不幸を見たのだから、手は下さないが、間接の殺人者――親殺――は俺だといふ心得だらうが、これも極めて理由のない理窟、三文の價値

もない屁理窟だ。婦人を見て色情を起した者は、中心已に姦淫したるにひとしいと基督は仰有つたが、其れと同じ理窟で、人を殺さうといふ考へを發した者は、其惡感の胸中に浮んだ刹那、已に殺人罪を犯したも同樣、法律上の罪人とはならない迄も、道德上の罪人には無論なる。立派になる。が、俺は幸か不幸か未だ曾て、お父さんを邪魔だと思つた事もなく、憎いと思つた事もなく、又殺したいと思つた事もない、此れは神かけて斷言する、基督の名に由つて斷言する、釋迦の名の由つて斷言する、俺が阿父さんを愛する心は、お前が阿父さんを愛する心に十倍して居た。俺はお父さんから、阿父樣を眞愛した小りに、お父さんの肉躰と、六十萬の財產とを貰つたが、此れは俺の愛の分量が尠ないからではない、愛の分量が多過ぎるからだ、俺の氣前は馬車馬の樣に直進する、人を見て法を說く樣な融通は嫌いだ、俚耳に入らないからといつて大聲を修正糊塗する必要はない、鄕里を見捨てる豫言者の敗因が無信仰の礎に蠢動する誤解者の毒烟にあてられた結果とすれば、俺がお前達に誤解されて阿父さんの肉體ばかり受取つた原因も無信仰對信仰の衝突といふ事が出來る、誤解は罪惡の異名誤解者は罪惡の製造器具、皮革の中へ豚の嘔吐盛つた樣なものである。阿父さんは純粹の誤解者ではない、無信仰の礎に蠢動さるゝ樣な淺間しい罪の子とは毛色が違ふ、併し、純潔者の立場から解剖すると、決して、醇乎たる醇なる眞人といふことは出來ない、長上を批評

するは、東洋流の倫理からいへば潛上だが、正義の前には貴賤上下長幼の區別は無い、俺は其樣虛禮を無視する、親であらうが兄であらうが伯父であらうが叔母であらうが、苟くも文明の軌道から外れて邪徑に踏入つた人を譴責し教訓し批判し解剖する毫も病ましい處はない、寧ろ當然、忌憚なく言ふ、齒に衣着せずに直言する、阿父さんの死は神の聖旨。俺を殺さうと思つて忍入つた癖者が、お前の部屋を俺の部屋と間違へて、而も惠比須講の混雜を避ける爲に御自分の部屋からお前の部屋へ入れかはつてお寢みなすつたお父さんを殺したのは、海の如き廣濶な大希望を胸中に貯へて居るチャイルドを救ひ給ふ神の聖旨、子として親を身代りに立てる、これほど不愉快な事はあるまい、が、天の配劑を辭する權理を賦與されてゐぬ人の子の分際は、此れを甘受するより他に手段はない、孤月の獨明は衆星の朗々にまさる。孤月輪は俺、衆星宿は小作達、其中間に介在して、衆星の讃美者を以つて自任して居た阿父さんの魂魄を俺の代りに奪はれた神意は諄々說明する迄も無からう。俺は阿父さんが、繭籠りする蠶の樣に疲れ果てゝ御逝去になつた不幸を悲しむ、俺と同一精神毅魄、主義信仰を持つてさへおいでれば、決して今夜の樣な非業の最後をお遂げにならずとも宜かつたのだ。不懷不滅の天賦の靈魂を惜氣もなく一文不知の尼に等しいお前に與へた頑固、固陋のお心持が、即ち今夜の禍ひを招致する基となつた覿面因果の筋道を辿つて行くと、萬花根源、

只肚裏一寸の間にあるを大悟せしめる。聖德太子が崇峻帝の死を哭した心は畢竟今の俺の心、枝々葉々外頭に見て得意がる衆愚の諾々は一賢の諤々に若かぬ眞理の味を咀嚼たら、張拔達磨の一喝が二王の耳に微音器の必要を見る理由も解り、富士山と背競べせうと垂肩そびやかす土饅頭の愚も解る道理。人の額の糸屑吹く間に自分の睫手の巨渠を取去れといふのは此處、骨肉の情として、俺はこれだけの眞理を訓へる、判斷はお前の勝手、干渉はしない、意志の自由は天賦の權理だ、首を振るか頷くか、二者其一を選擇ぶばかり、其れはお前にも出來る筈だ。

和子　いえ私には出來ません。

務　なに——。

和子　此れを見て下さいまし（七首を出して務に示す）

務　（七首を手に取上げ）モスクワまで遙に俺を殺しに來た七首——む、何日阿父さんに貰つた。

和子　前の月の廿三日にお父さまの御精神と一緒に頂いたので御ざいます。

務　よし解つた、自分には答へられないが、此七首を下すつたお父さまは、兄さまがお父さまに此七首をお返しなすつた時と同じやうに首を横にお振んなさるといふ謎だらう。其れ

で極つた、もう俺とお前とは仇同士、兄妹ではないぞ。

和子　仰有る迄も御ざいません、私は今日から小松祿彌の妻、お父さまから頂戴した卅萬圓の財産を堅固に守り氣の毒な小作達を可愛がッて加納家の祀を無窮に傳へやうといふのが貴方に對する私の作戰計畫で御ざいます。あなたの主義は大農、私の主義は小農、小農が勝つか大農が勝つか、時の裁判は公平だらうと存じます。

務　ひゝ能く言つた、忘れるな(聲を勵ましし)何處へでも勝手に行け。

和子　(座を立ちて宏藏の死體に近づき)お父さま、私はこれから祿彌さんの處へ參つてお父さまの遺志を立派に繼承考へで御ざいます。あなたを殺害た間接の罪人は、あなたのお枕頭で、立派な口を利きました、お聞きでせう、罪は無い、潔白だと、實に大膽極まる告白を致しました、鋭い舌には鋭い刺を持つて居ます、併し、百の言論も一の實行に若かない事を思つたなら、鋭い舌も鋭い刺も、此村正の匕首の切味には敵ふまいと存じます。お父さまの肉體は癖者の毒手に罹つてお亡びになりましたが、御精神は謹んで、私が頂戴しました。御心配下さいますな。命に懸けて保證ます何樣困難に遭ひましても決して頂いた物を失ふ樣なことは致しません。二宮金次郎先生の御名に由つて誓ひます。御心配下さいますな、(務に向ひ)其れではお暇致します。今度お目にかゝる時は加納和子では御座いません。(綽僕を見て)お聞さ

の通りの次第だから私はこれから小松家へ行きます。一切の荷物は李平に左樣言つて明日にも小松の方へ屆けてお呉れ(立上る)

務　和子。

和子　はい。

務　お前は祿さんの心持を知つてるか。

和子　存じて居ります。

務　ぢや祿さんが裸美人の肖像を拵へて慶假冶の家へ預けに來た心持も知つてるな。

和子　慶假冶の家へ持つてらしつたことは存じませんが、裸體美人を出征前にお拵へになつたお心持だけは存じてます。

務　其れだのに祿さんを愛される、不思議だな。

和子　不思議なことは御ざいません、私の肉と靈とは、裸體美人の石膏よりも温かな筈ですから。

務　ひゝ(腕を組んでしばし考へ)併し俺はあの裸美人が癪に觸る、鐵鎚一下、粉微塵に粉碎したいな。

和子　(平もなげに)私が碎きませう。

番　碎けるか。

和子　碎けますとも。

務　有難い、これだけはお前に禮言ふ。

和子　、私も貴方への奉仕終ひにこれだけの事を致します。

和子去る。

一座寂然。

醫官出づ。

(二) 鍛冶の家

（道具廻る）

正面煤びたる障子、土間繞きに細脇蹇膝る上手壁、下手炉、三尺の臥床に太神宮の軸、其前に裸美人の石膏像、雨の音、風の響、紙燭の炉風に搖めく。

鍛冶慶次、寢卷のまゝ、蒲團の上に胡座し、全身雨にひたりたる吃の嘉七を詰責しゐる。

慶次　（血つきの鎚を紙燭に翳し）這奴ア麥や稻刈る道具で人切庖刀ぢやねえせ。小旦那殺したも不服だが、第一人助けの道具人殺しに使ふッて法はねえ。俺ア何よりもこれが不服だ。お前だッて此村生へ拔きの百姓だ、まさかに、負けるが鍛冶屋と渾名取つた俺の氣前知んねえでもあんめえ、人切庖刀拵えた昔の腕ッ節のぐり〳〵太神宮に奉納して以來、言葉も仕事

も食ふ物も着るものも一切合切百姓鍛冶になりすました俺の素性知つてたら、とッても、這樣眞似ア出來ねえ筈だ。御維新の騷動揚句、十分でもねえ癖に酔狂な鐵砲擔いで上野の山かげすり廻り黑門口で錦の金切に膝頭打ッたぎられ、人は殺すもんぢやアねえ生かすもんだと悟ッた時、親重代の青江下坂へし折つて、櫻井四郎五郎の四郎五郎をも打捨り、慶次も音で、讀んで慶次といつた四十餘年の昔を今に比べねえたッて、俺の極樂ア十萬億土の遠くぢやアねえ直ぐ鞴の前の鐵砧の上の幅三寸、牛頭馬頭が人の肉搗く杵其ゝの人切庖刀拵えた頃の針の山や血の池が、今ぢやア水晶瑪瑙に鏤められた如來さまの手洗鉢、紫雲靉靆く靈鷲のお山のお頂上と恁う腹を極めて四十何年、此加納村一圓の鍬鎌拵えたのも何千本か何萬本か夥え數にのぼッてやうが、秋になつて稻の穗が黃熟、夏になつて麥の先があからむ度、俺の力味の汗の雫の塊に花が咲いたと見立てゝの樂しみは、夕顏棚の下涼みに、一杯の濁酒さこしめしたよりも嬉れしい味が一割高直、金鵄勳章貰つた兵隊の喜びも、俺の喜びに較べちや糸瓜の皮か南瓜の皮、世中ア恁う來にやア嘘の皮と、頃日も小松の祿旦那捉えて、泰平樂ならべた、其舌の根もまだ乾ねえに、自分の鍛た新身の鎌が、人切庖刀の代り勤めたと聞いちやア、俺ア如來さま手引きで、三途川乘ッ切つたッて浮ばれねえ、其れアお前が小旦那殺害るにやア殺害るだけの譯アわらうさ、二千三百五十一人の小作助けてえ立派な正札も付いて

やうし、廿年前の剋印打たれた下駄の齒疵の恨みつらみも手傳つてやうさ、けんども、其れだからて何も好きこのんで、俺ん鍛た惠比須講の配鎌使はずとものこッちやアねえか、人切るにやア人切庖刀、牛切るにやア牛切刀、薪割りに斧、草刈りに鎌、其れ〳〵用途極つてる位目もあれば口もあり鼻も耳も滿足なお前に解らねえ筈ア何うしても恁うしても無え筈だ。其れう這樣、不埒しでかすたア無茶も方傾のあつたもんだ、俺もうお前と口利も忌顏あはせるも忌だ。小旦那拵えた額の剋印へ、持合せの金拵寄貼つた緣で、まるきし親子見てえに交際つてたが、もう今日からア小父さんとも言つて貰ふめえ、首吊らうと咽突かうと、自首せうと逃げやうとお前の勝手だ。七里けッぺえ。忌なこんだ、俺こお庇蔭で、四十年積んだ善根を一晩に潰されちやッた、明日にも死にやア地獄の亡者だ、情けねえ。此位なら一昨年の秋の流行感冒で斃死つた方が增しだッた、婆さんはえゝ時死んだ、俺ア もう今夜から、枕ア高く寢るこたア出來ねえせ、さッ、出て行ッて貰はう。汚らしい、這樣妖物鎌ア何處えでも捨ッちまへ馬鹿野郎。

嘉七　をッ小父さん、お、俺惡いだから、か、勘忍して呉んさろ、よ、あやまるだ、勘忍してくんさろ。

慶次　うんにやなんねえ、金輪際忌だ。

嘉七　だ……だらう、け……けんど、そ、そ、其處う勘辨して。

慶次　勘辨も何もあらすか、白ッ規帳面の草刈鎌妖物にしてえながら押强えにも程んあらア。

嘉七　だ、だから、お、おれ、あ、あやまッてるでねえか、お、俺、わ、惡氣あつて、か……鎌ア、つッ、使ッたでねえだもの。

慶次　へん惡氣あつて使ッたでねえ、ちや貴樣此鎌ア俺ん鍛たゝア知んねえのか。

嘉七　知つてるよ。

慶次　知つてゐながら惡氣ねえのか。

嘉七　うん惡氣ねえだよ、そ……其、か……鎌の銘、お、お前の、お、お前の銘でねえだもの。

慶次　なに——

嘉七　う、嘘と思はゝ、み、見さい、手拭ひて見さい。

慶次　(無言にて銘を見ながら)　む、成程這奴ア小旦那の曰銘だ、何うしてお前手に入れた。

嘉七　何うしてッて矢張り番頭さんから、も、貰ッた、く……配鎌だア。

慶次　配鎌——

嘉七　うん配鎌、お……おめ、ほ……刻つた、で、で、ねえ、く……配鎌だ……から、そ、其んでおれ、小旦那殺したつて、おめ、お……おめ、つ……罪、ね、ねえ　ぢら、お……思つたゞよ。

慶次　むゝ這奴ア如何にも理窟になる、鍛たな俺でも銘切つたのが小旦那なら、四十年の間積込んだ善根の眞半分は、おほッぺらで取戻せる寸法だ、有難え、太神宮様お助け、如來さまお恵みだ、おろそかにやなんねえ、お燈明でもあげべえ(燧石を拽しながら)はてめいような何處へやつた。

嘉七　此處にあるだよ(燧石を慶次に渡す)

慶次　むゝ占め〳〵、これで溜飲が少し下つた

慶次神棚へ灯をとぼす。

嘉七　小父さん。

慶次　なんだ。

嘉七　勘辨してくんさるか(吃らずにいふ)

慶次　むゝ勘辨する、けんどもなんだせ、隱匿ふこたなんねえせ。

嘉七　俺隱匿はれやうと思つて來たのでないから、隱匿はれなくもいゝだ、直ぐ俺ア自首して出るよ(靜かに吃らずに叮寧にいふ)

慶次　えゝ覺期だ左樣なくちやなんねえ、夜が明けちやまづい、早くしねえ。

嘉七　ぢやこれでおいとまだ。

慶次　爹のこた心配しねえがえゝ引受けらア。

嘉七　頼んだよ、さいなら(行かうとする)

慶次　(鎌を取上げ)這鎌忘れちやアいけねえせ。

嘉七　左樣だッけ(鎌を受取り默つて行きかけて又見返り)た……達者でゐねえ(眼鏡を潛る)

慶次　(大きく)おい待ちねえ。

嘉七　よ、よう、用だかね。

慶次　お前なんか、すつぱり小旦那やッつけたのか。

嘉七　止めまで刺して來たゞア。

慶次　能く小旦那の部屋知れたなア。

嘉七　——。

慶次　此頃始終部屋ア取ッかへてばかり居なさるッて聞いたが、能く今夜の寢所分つたなア。

嘉七　そッ其れア、わ、分るやうにして分つたゝア。

慶次　何處の部屋だ、離屋か母屋か、土藏の二階か。

嘉七　はなれの取付きの六疊だよ(吃らすにいふ)

慶次　なに離家のとッつきの六疊だ。本當か。

嘉七　本當だよ。

慶次　其いつアお前大變だ、人違えだせ、お嬢さんだせ、お嬢さん部屋だ離屋の取ッつきの六疊は。

嘉七　へえ(呆れる)

慶次　飛んだことしでかしたな、小旦那なら自業果で詮もねえが、罪もねえお嬢さまア塾害るたア無酷え話だ、併し何樣ことで人違えで無えも知んねえ、調べて來う、歩びねえ、白首して出る覺期なら、先方の人違に見つかつても關ふめえ、直ぐ行くべえ。

慶次紙燭を消して立上る。
嘉七鑓を持ちて後に引添ふ。
兩人去る。
雨の音、風の響。
よき程の時をおきて祿彌出づ。

祿彌　雨戸を開放しにして無用心な、慶爺さん〳〵、おい居ないのか慶爺さん(呼びながらあたりを捜し)はてなないのかな(神棚の燈明を紙燭にうつし)おや〳〵床ばかり敷いてある、何處へ行つた知ら、無用心な、幾ら盗まれる物がないッて呑氣にも程がある(寒さうに竊かき合せ)康子に遣つた石膏像を打壞さうと思つて來たのだが、留守ぢやア何處にあるか分るまいな、困つたものだ(いひかけて床の間に目を移し)むゝあるゝ、(莫ばしげにねざりより)十何年の間魅かされて居た恨み、せめて此像でも滅茶に潰して、腹癒せしにやア死んでも死なれない——何か壞すものないか知ら(あたりを見廻しむゝ此斧——。

祿彌遊具函の斧を取上げ膝に載せて一息吐く。

和子出づ。

和子　(はせ入りて祿彌に取付き)祿さん、何をあなたなさるのです。

祿彌　え——。

和子　滅多な事なすつてはいけません。

祿彌　(吃りながら)ど、ど、何うして、何うしてあなた這樣深夜に這樣處へ來なすッたのです、き、來なすッたのです。

和子　(祿彌の斧を取りつゝ)私よりもあなたは、なんで、這樣處に、及物三昧遊ばしてるので、

御ざいます。

祿彌　いや僕は及物三昧してるんぢやない、此像を碎かうばかりに、そッと家を抜けて此處の家へ遣つて來たのだから、不思議はない、爪の垢ほども不思議はない、が、あなたは——あなたが此處へ來たのは不思議だ、僕ァ夢だらうと思ふ——。

和子　いゝえ夢でも不思議でも御ざいません、私は今、たッた今、父に死別れ兄に義絶れて、あなたのお宅へ參る途中なので御ざいます。

祿彌　え、お父さんや兄さんにわかれたッて、何うして——。

和子　父は先程人手に罹つて(泣きながら)非業の死を遂げました——其れが爲——其れが爲兄とは義絶、這樣悲しい事は御ざいません。

祿彌　伯父さんが人手に罹つて死になすつた、其いつァ大變、い、一體、だ、誰が殺したのです、强盜の所爲ですか、鼠賊ですか、其れとも遺恨。

和子　遺恨でも强盜でも御ざいません、人違ひで殺されたので御ざいます。

祿彌　怪しからん、ひ、人違ひ、だ、誰の、誰の、ひ、人違ひになつたのです(咳入る)

和子　(背中を摩りながら)兄の身に代つたので御ざいます。

祿彌　務さんの身代り、あの務さんの身代りに、い、いよ、彌、も、以て、け、怪しからん

(血を吐く)

和子　あら(祿彌の顏を覗き込みつゝ)おせつなう御ざいますか。

祿彌　う、傳染ります、う、傳染ります、は、離れて居なくちやいけない、康子さんさへ此血で僕を見限つた、あ、貴孃は、けッ潔白の軀だ、だ、大事の軀だ、肺病になつちや大變だ。

和子　いゝえ私は、あなたの肺病が移ッて死ねば本望で御ざいます、私は今あなたより外に賴る者の無い獨身で御ざいます、傳染ッても關ひません、お忌でも介抱させて下さいまし。

祿彌　そ、其れは、ほ、ほ、本當ですか、ほ、本心で、貴孃、本心でいふのですか。

和子　あなたもあんまりな事仰有います、女だてらになんで嘘が申されませう。

祿彌　(和子の手を引寄せ)あゝ僕は見損なつてた、實に僕は馬鹿だ、貴孃の樣な立派な心掛の婦人を嫌つて、康子の樣な無血虫動物を戀慕ひ、這樣石膏像まで拵へた愚かさ、あゝ僕はすまない、怨して下さい、手を突いて謝罪ります。僕は今夜から心を入れかへて貴孃の忠實な僕になります、こ、這樣、這樣穢れた肖像なんて、み、微塵に碎いて、み、微塵に碎いてしまひます(石膏像を左手に掴んで壁に拋つ)

和子　あなたがお碎き遊ばすより、私に碎かせて下さいまし。

祿彌　あなたが碎く——。

和子　兄に頼まれて此像を碎かう爲に此處へ寄つたので御ございますから何卒私に碎かせて下さいまし。

祿彌　むゝ兄さんに頼まれた、道理です、面目ない、お任せします。

和子　ぢや碎いてもいゝんですね。

祿彌　存分に。

和子斧をあげて塑像を碎く。

祿彌　これで僕の前半生は全く終つた。僕の病氣を貴嬢さへ嫌はれなけれア僕は滿身の愛を貴嬢に捧げて伯父さまの日頃のお慈愛に答へます。

兩人相擁す。

(三) 地主の家

光景すべて(一)に同じ。

務宏藏の枕頭に座し、慶鍛冶と對話。

慶次　お玄關までア拉れて來ましたが、若しかひよツと亂暴するといけねえで、控えてるやうにッて納屋のわきへ立たせて來ました。あんたの。銘彫んなすつた血付きの鎌はこれでが、

(道具廻る)

す、能く御覽なせえ、我强えこたア出來ねえもんだ(鎌を出して務に示す)

務　(鎌を取上げて注視めながら)成程此銘は俺の道樂に相違ないが、其れは其れ此れは此れだ、俺の切つた銘の鎌でお父さんが殺されたッて何も俺が我强いといふ理由はなからう、其れともあるかな。

慶次　だからあんたア我强いといふでがす、幾本銘切んなすつたか知んねえが、よもや三千本の鎌、皆彫んなすつた譯でもなかッべ、高々三本か四本、十本た切んなさるめえ。

務　——(銀く)

慶次　だものお前さん、天道さま見せしめでなくて何すべえ、考へねえて解つたこんだ四月子ぢやあんめえし。

務　するとお前は神さまが俺の我を矯めやう爲に俺の切つた銘の鎌を吃の嘉七に授けてお父さんを殺さしたと恁ういふんだね。

慶次　左樣でがす、でなくッてお前さん、道樂に切んなすッた銘鎌、三千本の中から嘉七ん手へ入る筈ねえでがす。

務　成程お前の判斷は一理ある、千百本の中の一本が兇行者の手へ入つて骨肉の血を流すといふ奇蹟には偶然の二字を冠らすべきものでない。鎌は俺が預る、嘉七はお前に預ける。

而して曉方までに熟考へとく、考へた結果がお前達に幸ひすれば俺は潔く兜を脱ぐ。併し其反對だつたら俺は容赦なく嘉七を殺人犯者として其筋へ引渡す。決答は五時半限り。何うだいざこざはあるまい。

慶次　ようがす、ぢや家い歸ッて待つて居ります、鎌は確かにお預けしました、さいなら。

（鹿爪らしく官ひをはりて立上る）

慶次去る。

務　務呼鈴を鳴らす。

仲働　お鶴出づ。

務　永源寺の方丈はまだ來ないか。

お鶴　はいまだお見えになりません。

務　別家や新屋は何うした、使者は歸つたのか。

お鶴　はい先刻戻りまして御ざいますが、あの差控へてお茶の間に——。

務　呼べ。

お鶴　はい。

お鶴去りて太助出づ、

務　（太助を見て）お前か一家内へ駈付けたのは。

太助　はい私で御ざいます。

務　來るといつたか來ないと言つたか。

太助　別家、新屋、東、南、質屋、酒屋、お向ひ、どちらもおいでなさらないと仰有つてい御ざいました。

務　左樣か、だらうな、醫の穴の狹い奴等だ。よし〳〵用があれば呼ぶ。行け。

太助　はい。

太助去る。

務ランプの火影に鎌を翳して兀然として思ひに耽る。

風の音雨の響

遠寺の鐘四時を報ず。

務　（父の死相と鎌とを見較べ欣然と面をあげ）小農の恃むに足らざるを示し給ふ神意。小農主義者の劣敗を意味する神意。磨劍に似たる新月が浮雲を劈いて現はるゝ生氣横溢を意味する神意、神は大農を戮し給ふ（呼鈴を振る）

小間使お松出づ。

務　警官はまだ一人位居るだらうな。

お松　はい角袖の方がお兩人だけおいでゝます。

務　お呼び申せ。

お松　はい。

お松去る。

刑事巡査桑山留太　朝田猛夫出づ。

務　（兩刑事を見て）お呼びたて申して恐縮ですが、仔細あつて唯今犯人の姓名と所在とが知れましたから何卒直ぐ御出張をお願ひします。

朝田　其れはお芽出たい、矢張り村の奴ですかな。

務　堤番の木原嘉七で御ざいます。

桑山　ひゝあの吃の嘉七ですか、憎い奴だ、直ぐ捕縛致します、所在は。

務　慶鍛冶の宅に潜んで居ります。

朝田　はゝア慶鍛冶の家は考へましたね、吃嘉も馬鹿ぢやない、感心だ。併し能く知れましたな。

桑山　僕は熊吉を注意人物と目星とつたが、吃嘉とは知らなんだ、人は實に見掛けによらん

恐いものだ。

朝田　ぢや直ぐに出張します。

桑山　御安心なさい。

務　何分宜しく。

刑事去る。

此以前より、李平以下の屋人大勢、障子越しに覗みゐたるが兩刑事の立去ると同時に、どや〳〵座に入りて李平先づ口を開く。

李平　えゝ若旦那さまへ申上げます、其何うも甚だ恐入つたお願ひでお叱りを蒙るかも存じませんが、えゝ實は其、都合上萬已むを得ません事柄が出來致しまして、えゝ其、えゝ實は其一同お暇を頂戴仕りたいと存じまするが、お許し遊ばし憎い處を、えゝ、お許し下さいますれば、有難い仕合せで御ざいますへい。

務　むゝ、お前達も小農主義か、よし〳〵暇を遣らう、幾人ゐる。

李平　卅七人長お廊架に此通りずらりッと列んで居ります。

務　小氣味能く團結したな併し其人數で扶持に離れたら困るだらう。

李平　いえ皆和子さまの方へ參る心得で御ざいますから其御心配には及びません。

務

左様か、隨分思切つて俺を憎むな。爹には死なれ妹には見限られ、おまけにお前達には捨てられる、此上離れる者があつたら其れは女房と伜ばかりだ、道の俺もちと心細くないでもない、が、其れも此れも神さまの聖旨、僅々一人の俺が強いか、千百人の力を協せた前達が強いか其れは沙河戰爭前のロシヤと日本の睨合よりも興味のある問題、解決は冬、休戰は稻の刈られると同時に終る、二百三高地の奪合ひも田原阪の取り遣りも、巡査の服が白くならんうちに濟むだらう。其うちには五位鷺も鳴く、雁も飛ぶ、蒸氣脱穀器の發條器が働出して一日に四五十石の米粒を搔落すも知れない、が、其れまでは天下泰平、吃嘉の様な無法者があつても俺の軀は鐵條網に卷きこめられた黄金山だ、なか〳〵左様樂に殺さりやしない、消耗兵を五十萬も出す氣ならいざ知らず、千人や二千人のへろ〳〵鐵砲は齒が立たぬと和子にも祿さんにも左様言ッてくれ、さアもう用はない行くがよい。給金の遣分があつたら取りにおいで、寄越分があつたら返すには當らない、女中頭のお繼にはお父さんから嫁入道具買つて遣る約束があつたさうだが其れも正で貰ひたきや正で渡さう。小頭分の給料は先月末二割增といふ極めにしたから、無論俺の方が遣分だ。太助、軍二、又八、傳三、其れへ新參の甚六を搗丶都合五人の頭へ今日までの勘定を振ると一人前五十七錢五厘五毛六糸といふ際どい算當になるやうだが、精確な勘定はお父さんの葬式濟ましてからにして貰はう、馬子

の芳藏に行かれるのは丁度子守の作に行かれる様なもので隨分困るけれど、これも小農主義の卵なら除外例にもなるまい、半伺の五郎次、あれは甲斐性者の標本だ、掃除番の兼爺あれは克明者の剝製だ、仲働のお鶴は働者、小間使のお松はお先者、中には贋物もあるか知らんが、先づ見た處は彼れもよし此れもよし、皆能く働いて呉れたお禮に何かと思ふが、男の手一つで何うする事も出來ない、明日にも阿父さんの葬式出す様なら、其時は菰冠りの鋭拔いて敵にも味方にも纓應ふ筈、其れまでは我慢して呉れ、勘辨して呉れ、い丶子の上子のすッこのけと祝ひ納めて解散しやうよ。

一同手を突いて辭儀する。

太助　何うもなが〳〵御厄介になりました。

軍次　何うもいろ〳〵お世話さまになりました。

杢平　隨分ともにお達者で。

お鶴　お名殘り惜しう御ざいますが。

お勝　其内に何れまた。

お松　お伺ひ致します。

悠三、又八　なが〳〵御厄介になりました。

甚六　お世話さまになりました。

一同　（盞を揃へて）左様なら。

一同去る。

康子、潔の手を引いて奥より出づ。

康子　あなた何うしたらいゝでせう、這樣大きな屋敷に佛さまぐるめ僅々四人きりぢやありませんか、本當に私死んでしまいたくなつて來たわ。

務　（潔を膝へ載せながら）馬鹿を云ふ、これからが俺の舞台だ、アルプス越えの大那翁が及の如く吹颪す天風に馬の鬣捻向けた時の心持で大活動大飛躍を試るのだ、お前もこれからはジョセフィンにならにやアいかん、引込思案は禁物、貉の眞似は御免だ、俺ア泣ッ面されると癇に觸つて、軍鷄の首絞る樣に、縊り殺したくなるぜ、本當に。

（道具廻る）

（四）鍛冶の家

光妹すべて（二）に同じ。

慶次、嘉七暖炉を滑りて出づ。

慶次　えれえ雨だぜ、此分で明日一日降つたら利根川は滿水だ、無事で呉れねえと又一昨々年の樣な人死あらうも知んねえ、あゝ鶴亀々々（獨語しながら炉を上り）どッこいしよ、草臥たぞ、齢重ると夜道アいけねえ、はッくしよい、はッ、はッくしよい、こん畜生、はッくしよい、えゝ忌えましい、笹棒に寒い朝だ、嘉ア衆、おい嘉ア衆、何處に居るだ、仕事場に居ると寒いぞ、此方へ入えんねえよ。

嘉七　俺ア先刻から此處に居るよ。

慶次　はゝゝゝゝ左樣か、まだ眞暗れえで薩張り見えねえ、灯火點けるほどでもねえが、火種なくちや寒いや、竈の下でも一燃し燃すべえ、第一着物ん恁う濕つてちや遣り切れねえ、（呟きながら障子を開け）おや〳〵、何だか壁の上に轉げて居るせなんだッぺ（石膏像の破片を撫み）土かな石かな、ほいまだある、こいつアおいねえ、土間も同じだ、留守に壁でも落たと見えるべッ〳〵（マッチを摺つてあたりを照し）なんだ此れア、えれえもんだ、雪の樣に白えもんだ、おや〳〵此方に顔がある手がある頭がある、むゝ小松の祿旦那拵えた婦女の像だな、違えねえ其れ其れ、いやよくも細かく碎けたもんだ、まるで太閤さま千人大黑のお開帳てえ姿だ、猾鼠の惡戯にしちやえらすぎるし、人間のいたづらにしちや酔狂過ぎる、自然天然に碎けたのかも知んねえ、一軒にけぶな事あると村中祟りあるッてえから手へねえ、なア嘉ア衆、お前は何

うもふ(紙煙に火を點す)

嘉七　俺も左樣思ふのだよ、大旦那を小旦那だと間違へたも矢張り自然天然の祟りだッべ、魔ものづらよ(吃らすにいふ)

慶七　(神棚を向上げて)お燈明も消えてる、氣味のよくねえこッた。

嘉七　お前とこに犬は居ねえか。

慶次　犬なんか居るもんだ猫ん子一匹居やアしねえ。

嘉七　左樣かね。

慶次　居たら何うする。

嘉七　ね、ねたら、お、おれ詮樣あるだ、頸ッ玉え繩アつけて利根川え持つてッて、大けえ石くッつけて沈めて來るだ、そ、そ、左樣すると、か、河の神さま、犬の肉好きだから、其肉う取つて敵ふ、一時位かゝるべえ、そんうちに雨降れる、左樣來れアしめたもんだ、なア小父さん。

慶次　なんだ其れア、婦女の人形碎けた話ぢやねえぢやねえか。

嘉七　左樣だよ、俺利根川堤切れるといけねえから符呪するだ。

慶次　其樣くだらねえ符呪で堤が切れなかつたら仕合せだ、お前一昨々年だッて堤番してえ

たから定めて犬柱たてたらうが、あん通りの洪水で、お前のお袋や叔父貴ア、土左衛門になつたぢやねえか。

嘉七　うんにや、お、お、俺、一昨々年アまだ其ん話し聞かねえだよ、聞かねえから犬の符呪しなかつたのだよ、だもんだであゝいふ騷動持上つたゝよ。

慶次　左樣か、ぢやまだ試して見ねえんだな、誰に聞いたんだ其樣事。

嘉七　本にあつたのだよ、利根川なんとかいふ給入本なかに書いてあつたのだよ。

慶次　ほう博識だな、えれえもんだ、永源寺の坊ンさん跣足で逃げらア、はッはッはッ。

若藤　(慶次に向ひ)お前が此處の主人かな。

慶次　はい。

若藤　木原嘉七といふ者を我々は捕縛の爲に向つたのぢやが、隱立てすると爲にならんぞ、えゝか。

慶次　へい決して匿立ては致しませんが、一體何處ら其樣事聞いてらしッたので御ざいます。

若藤　左樣な餘計な事は聞かずとも宜しい、お前は當人を本官の前へ出せばえゝのぢや。

嘉七　わ、わしが、き、木原、嘉七と申すもので御ざいます。

若藤　むゝ神妙に能く名のつた、罪はそちらに覺えがあらう、何うぢや。

嘉七　へい御ざいます。

若藤　それッ（兩刑事に目配せする）

兩刑事左右より立かゝる。

嘉七　此通り逃げも隱れもしねえでがす、人殺しはしましたが、氣に癖のねえ白規帳面の百姓でがす、何うかお上の御慈悲に、一言、言ひ殘させて下さいまし、お願ひで御ざいます（吃らすに解かにいふ）

若藤　よし、手間を取つてはならんぞ。

嘉七　へい（もじ〳〵する）

若藤　他聞を憚るとなら我々は仕事場の方へ行つて居る。

嘉七　へッ濟みませんが、何うか何分。

警官去る。

慶次　（嘉七を見て）若旦那密告だッぺ、何處まで我の強え人か方圖がねえ。

嘉七　俺アもう諦めたゝ間違えにしろ何にしろ大旦那打つた斬つた罪

ア消えねえ、死んでも消えねえだ、俺もう覺悟極めてるで心配しねえで呉んさろ。

慶次　むゝ、先刻も云つた通り爹の事ア心配しねえがいゝせ、俺引受けたからな。

嘉七　有難え、俺拜むだ、此通り、拜むだよ小父さん。

慶次　むゝもういゝ澤山だ。

嘉七　まだ俺お前に言殘さにやなんねえ事あるだが聞いて呉んさるか。

慶次　聞くとも何なと言ふがえゝ。

嘉七　有難え、他んこッてもねえがね利根川の堤のこんだ、高い聲ぢや言へないが、此雨も一日降らうものなら、吃度崩壞るに極つてゐるだ、俺其原因知つて居るけれど、恩のある人の惡い事だで、今迄は默つて居たが、俺居なくなると誰も堤の危い箇所知つて居る者無えで防ぎに土俵入れる智惠湧くまいと思ふから、其れでへえ、後事、ようくお前に、頼まふと思ふだよ、なもし（吃らすに叮嚀に云ふ）

慶次　むゝ其れアえゝとけえ氣が注いた、恩のある人ッてえなア、噂の通り駒塚の大旦那こッたらうが、恁ういふ土段場に其樣えな義理仁義ア屁の屁粕だ、さア早くいひねえ、何處だ〳〵危ねえ場所ア。

嘉七　うむ、あかすよ、其、其場所はな。

慶次　ひゝ。

嘉七　東側の。

慶次　ひゝ東側の。

嘉七　ひ……東、ひ、ひがし。

警官出づ。

若藤　時間だ。

兩刑事嘉七を縛す。

慶次　さゝへろ。

慶次　もう少しだ、も、もう少し話させて下さいまし。

桑山　ならん。

嘉七　（せき込みて愈〳〵吃る）ひ……ひ……ひ、ひ、ひッ。

慶次　東側の幾本目だ。

嘉七　ひ、東、ひ、東側の、十……。

刑事容赦なく引立て去る。

嘉七　十、十、十、十。

嘉七の聲次第に消える。

慶次煙草。

雨の音風の聲次第に強まる鳴物にて。

（幕）

第四幕

（惠比須講の翌日――十月廿一日）

（一）彫工の家

柳高き廻縁付の座敷、下手に栞戸、上手に石燈籠、石燈籠を隔てゝ紅葉したる滿天星の刈込、刈込の後雜木林を透して雨に烟りし田圃の遠見。
風雨なほやまず木葉類りに騷へる。
幕開くと、祿彌世おくみ、祿彌、和子の三人上手にすわる、圭平、太助、平二、傳三、又八、甚六、お糊、お松其他大勢の婢僕を驅して ぬる。

祿彌　井萬圓の生む五分の利足は一萬五千圓にあたるけれど、其れは此秋の年貢が形付いた後の收入で、今の和子さんはまだ〳〵何うして三十七人の雇人は扨おき三人半の食扶持も六ケしい、第一小松家の屋臺骨が此通りのへろ〳〵普請だもの本家の雇人をそッくり引受けたら根太も床も地の底へめり込むに違ひない。お前達の深切は有難いが、今に今何うするといふ事は隨分考物だ。大分限には大分限の格式、中分限には中分限の格式、百萬と卅萬ぢや大分算盤の桁數が違つてるから、其邊も能く考へにゃ迂濶な眞似は出來ない。去年の秋利根川堤防の改修を受負つて成金黨の旗頭になつた駒塚の昨今を御覽一寸盛衰記の書出しの名文句讀む樣な氣持がする、あれは分不相應に奢つた結果さ、恐い話だ。僕は引込思案で這樣事いふんぢやない、眞面目な立場から判斷すると椋の葉で磨いた牙彫の肌よりも細かい筋道に是非とも落ちつく譯だから、お前達も其心得で惡く思はんやうにしておくれ、お願ひだ。

圭平　何う致しまして惡く思ふ處では御ざいません一々御道理さまで、恁ういふ破目になりましたも、いはゞ自業自得で誰をお怨み申す譯にも參りません、へい。

祿彌　左樣お前の樣に素直に返事されると俺の樣な氣の弱い者は、何方にしていゝか分らなくなる、はてなんとか、旨い工夫が――（和子を見て）あなたは何う思ひます、いゝ考へはありませんか。

和子　左樣ですねえ、井萬圓が正金だと融通が利くんですけども、不動產だから何うする事も出來ませんわ。

祿彌　併し抵當といふ一旦凌ぎの方法はありますよ。

和子　抵當つて銀行へなんですか。

祿彌　左樣です、廿町歩も抵當に入れる氣なら此人數を半年や一年位たゞ食はしておまけに本家の半分位の家は新築する事が出來ますよ、あなたに其お考へがあれば僕は雨の霽れ次第佐原銀行へ行つて下相談を極めて來ますが何うです。

和子　其樣に雜作なく貸して呉れませうか。

緑彌　貸しますとも、あなたの所有物を貴嬢が抵當に入れるんだもの誰が故障云ふもんですか。

和子　でもまだ登記が濟んでないかも知れませんから。

緑彌　濟んでなきや濟ませるです、僕が務さんに談判します。病人でも其位の事は出來ますよ。

和子　ぢや左樣しませう、左樣して此人達を安心させませう、お父さまの可愛がつた雇人ですから。

緑彌　（一同を見て）今聞く通りだからお前達も安心するがいゝ、天氣になつたら僕が本家へ行つて、務さんに和子さんの財産が何うなつてるか糺して來るから、其れまでは氣の毒だが皆各自の宿元へ歸つて吉左右を待つてゝお呉れ、惡い樣にやアしないからね。

李平　（嬉しげに）何うも色々有難う御ざいます、其れで私も安心しました（一同を見返り）皆もようくお禮いゝな、早魃に夕立貰た樣なもんだ、有難え話だ。

一同　有難う御ざいます（平伏する）

和子　ぢやお前達は一先宿元へ戻つて私の方から沙汰するまで何處へも行かない樣にしとい

てお呉れ。

李平　へい〳〵畏りました、決して他家へ御奉公する樣な不實な真似は致しません、此李平が命に換へてお引受け仕ります、ではこれで（と頭を下げ）いろ〳〵どうも――（と平伏する）

一同　お嬢さま旦那さま御隱居さまいろ〳〵有難う御ざいます。

皆々去る。

和子　（おくみに向ひ）本當に實直なもんですことね、可愛いぢやありませんか、兄さん――務さんを見限つて私の方へ來るなんて、薄情だ〳〵ッてッても、田舍の人は違つてますね。

おくみ　左樣ねえ、私も倩々感心したよ、一體あの李平は人望家で、下の者に慕はれてるから其れでゐゝ皆を一纏めにして暇を取ることが出來たんだらうよ。

和子　本當にいゝ爺やですこと。

緑彌　（和子に向ひ）爺やアで思出したが、慶爺さんは嘸喫驚してるだらう、留守に石賽を碎いたなり來ちやつたから――何うかしたいね。

和子　あんまり急いだもんだから置手紙する暇もなかつたのですよ、何うしませう。

緑彌　口上書持たせて使者を遣らうか。

おくみ　私が一走り行つて來やう、彼處まではわけなしだ、半時間しか掛らないから。

綠彌　でも此吹降りに途中が難儀です。

おくみ　いゝえかまはないよ、道行を着て行けば吹降りでも着物の濡れる氣遣ひはないからね。

綠彌　早く氣がつけば杢平に頼んだもの借しいことをした。

和子　叔母さんがいらッしやるなら私もお供するわ。

おくみ　兩人で行く程の用でもないに大業らしい、お前は綠彌と積る話をするがいゝ。

和子　あら忌な叔母さん、私其樣事知らないわ。

おくみ　知らなけりや知らないでもいゝから私は一人で行きますよ。

和子　だつて其れぢや私の氣が濟まないもの。

綠彌　(おくみを見て)和子さんもあゝ言ふから、一緒にいらつしやい其方が安心だ。

和子　ね左樣しませういゝでせう。

おくみ　益もないことだがね。

綠彌　益があつてもなくつてもいゝでさア、今丁度雨も小降りになりましたから、早く行つて早く歸つていらつしやい、六所の辻は忌な所だが恁ういふ日には塵埃が立たんで結句いゝです、和子さんは其上へ僕の外套を着てらつしやい、這樣日に見えも洒落もいりませんよ。

おくみ　(和子を見て)行きませう。

和子　はい(綠彌を見て)では行つて參ります。

綠彌　氣をつけてね。

おくみ和子襖を開けて奥へ入る。

綠彌　綠彌も見送る心にて奥へ入り、やゝありて出で、寒さうに袷かきよせ、力なき咳二ツ三ツせきながら。

玉と瓦を見分けるとの出來なかつた昨日までの俺は、此病氣で早く死ねばいゝと思つたが、蒼龍に一點の晴を加へた今の俺の慾望は、此病氣を一日も早く平癒さしたいといふにある、全るで反對な望みだ、地球の一私轉は人の運命を左右するといふが左樣かも知れぬ。面白いものだ。

麻子合羽下駄かけ雨傘を持ち表戸を突と入る。

麻子　綠彌さん(框を上り)わ、わたし、本當に〳〵何うしたらいゝでせう、助けて頂戴な(坐る)

綠彌　(冷かに)何を助けて上げるのです、あなたを助ける者は務さんより外にない筈です。

麻子　あなた怒つてらつしやるのね、其樣にぷり〳〵しないたつていゝわ。

綠彌　怪しからん、一體斷りなしに人の座敷へ闖入するなんて亂暴だ、歸んなさい、愚圖々

麻子　すると撮出すぞ。

お、恐大變な勢ひね、昔の事を考へたら其樣事言へた義理ぢやないわ、お花は新橋藝

者の春吉の下地ッ子になつてるぢやありませんか。

緑彌　なに――。

庶子　ほゝゝゝゝ其樣恐い眸采するもんぢやありませんよ、お花つていふのはね、八年前に、私と貴郎の中へ出來た嬰兒の名なんですよ、御存じなくつて。

緑彌　――。

庶子　御存じない事はないでせう、昨日の惠比須講に春吉を呼んだのは私のはからい、務は藝者なんてつまらん呼ぶ必要は無いつて言ひましたけれど、私お花の事糺きたいから、其れで無理に呼んだのですよ。お花はね段々貴郎に似て來るんですッて、可愛いぢやありませんか、私あなたの種だと思ふと潔よりも何樣に可愛いか知れませんわ、其れに女の子は智慧が早くて早熟てますから、何樣に可愛くなつたらうと思ふと居ても立つても居られないわ、えゝ緑さんあんたは左樣思はなくて。

緑彌　思ふも思はんもない、僕は其樣事聞く耳は持たん。歸んなさい、汚はしい、お花といふ女の子が可愛くならうとなるまいと其れは昔の事だ、今は緑も由もない赤の他人、赤の他人の美醜好憎が何になる、さア何うしても歸らんか、歸らんけりや昨日の樣に踏みにじるが何うだ。

庶子　おゝ恐、ぢやあんたは私を見捨てるんですね。

緑彌　見捨てたのは其方だ、冷酷な貴樣達のお庇蔭で生れもつかぬ不具者になり、多年の間苦心して勉强した彫刻術も右の臂を喪した爲に千日に刈つた萱同樣屁の役にも立たなくなつた、怨みは此方に十分ある。俺が無教育の人間なら、生かしては置かん、殺して了ふ、さア出て行け、不貞腐れあま、淫婦ッ（蹴飛ばす）

庶子　（蹴られて轉びながら）こ、此野郎（むしやぶりつく）

緑彌　無禮者ッ（投げつける）

庶子　くゝ口惜しい。

兩人暫し挑みあひとゞ緑彌、庶子を樣より下にたゝき落す。

瓜一、外妾、下駄がけ番傘を持ち表戸より入る。

瓜一　（庶子を見て）何うした、其姿は。

庶子　（息をはづませつゝ）お、お父さん、い、い、いゝとこへ來て下すつた、こ、こ、此野郎が、私を〳〵、えゝ口惜しい。

瓜一　おゝよし〳〵、後は俺が引受けた、お前は早く家へ歸れ、今春吉を拉れて本家へ行つたら、務さんが一人で葬式出すといつて騒いで居た。潔は泣く子守は居らずおまけにお前迄

居ないといふ始末だから、道の我慢やも閉口して居た、さッ早く歸れ、遲れちや損、大將の機嫌を取損なうと大事だ。

鹿子　（やう〳〵立上りて恨めしげに祿彌を向上げ）死に損ひの亡者め覺えて居ろ（順一に向ひ）赤吉は何うしました。

順一　潔の子守に本家へと置いて來た、今頃はもう葬式を出したも知れない、早く歸れ。

鹿子去る。

順一　（框を上りて祿彌に向ひ）いやはや實にお耻しい事です、穴へでも入りたい、堪忍して下さい。

祿彌　（頻りに咳入りつゝ）僕はあなたから謝罪られずともいゝです、あ、あやまられる必要を見ないです。

順一　（氣味わるげに笑ひながら）あなたは必要を見なくても私は必要を見るのです、第一あなたに怒られると私の事業が廢滅するから其れで七重の膝を八重にも折り、背に腹を換へない工夫するのです、まア左樣怒るべからず、怒るもんぢやがアせん、怒ると咳が出ていけない——時に和子さんは何うしました、阿母さんも見えないが茶の間ですかね。

祿彌　其樣事糺いて何にします、僕はあなた父子と口利くのも忌だ、歸つて下さい、お願ひだ歸つて下さい。

順一　歸れといへば歸りもしますが、皈る前にあんたに糺きたいことがある、え、たッた一言でいゝのだ、返事して下さらんか。

祿彌　たッた一言でいゝなら返事しませう、何ですか。

順一　外でもない、あんたは中心から和子さんを愛して居るのですか、其れを聞かして下さい、これは私が一箇人の資格で糺くのぢやない、加納務といふ千葉縣下第一の大地主に頼まれて來た駒塚順一が糺くのです、私に口利くのが忌なら務さんに口利く心得で返事して下さい、何うです。

祿彌　無論僕は愛して居ます、嘗てあなたの令嬢を潔白な者と信じて居た頃の愛以上の愛を捧げて妻と呼び夫と呼ばるゝ事が出來るものと信じて居ます。

順一　併し和子さんに財產がなかつたら、貴方は首を傾げるでせう。

祿彌　其樣事はありません、僕は黃金と結婚するが目的ぢやないですから。

順一　ふゝん左樣ですか、ぢや今和子さんが素寒貧になつても、あんたは和子さんと結婚しますね。

祿彌　勿論です。

順一　宜しい併し後悔しちやいけませんよ。

祿彌　後悔する位なら和子を引取りはしません。

順一　成程立派な御返事だ、歸つて務さんに取次いだらさぞ喜びませう、實は務さんの腹に卅萬圓の分配臍が當つてるから這樣事も糺いて見たくなるのさね、人間萬事慾の世中恐いものさ——いやこれは飛んだ、お邪魔（立たうとする）

おくみ、和子あほたゞしく奥より出づ。

おくみ　（祿彌に向ひ）大變な事が出來たよ、今ね六所の辻まで行くとね、金助だの熊吉だのつて小作達がね、佛さんをね、兄さんの——宏藏さんの死骸をね、親不孝者の務さんに葬式さしちやア加納村の名折れだつて主意で、二三十人手ん手に鎌鍬持つて、本家へ押掛けて行つたがね、早く何うかしないと佛さんは村の人達に奪はれてしまいますよ。

祿彌　（平然と）奪はれたつていゝぢやありませんか、打捨つてお置きなさい、奪ふ奴より奪はれる奴が惡いんだから。

和子　いゝえ左樣はいきませんよ、お父さまが私と務さんに財産を讓る時、精神はお前に遺る肉體は務に遺ると立派に御遺言なすつたんですから、肉體迄務さんから奪ふ樣な道理の違つた事をしたら、屹度あの人は、恐しい意趣復しするに違ひありません、だから其事を小作

達にいつて取鎮めないと後が甚く面倒です、あなたがお忌なら私だけでも參ります、現場へ行つて理解します（行かうとする）

祿彌　（とめて）まア待ちな、忌だとは言はんよ、行く事は行くがね、此病身では雨の中を——

和子　（びつくりして）あゝ左樣で御座いましたね、すみません、あんまりあわてたもんだから遂あの氣がつかないで、勘忍して下さいよ、よ、よ、あなた。

祿彌　貴嬢が惡いのぢやない、貴嬢から希望を貰つた僕が惡いのだ、昨日までの僕だつたら喜んで出掛けます。

おくみ　（和子に向ひ）早くしないとお前の心盡しが無になります、さッ行きませう。

和子　はい。

見向きもせずに兩人去る。

祿彌　まアお待ち、僕も行く、あなたばかり働かせて僕が安佚を貪るのは組合の趣意に欠けてる、お待ち〳〵、僕も行く。

祿彌去る。

順一憮然と立盡す。

度次出づ。

慶次　（順一を見て）駒塚の旦那、ちつとお聞き申したい事が御ざいます。

順一　なに。

慶次　あんたのお庇蔭で木下一回は水の底に埋沒ますが、何うです救つて遣る殊勝しいお心持アありませんかね。

順一　なんだと。

慶次　しらばッくれッこは御免です、ちやんと堤番の嘉七に聞いて來た今朝曉の今ですから、はぐらかしア食ひません（急に語氣をかへ）こいやなら忌でい、其かはり痛いめ見せて白狀させる。

順一　生意氣をいふな、痛いめ見せて白狀させる。百姓鍛冶の分際で無禮な、すされッ。

慶次　よし左樣出なされア萬人助けだ、農具鍛冶の櫻井慶次が、刀鍛冶の四郎五郎慶次に早代りする腕試し、見ろ（飛付く）

格鬪。

慶次、順一を膝下に組敷く。

天地暗澹。

悲風颯々。

（道具廻る）

（三）利根河畔

上手正面　風曲ませて利根川ケレップ式堤防、下手政疊、正面萬頃の田圃を隔て〜加納家の大屋山の如く聳立てる遠見。天門を劈いて滾落つる兩瀧の如く、坂東太郎の水音響をあざむく。

務　慕の上に宏藏の死屍を納め、自ら檢屍手となりて盆口に立ち、涙を抱ける春吉を後逸にかこい非常手段にも訴へかねまじき樣子、金助、熊吉以下大勢の村人と爭論してゐる。

熊吉　小旦那でも何でもいい、此方の言分通りにならにやア殿打つても引つたくれ、かまふもんか（立ちかゝる）

務　（いやしむが如く熊吉を見おろしつゝ）奪掠れるものならひッたくッて見ろ、此通り俺の方には彈込した六連發が十五挺も備へてある、いざといへば九十發の彈丸は貴樣達の胸を打貫くぞ（ピストルを熊吉の胸に擬し）命が要んけりやかゝつて來い、遠慮には及ばんよ、はゝゝゝ、何うだ勳八等瑞寶章の勇士、ロスケより捕虜の方が恐いのか、意氣地なし、其樣覺期で俺の向ふへ廻らうといふのは潛上だ、シベリヤの雪頽にも凍死へす、ウラルの山越えにも疲憊す、モスクワのパン責にも死なず、鐵と固い膀をペトンの樣にコンクリートした務の體軀は、一貫目にも足ぬ、小人國の鋤鍬持つて猫の額口程の畠をせゝり、狆の顏へ縫上げした樣な田をい

ぢつて拵へあげた貴樣達の麥飯軀とは違ふぞ、見損うな、覺えてをけ、此通りだ（逞しき双腕に力をこめてピストルの銃身を捻曲げつゝ）此ピストルの堅さはお前達の骨の堅さよりも硬い筈だ、が、これは言ふに足らん（左手のピストルを右手に持かへ）當面に柿の大木があるだらう、あの梢の一番上の小さなやつ、あれを俺が射切つて見せる、愕くな（狙ひを定めて柿の實を射落し）今度は左に差出た毛筋の樣な枝を射切るぞ（言葉と共に枝を射切り）一寸した見本が恁うだ、お前達の心臟は柿の實や柿の枝より大きい筈、其大きな物を射落す彈丸が九十發此處にあるんだ、一、二、三といふ悪聲の終らんうち、ばつた〳〵將棋倒しに射倒すは朝飯前、何うだ、これでも阿父さんの死屍を掠奪るといつて吼えるか蛆虫、分際を知れッ（ピストルをあげて聽吉の竹の子笠を空に射飛ばしへす銃先に金助の右手にかざせし鎌を射落し英姿颯爽傲然として一睨す）

熊吉、金助地上に伏す。

一同呆然。

和子、祿彌、おくみ雨を衝いて走り出づ。

和子　（勝ちほこれる務の前にたちふさがり）阿父さまのおなさがらは貴方の御自由で御ざいます、小作達の心得違ひは私から幾重にもお詫します、永源寺なり何處へなりお送り遊ばしてお差支へなからうと存じます。

務　む、能く言つた、道は俺の骨肉だ、蛆虫とは違ふ（蒸溜器を造めながら）卅萬圓の財産とお父さんの精神とを貰つて居ながら、肉體迄寄越せといふお前の子分共の屁理窟は癪だ、能く理を說いて馬鹿な眞似せんやうに諭しておけ、またもある、大事なことだ。

和子　よく言ひきかせて今度から理に外れた卑い眞似は致させません　から御安心下さいませ。

務　し。

祿彌　よし（刎の尖端を右にれち向け）大分女振があがつて來た、定めて裸美人の石膏像は碎いたらうな。

和子　はい、昨夜あれから慶鍛冶の處へ參つて——。

務　む、、其れで俺も安心だ、此上はお前の財産の登記を濟まして、あらためて對陣しやう。

（煙を噴る）

祿彌　務君。

務　——（祿彌を見る）

祿彌　君は阿父さんの肉體をあくまでも護る氣かね。

務　無論護るさ、君達がお父さんの精神を護る如くに。

祿彌　六十萬の財産は。

務　其れも護る。

緑彌　卅萬圓の分家地は。

務　和子に譲る。

緑彌　確かに。

務　確かに。

慶次出づ。

慶次　（一同に向ひ）お前等堤の切れる知らねえのか、東側から十六本目の逆雁木が溯ッべらだせ、土俵だ。

一同　なに。

慶次　駒塚さんの白狀だ、闘星よ。

康子走せ出づ。

康子　堤が〜〜堤が〜〜（務に取付く）

遠くにて婦人の聲　切れた〜〜堤が切れた。

同男の聲　逃げろ〜〜逃げろ〜〜。

暴風。暴雨。

木の葉舞ひ、樹枝折れ、石飛ぶ。

一同昏迷。

務郎かに衣帶を解く。

（舞臺一變）

濁涙天に沒し白波地を醫す。

流木縱横、死屍旋囘、慘、慘、

務宏藏、死屍を左手に抱き抜手を切つて泳ぎ出づ。

一浮一沈、勇氣時に沮むが如くにして而も汎まず、寸進尺退、やゝもすれば溺れんとする巨浪の飜弄を巧みに避けて上手に進み、巨躯三丈、舞臺中央に突出せる樹樹の梢に取付く。

悲風慘憺。

梟樹梢に鳴く雨三聲。

雨霽れて月出づ。

（幕）

大詰

（十月廿五日拂曉）

洪水後の屋敷跡

上手に花崗石の斷礎、下手に築山のあとめしき高丘、高丘と斷礎との中を貫き次郎上りに茫々たる洪水後の水田萬頃、坦さなから砥の如く曉の空に浮ぶ。

東天や〻紅く、秋氣澄み、曉風面を打つ。

消魂しき百舌鳥の聲、悲しげなる追分節にて幕開くと直ぐに吃の嘉七、頬冠り、尻端折り、忍び足、あたりを窺ひ〳〵出で高丘の後に潜む。

追ヲ節餘韻消えて、寂寞の氣味あたりを領し、哀愁のおもひ坐ろに人の心を刺さんとする時、加納務（好みの拵へ）右の手に鐵鞭を提げ、左の手に棒を持ち、草履穿き、顧望しながら出づ。

務　堪へられる困難の大きい小さいに比例して人物の高い卑いは定まるのだから、俺の困難の大きいのは、俺の人物の大きいのを意味する譯で寧ろ慶すべき現象だ、神さまは俺の骨肉と財産とをお奪ひになつたけれど、勇氣と信仰と健康とをお奪ひにはならなかつた、加納家の家藏は自然の大威力に壓潰されたけれど、神の宮殿はなほ依然として雲を凌ぎ霞を吐い

て碧霄に聳えて居る、春風好山を吹出し來る前途洋々の希望は、丁度サンベルナーの險を踏破つた大ナポレオンの意氣其まゝ、大農法の實施もこれから、島國的の縮緬皺に火熨斗を當て〻大陸的に引伸ばすのもこれから、肥料の利かぬ纖維澤山の椎實蘿蔔に過燐酸石灰の御馳走攫應ッて本場練馬に作り直すのもこれからだ。壓迫に次ぐに威力、威力に次ぐに恩惠、恩惠に次ぐに愛、愛に次ぐに希望と信仰の結晶敎育、恁ういふ順序で蒙昧な村の者を導いたら、十年の後廿年の後、卅年四十年の後には、加納村はいふに及ばず千葉縣下一圓は、悉く俺の手足となつて働くに違ひない。鍬や鋤の手道具に耕される水肥臭い土の匂いが蒸氣犁の齒車に移香すればしめたもの、巨萬の資金を要する利根川の改修工事浚渫工事はもとより、縣下第一の金ッ食ひで有名な築堤工事も俺の獨力で引受けて見せる。とすれば、千葉縣の加納が一躍して日本の加納となり尋いで世界の加納となるのも遠い將來の事ではない。ユーゴーの格言に、「ナポレオンは一滴の雨の爲にウオーターローに敗れたり、勝敗は人間胸中の打算のみによりて決せらるゝものにあらず、勝敗と成功とを汝の目的となすことなかれ、唯よく努めよく戰ひよく忍び、よく爲さんがために生きよといふのがあるが、此格言を眷々服膺する程に興味ある運命を双肩に擔つてる俺の今の境遇は、東郷大將が三笠の司令塔に立つて敵艦を睥睨した時のフエータルポイントに比べることが出來ると思ふと、菊花大授章を主上自

ら胸間に懸けて下すつたよりも嬉しい、自分の第一の證明者は自分である、第二の證明者は神である第三の證明者は事業であると何かの本に書いてあつたが、實に其通りで、自分の良心が許す限り、狂と呼び賊と呼ぶも他評に任すべきもの、厳々たる毀譽は神と共に歩む者の顧慮すべきものではない、自分は小さい、が神は大きい、其大きな神と協同して成就げた事業の價値が人爵に優さる萬々なのはいふまでもない、妹や阿父さんが神さまとして信じて居る、二宮尊德翁の事業と俺の事業とを比べて見ると、外形は全然油と水ほど違つて居るが、内容は符節を合せる樣に似てゐる、良心の峠に望遠鏡提げて聖靈のサーチライトに行手の道を飽くまでも照らして居る勇士の事業が、櫻町の惡風を矯正した尊德翁の事業に等しい天爵を與へられるのは自明の理『駿足思長阪』『石の上にも三年居れば温なる』此矛盾した二つの言葉が即ち俺のモットーだ、よく信じよく斷じ難きを碎いて進む者の額に望の星の輝かぬ道理はない、彈く力と粘り氣の無い人間の額口に三角の紙の貼られるのは神武以來の定則、此樣の主も其れ、此鐵鞭を拵へた慶鍛冶も其れ、此麻裏の製作主も或は其亞流かも知れぬ—いや圖に乘つて饒舌りした、どれ早く永源寺へお詣りしやう(行きかける)

花助　(なれ〳〵しく務に向ひ)ちよいと旦那、あなた私の姐さんを御存じなくつて。

務　(そつけなく)いゝや知らん。

花助　だつてあんたア此村の方ぢやありませんか。

務　此村の者には相違ないが、藪から棒に其樣事糺いたつて、見ず知らずの儘に氣の利いた返事が出來るもんか、一體お前は何だ。

花助　私はね、東京の新橋の琴三升の下地ッ子よ、あなた琴三升ッて御存じでせう。

務　琴三升聞いた樣な名だな、むゝ、春吉ッていよ藝者の家、左樣だらう。

花助　あゝ左樣なの、春吉ッての私の姉さん、何處に居るか敎へて頂戴、後生だから。

務　敎へても遣るが、お前は其春吉ッて藝者の本當の妹か。

花助　いゝえ、私はね、ホッ子の内に姐さん許へ貰はれて來たんですよ、私の本當の阿母さんはね今大變に豪いお金持の奥さんになつて、雇人の三四十人も使つて、毎日物見遊山に出歩いて、榮耀榮華してゐるんですッて本當に羨ましいわね。

務　何故其樣立派な阿母さんがありながら藝者の下地ッ子なんかになつたのか。

花助　譯は私知らないけれども、今の御亭主が大變燒餅燒だつていふから其れで私を姐さんとこへ呉れたんでせうよ。

務　阿母さんの今の亭主はお前のお父さんぢやないのか。

花助　はア阿父さんぢやないの、お父さんは外にあるの。

務　阿父さんの名を知つてるか。

花助　いゝえ。

務　阿母さんの名は。

花助　康子ッていふの。

務　なに。

花助　駒塚康子ッて云ふ人ですよ。

務　（考へながら）幾つになる。

花助　私の年齢。

務　うん。

花助　八歳になるの。

務　（指を折つて算へながら）十七の時に生んだんだな。

花助　え。

務　（獨語の樣に）八年前に生んだのなら十七の時だらう、左樣だ、十七の時、俺が丁度二十

二、ひゝ。

花助　あら（近くよつて務を見上げ）あなたお母さんを御存じなの。

務　知つてるとも、お前の阿母さんが子供の時分から知つて〳〵知りあきるほど知つて居る。隨分我まゝなこまり者さ。お前のお父さんの名も俺はちやんと知つて居る。

花助　まア、何ていふ人なの敎へて頂戴な。

務　小松祿彌ッて彫塑家で直ぐ此村の東の端に居た人さ。

花助　今は居ないの。

務　さア、頃日の洪水に流されなきや歸つて來るに極つてるが、でないと、お前の阿母さんや姐さん同樣、佛樣になつてるだらう。

花助　あら、ぢや阿母さんも姐さんも皆死亡ッてしまつたの。

務　左樣さ。

花助　（泣きながら）な、なぜ、阿母さんも姐さんも私を捨てゝ死んだんだらう、あ、あ、あんまりだわ。

務　泣くものぢやない、泣くと佛樣が浮ばれない、泣くぢやない、泣いちやいけない（鍬と樣とを路傍の石に立てかけて優しくいたはる）

花助　（聲をたてゝ泣く。

藤者ぼん太遽しく出づ。

ぼん太　（花助を見て）まア花ちやん何をお前泣くの、大きな軀して見ッともない、人さまがお笑ひなさるよ。

花助　だ、だッて、ね、姐さんも、阿母さんも、みんな、死、死んでしまつたッていふんですもの。

ぼん太　まア誰が其樣事を言つたんだえ。

花助　（務を見返り）此旦那が仰有つたの。

ぼん太　（務に向ひ）あの失禮で御ざいますが、琴三升の春吉を、あなたは御存じなんで御ざいますか。

務　知ッてゐます。

ぼん太　ちやあの本當に溺死つたので御ざいますか。

務　溺死りました。

ぼん太　（うれひに沈みながら）死骸はあの、見つかりまして御ざいませうか。

務　昨日見つかつたさうだから、多分もう假埋にしたか知れない、なんなら役場へ行つて糺くがいゝ。

ぼん太　役場は何處で御ざいませう。

務　直ぐ其處を左に曲つて三町行くと右側に天幕張りの大きな建物があるが、其中の取ッつきが布川病院の施療所で其奥が村役場の假小屋、まだ朝早いから誰も出てゐまいが、二時間も經つたら行つて御覽、屹度深切に敎へて呉れる。

ぼん太　有難う御ざいます（花助に向ひ）さッ花ちやん泣いたッて詮がない、これから旅宿へ歸つて出直して役場へ行つて糺いて見ませう、死骸を見ないうちは安心がならないから（務に一禮して行かうとする）

務　一寸お待ち。

ぼん太　はい。

務　（やさしく）あんたは春吉さんとこの家族かね。

ぼん太　はい。

務　ぢや此子の爲に忠告するが、後に役場へ行つたら加納和子といふ婦人の生死を尋ねて、若し生きて居たら其婦人の處へ行つて、此子の身の上を匿さずに詳しく話して相談して御覽、屹度いゝ事がある。事によると此子の戀しがつてるお父さんに逢はれるかも知れない、加納和子、若衆たちの力味のある男の樣な顏の婦人だ。

ぼん太　いろ〳〵御深切さまに有難う御ざいます、あの失禮ですが貴方のお名前は何と仰有いますかお聞かせ下さいまし。

務　（無雜作に）僕の名か、僕の名は加納務。

ぼん太　（びっくりして）あの貴方が、加納村の加納様の若旦那様でいらッしやいますか。

務　左樣です。

ぼん太　まア些も存じませんものですから、つい失禮致しました御免下さいまし。

務　は、〳〵御挨拶痛み入ります（誰にいふともなく）駒塚も死んだし、春吉さんも死んだし、康子も死んだし此子の身よりは皆死んだが、小松だけは生きてるかも知れない（ぼん太に向ひ）兎に角、加納和子ッて婦人を搜し出せば萬事都合よく行くだらう、左樣するさ。

ぼん太　はい。

務　僕は今初めて此子から僕の家内の惡事を知つたが、無論あんたも客商賣してゐる家の家族だから駒塚や春吉さんの噂で、此子の兩親の事は知つてるだらうね。

ぼん太　はい詳しいことは存じませんが、花ちやんの知つてる位の事は私も存じて居ります。

務　左樣だらう、知らぬは亭主ばかりなりで、隨分器量の惡い話だ。併しこれも運命・悔ひ處はない（氣をかへて）お分れしませう（小さくいふ）。

ぼん太・失禮いたしました（花助に向ひ）お辭儀なさいよ。

花助　左樣なら。

兩人去る。

務　あと見送りて立歪す。

嘉七出て〳〵覗ひ寄る。

務　俯向く。

嘉七石に立てかけある鍬鍬を執つて振りかざす。

危機一髪。

銃聲。

嘉七たふる。

三輪大尉（軍服）手にピストルを提げ妹菊枝子を從へ出づ。

三輪　（務に向ひ）今日といふ今日、負債をやつと返しましたぞ、危いとこだ、君にも似合はん、不覺千萬な。

務　いや實に思ひがけない出來事で、道の僕も氣が遠くなりました。

三輪　はゝゝゝ。ちつとは氣が遠くなるもよからう。あんまり君の氣は近過ぎる、マイナスといふ近視眼だ、強い、こはい、險呑、盲目になりたがる、用心したまへ。時に這奴、

（嘉七を指し）意趣で君を殺さうとしたのだらう、知つとる奴かね。

務　知つてる處ではありません、僕の爹を恵比須講の晩僕と間違へて暗殺した憎むべき奴

罪です。

三輪　左樣か其樣凶漢が洪水前にあつたのか、僕ア些とも知らなかつた、お父さんもお逝去に

なつたとは聞いたが、矢張り溺死、或は御病死、と位に信じて居た、成程君が、路傍に立つ

て、茫然自失されるも無理はない（憎さげに嘉七を見据ゑて）何うして呉れう、執念深い這奴を——

踏殺さうか。

務　踏殺しても飽足らん奴です、這奴が自分の職分を怠つたおかげで木下郷は水底になつ

たです。僕と間違へて爹を刺したのも憎いし、今又執念く僕を殺さうとしたのも憎いが、其

れよりも、より多く憎いのは、自己の職責を怠つた罪、之が一番憎い、他の二大罪は赦すこ

とが出來ても此一罪は赦しがたい、大尉殿、其ピストルをお貸しなさい、銃刑に處して遣る

から。

三輪（向ふを見込み）待ちたまへ、人が來る。

李平出づ。

李平（務に向ひ）旦那さま御無事でお芽出たう御ざいます。

務　オ、、お前も怪我がなくて結構、其後何處に居る。

李平　お嫂さまの許に居ります。

務　左樣か、ちや和子の安否は知つてるな。

李平　はい存じて居ります。

務　生きてるか死んでるか。

李平　無論生きていらッしやいます（懷より手紙を出し）此れが和子さまのお手紙で御ざいます

（渡さうとする）

務　（腕を組みつゝ）いや讀むまい、分つて居る、持つて歸れ。

李平　でも折角お遣はしになつたもので御ざいますから、一寸一目御覽下さいまし。

務　いやだ、讀むだけ損だ。

李平　ちや私が御免蒙つて讀みませう。

務　む、左樣しろ、聞くばかりならかまはん。

李平（和子の手紙を聲高く讀む）恐しき洪水にも溺れたまはざりし御運の強さをお祝ひ申上げんか

お悔み申上げんかと躊躇致し居り候ひしが父上の御遺骸を飽までも御護り遊ばし候由ほの

かに承り惡人にはおはせど約束をお踏み遊ばす御勇氣の旺んなるに敬服致しお悔みとお祝

ひとを一つに致し不本意ながら一筆しめし上候扨あの日矢を射る如き水の勢ひに私も小松も手を取りあつたまゝ押流され候ひしが二宮明神の冥助にて幸いに流れ來る戸板につかまり夫婦共命拾ひ仕り候まゝ他事ながら御安心被下度候唯今は惣村の二十五番地に天幕張つて杢平其他の雇人達と同居致しをり候が追つては一千坪ばかりの屋敷を見立て見苦しからぬ邸宅構へ候心得故左樣なつたらば改めて御目もじ仕るべく候但し父上の私に賜ひし村正の七首は洪水にも失はず候まゝ村正が正宗に變化致さぬ限り私とあなたとは敵味方に候これは改めて申上ぐるまでもなけれど女はけちなもの意氣地のない者とお侮り遊ばすあなたさま故困難に遭つて氣が弱くなつたらうから何の道おれの許えあやまりに來るだらうなどと早呑込み遊ばしては困まり候まゝくどうも申上置き候祿彌よりも手紙差上げる筈なれど少々不快にて臥せり居り候間私より宜しく申上げ呉れとの傳言に御坐候先は要用のみあら〳〵かしく、和子、務さま。

務　はゝゝゝゝ何れ其樣事と思つた、相變らず下らんことを言つて居る困つたものだ。

杢平　御返事は參りませんか。

務　返事なんて遣るものか――いや返事よりもいゝものが此處にある（嘉七を指し）お前此男を知つてるか。

杢平　（びッくりして）か、嘉七さんで御ざいますね。

務　うん嘉七だ、多分洪水のどしやくしや紛れに繩抜して來たのだらうが、其れは兎に角、這樣處に寢て居ては邪魔だ、和子への返事代りに、お前面倒でも連れてッて呉れ、處分は和子の心任せ、其筋へ引渡すとも、逃がすとも殺すとも自首させるとも都合のいゝやうにするさ、な、いゝだらう、立派な土產だ。

杢平　へい畏まりました、ぢやお貰ひ申して參りませう。併し死んでるぢやありませんか。

務　死んぢや居ないよ、恁うすりや甦る（活を入れる）そら甦た。

嘉七目をあく。

杢平肩に引きかけて去らうとする。

嘉七頭へながら務を見る。

杢平　――（目禮）

杢平、嘉七去る。

務　あゝこれで晴々した（大尉に向ひ）あなたがおいでなさらなかつたら、今頃は、恨みを呑んで馬鹿者の手に犬死にしてる處でした、實になんとお禮申していゝか、口無重寶の僕に……お禮の申しやうがありません。

三輪　は、、、、、お禮どころぢやない、僕こそながらく君の恩を借用してゐて、寔とに恐縮だと、手を突いて、三拜九拜しなけりやならんよ、併し禮いはなきや、氣が濟まんといふ譯なら、お互ひッこにしやう、ね、其れでいゝだらう。よくない、いや、宜くてもわるくてもかまはん、僕は其樣くだらん義理仁義聞きに遙々東京から靴の裏の鋲を磨滅しに來たんぢやない、君の腹を糺いて確定事を極めちまはうともつて來たんだから、其心得で僕の問ひに答へてさへ呉れゝばいゝ、其れで僕は君から、百曼荼羅禮いはれるより滿足して歸る、何うだね、返事が出來るかね。

務　出來ますとも。

三輪　其れはありがたい、ぢや糺くが、君の細君は死んださうだね。

務　死にました。

三輪　令息も死んださうだね。

務　死にました。

三輪　すると後妻を迎へるのが順序と思ふが何うかね。

務　無論迎へなくちや困ります。僕もまだ三十になるかならずの青年ですからね。

三輪　左樣だらう勘平さんといふ年齢だ。

務　冗談は後廻しにして其後妻にお心當りがありますか。

三輪　あるとも即ち其後妻はこれだ（菊枝子の手を取つて務の前へおしやり）先頃一寸話しておいた僕の妹の菊枝はこれさ、いや顔をあはせるのは初めてゞも文通の上ぢや相識だね。これは埒が早くていゝ、何うだい、後妻にする氣はなしかね。

務　（きつぱりと而も熱心に）致しませう。

三輪　して呉れるか。

務　はい。

三輪　其れは芽出たい、菊枝喜べ、お前の日頃の望みは適つた、俺も安心。務君あらためて禮いふよ、有難い、併し君もこれを後妻にすれば幸福だ、兄の口から妹を褒めるのも變だが、なか〳〵確りした意地强い處があッて其れで居て案外女らしいから頼母しい、君の家内には誂へ向きだ。保證する、陸軍大尉三輪乙彦が金鵄勳章の前で證明する。若し爪の垢程も見掛ないがあつたら僕は腹を切る、何うだ信用するかね。

務　信用します。

三輪　其れで極つた。さア握手（務と菊枝子との手を取つて一緒に握らせ）天照皇太神も照覽あれ、此兩人の天緣は明治〇〇年十月廿五日午前六時、大日本帝國軍人騎兵大尉正六位勳五等功四級三

輪乙彦に由つて結ばる。

務　（菊枝の手を取つて一歩進み）菊枝さん貴嬢は僕を良人として今後の苦樂を偕にする事が出來ますか。

菊枝　（熱心に）はい。

務　（二三度菊枝の手を振り動かし、やがて解いて大尉を見、渺々として際涯なき洪水後の水田を望みながら）神は洪水といふ立派な鍬を當てゝ人間の拵へた醜い小區劃を取除いておしまひなすつた。大なる神意の前には卑しい人間の手細工の畦畔を許さぬ。神は大農を讃し給ふ。

務　歡極つて大尉と菊枝とを抱擁す。

旭日東天に昇り。

生氣横溢。

（幕）

大農畢

豐公醍醐花見宴

時は慶長三年三月十五日
處は山城宇治郡醍醐三寶院

本舞臺正面、上手三寶院山門下手桐の紋ある幕を廻らしたる書割、侍烏帽子、半素襖、殿立を取りし侍五人、擬寶を擬へる下人三人居並びて幕開く。

侍一　太閤樣には唯今お着き。
侍二　一番には北の政所。
侍三　二番は三條の君、三番は松の丸殿。
侍四　四番は我君、若君諸共御輿に召され。
侍五　五番は淀君、六番は加賀の君。
下人一　世に類なき女房達。
下人二　今日を曉と着飾り給へば。
下人三　眩いほどで、トント眼が見えませんだ。
侍一　實に其方達はさもあらん、比ぶ者無き君の御威勢。

侍二　日の本の中は草木も靡き、聚樂の猿樂、北野の茶の湯。

侍三　異形の御裝は吉野の御花見、吉野山誰とむるとはなけれども。

侍四　こよひも花の蔭に宿らん、高野山では逕歌百韻。

侍五　朝鮮征伐の最中にも、四季歡樂の數々は底の知れざる大腹中。

下人一　旋て大明唐國の唐人輩も降參し。

下人二　世界の限り津々浦々、我國の旗靡し。

下人三　豐臣のお家は萬々歲。

侍一同　めでたき時世で。

下人一同　御座りますなあ。

此の時上手より小川土佐守、上下大小、馬上にて下人を伴へ出づ。

侍一　小川殿には何れへお越しなさるゝや。

小　これは方々御免下され。君の上意とあつて德川殿を御召の爲め俄のお使者。

侍二　成程、此の御花見に內府の見えぬは花に月なき心地で御座る。

小　されば御座らう、鞭を早め是非櫻狩に來會せ給へと、御狀を某捧げ參る。

侍三　諸侯の中にも德川殿は、格別の御心遣ひ。愈々興が加つて御座る。

小　一刻を爭ふ急ぎの御使、方々御免。

と、馬を早めて花道へ入る。

侍四　いで我々は警護の役目、其方達は山上へ御酒を持ちて參るが可からう。

下人一同　ハイ、ハイ、畏まりまして御座ります。

侍五　然らば各々方參るで御座らう。

侍は下手へ、下人は上手へ入る。

上手より下げ髮、帶を壺折にしたる淀殿、下手より卷立上下の石田三成出で顏を見合す。

淀　治部少なりしか。

石　淀樣に在せしか。

淀　シテ〳〵手筈は殘らず整ひしかや。

石　其の儀は御配慮なされますな。シテ御前の首尾は如何で御座りました。

淀　寂しいと申上げたら、唯今土佐守が家康奴を迎へに行たわいのう。

石　それは洵に好都合、此の上は狸老爺も袋の鼠。

と、再び顏を見合せ。

淀　オホヽヽ、ホヽ。

石　アハハヽヽ。心地快い事で御座りまする。

と二人は四邊の捨石に腰を掛け。

淀　手筈は豫て言合せた通り。

石　此方へ參る道筋に島左近の手の者を伏せて御座れば、四方より圍んで討留め申さん、若し萬一仕損じて御宴に侍るとも、某此の鈴を鳴すを合圖に(と袂より鈴を出し)忍ぶ刺客の及の露。

淀　おゝ行屆きたる其の手配り。自ら網に入る魚の逃れんやうもなかるべし。若し我君御他界あらば、誰よりも可怖しきあの家康、今災の根を絶ち置かずば、秀頼の身の上心許無し、豊臣家を萬々年の末迄傳へんと思へば、斬らねばかなわぬ内大臣。

石　仰せの通り狸奴は、天下に隱れのない弓取、既に我君も長湫の敗北に戰さ給ひし無雙の智者、加之それと外には見えねど、内々諸侯に好みを結ぶは、天下を覗ふ下心、いつかな生かせて置けませぬ。

淀　何時ぞや太閤が若君を抱いて籠の中から諸大名を透見さしやつた時、一番將戯しい輝元を秀頼が可怖いと申したら、イヤ〳〵あの色の黐い爺ぢやと仰せありもを考へても、我君でさへ家康は、眼の上の瘤と思召すなれば、彼亡はれしと聞召さば、定めてお喜びなさるで

あらうわいナア。

(淀樣、淀樣いのう、君のお召で御座りまする)と侍女の呼ぶ聲が聞える。

淀　アレ〳〵呼ぶ聲がするわいな、さらば治部少、必ず首尾克う。

石　屹度吉左右を聞え上ぐるで御座りませう。

淀君上手へ急いで入る、治部少ニッタリ思入あつて下手へ入ると、背割を左右へ引いて取る。

舞臺一面、櫻樹滿開の體、上手下手に幔幕を張り、後方へ段々高くなり、中央に奥より通ずる徑あり、櫻枝には紅の糸にて網を作り鈴を多く附け、春風の吹くに任せて鈴の音の清く鳴る仕掛。

奥より微に紫の幕、下げ髮の政所を先に同じ扮裝の松の丸殿、三條殿、加賀殿、卷立上下袴の長東大藏大輔、石田治部少輔、大谷刑部少輔、侍女大勢を連れて出る。ズラリ舞臺に並んで。

政　道すがら、散かゝる花を雪と見て。

松　休むに惜しき花の莚。

三　心憎きは春の山風。

加　我君樣の御威光にて、月日の歩みを止めさせ。

長　小鹽の山にあらねども神代の昔にかへしなば。

石　とり〳〵廻る盃の天も定めて酔うで御座らう。

大男一同　ハテ面白き。眺で御座る。

（幕の中にて（御成））

政　我君様にはあれに御座ありしか。これにてお迎申上げませう。

一同其處へ平伏する。

幕より出る臣秀吉、胡麻白勝の卷立、水干に差貫（或は道服）、同じ扮裝に烏帽子被たる秀頼を抱き、襁褓の裾を穿きし淀君を始め、侍、侍女を隨へ、蹤々と出て花道よきところへ止る。

秀　政所にはよきところを見附けられしよな。其處にて花見の宴を開くであらうぞ。

一同　ハヽア。

高麗縁の疊の上に褥を布き、脇息を置き坐を中央に設けると、秀吉は舞臺に入り秀頼政所以下疊の上に居並ぶ。

秀　面白き今日の花見、今も御牧勘兵衛の茶亭へ參りしところ、勘兵衛の女房氣輕な奴にて、立出でんとする袖を控へ、お茶を飲つた上はお茶代をお置きなされませといふ、日本六十餘州は掌中に握れど、小判一枚用意なければ、これにはほと〳〵迷惑いたした。

淀　如何程無いと仰せられても、奈何あつても女房が離しませぬのを、振切つてお逃なされた上様のお恰好、今も眼に見えるやうで可笑しう御座りまする。

秀　百萬の敵よりも手剛い奴、して秀頼は何が面白かつたぞ。

秀頼　麿には船の人形が面白う御座りました。

秀　有難は我兒、あれは朝鮮渡海の兵船を眞似たもの、清正や行長はアレに乘りましたのぢや。シテ政所には何處へ行かれた。

政　私の參りましたところは、玄以法印の設けし湯殿。

松　小川土佐の茶房にはあまたの傀儡師。

三　岩の狹間に物寂て、柴の垣、竹の網戸の古りし菴は。

加　態と新壯入道東玉が建てし燒餅店。

政　とり〳〵趣向を凝しまして御座りまする。

秀　おゝさなりしか、盃持て。

侍　ハヽア。

酒盃に餅干、携瓢、數々取揃へて前へ置く。

石　申上げます、名酒には加賀の菊酒、麻地酒、奈良の僧坊酒、博外の煉酒、江川酒、日本國中のを集めまして御座ります。

秀　左様であるか、然らば此の盃に天地を入れて飲干すのぢやな。

石　仰せの通りに御座ります。

秀　あゝ心地善い事ぢや。然らば此の盃治部少に取らすであらう。

石　有難く頂戴仕ります。

秀吉盃を三成にさす。

秀　詠うだやうぢや。我母日輪懐中に入ると見て胎み、恁う四海を統一したるも、異國に種無き此の花と咲かん爲め、我櫻花を愛するは我を愛するに同じ、爛熳として春に咲く櫻花は我ぢや、我は櫻花ぢや、緋緘の鎧着て櫻花の前に立つならば、よも人と花とを別ち得まい。大明を征服なさば、櫻を數萬移し植ゑ、唐國人を仰天させ、今日の如くに酒宴なさんぞ。

長　追々參る我軍の吉報。

石　明王を生擒するも暫く間。

大　凱歌上ぐる花見の宴、早く開きたいもので。

三人　御座ります。

秀　おゝそれも間の無いことぢや、皆寛いで過すが可からう。

一同　ハ、ア心

花道より侍出でよき所へ躍ふ。

侍　ハ、ッ申上げます、徳川殿へ御使者に赴れました小川土佐守唯今立歸られまして御座ります。

長　苦しうない、これへと申せ。

侍　ハ、ッ。

侍退きて土佐守出で舞臺下手に平伏する。

秀　お、土佐、大儀であつた。して内府は直ぐ參るか。

小　ハ、ッ、御諚を傳へて候ひしに内府は所勞の趣なれば御前へ其の旨よしなに御披露、追附けお斷の使者を差出すとのことに御座ります。

石　何、内府には所勞とな。

と、淀君と顔を見合ふ。

秀　所勞とは一時のことか。

小　ハ、ッ、左様に承りまして御座ります。

秀　、あの色の黎ひ強さうな爺も、時々は病の神に見舞はるゝと見ゆる。土佐は悠りと休息

致すがよからう。

小　ハヽッ。

と、下手へ入る。

政　内府がこれへ見えたなら、一層興を添へやうもの。

淀　だぶ〳〵としたお腰附、此處迄お登りなさるゝ恰好が、嘸可笑しかつたであらうわいの。

侍女一　ホンに淀樣の仰る通り、徳川樣は自ら帶を召すことがかなはぬとやら、聚樂で猿樣御覽の時、常眞樣は龍田の舞にお上手で御座りましたが。

侍女二　徳川樣は船辨慶の義經で、布袋のやうなブタ〳〵、思はず一同ドッと笑ひましたのが、今にも耳に殘つて居ります。

侍女一同　オホホヽホヽ。

侍一同　アハハヽハヽ。

秀　コリヤ〳〵汝等は小事に必を掛け大事に暗き癡呆者ぢやな。常眞の如く能ばかりよく演ても、家國を失うては何の益かあらん。家康は猿樂にこそ心を用ゐねど、當時弓矢を取つては其の上に出づる者はあるまい、家康の藝は三つあり、常人の及ぶ所ならず、第一は武略

衆にすぐれ、第二は思慮細かにして、第三は金銀を多く持てり、此の三つは人に笑はるまじき大藝なるを、汝等は何を喇るぞ。何時の時にてかありけん、諸大名列座の中にて、態と彼を驗さんと、我昔より今に至る迄弓箭の道に於て一度も不覺を取りしことなしと廣言せしに、何れも上意の通りと平伏せしかど、彼のみ一人景色を變へ、殿下の仰せなりとも事にこそよれ、武道に於ては某を御前にさし置かれて、斯る御言葉承るべくも候はず、小牧の事を忘れさせ給ひしかと立上りし程の者、屈しては浮田の許にて我の履をも直されども、測り知られぬ彼の心、底無き池にひとしいやうじや。

石　斯る莚にては憚りあれど、さほど迄心を置かせらるゝならば、何故あつて其の儘に……。

秀　ハテ治部少は小さな氣ぢやの、自己に敵對する者を皆邪魔ぢやと思ふならば、日本國中の者どもを鏖殺にせずばなるまい。予は左樣な心の狹いものでないぞ。縱令此方の隙を考へ、天下を己が物にせんと思ふ者なりとも、我に降參なす以上、助け置くのが予の心ぢや。また家康も心廣きもの、慶長元年七月伏見城にて大地震の時、遲參の者ども多かりしかば、久しく刀をはかず腰のあたり重しとて、井伊直政に持たせたり、與も程なく來りしかば、乘らんとして本多忠勝を召び、汝等の下心には、今日こそ秀吉を討たんによき時節なりと思ひ

つらめ、さりながら汝の主は、さる懐中に入りし鳥を殺すやうなる事はすまじ、先に我刀を汝に持たせたくは思ひしが、折悪しく隔り居て、間に合はでいと磯り多し、汝に持たせたらば嘸面白かりなんものをと打興せし事もあり、其の如く器にかゝりし獣は殺さぬものぢや。

―異な話に打溺つた、こりや者ども、召し置きし白拍子をこれへ召べ。

侍　ハヽッ。

金烏帽子、狩衣、緋の長袴の白拍子出でゝくせ舞を舞ふ。

一同　よいや〜〜。

白拍子被け物を賜りて入ると、花道へ以前の取次の侍出づ。

侍　ハヽッ、申上げます、唯今徳川殿の御使者として本多作左衛門重次罷出でまして御座りまする。

秀　ナニ鬼作左が參りしとな、優しき花の宴の莚に、武骨の彼を使に出す、ハテ家康は心憎き奴かな。疾う〜〜コレへ來よといへ。

侍　ハヽッ、畏まりまして御座りまする。

と、揚幕へ入る。

松　鬼作左と仰せられまするは、大政所様のお喰遊されました者では御座りませぬか。

秀　お、、如何にも其の鬼ぢや。

一同顔見合せて可怖がる。

秀　何も其のやうに恐れることはない。鬼も斯樣の日には浮れて出やう。また酒宴の一興ぢや。

白巻立　上下姿の本多作左衛門、塀際より出で花道よきところへ平伏する。

秀　お、作左か、近う〳〵。

作　陪臣の某恐れ多い事で御座りまする。

秀　秀吉を恐る、其方か、殊に今日は内府の名代ぢや。苦しう無い、近う進め。

作　然らば御免下さりませう。

と、舞臺に入り下手よき所へ住居、手を仕へる。

秀　主人家康、お招きに預り御宴に侍りまする筈なれど、稍かの所勞にて引籠り居りまする。

作　今日ばかりは失禮御免と、斯樣の儀に御座りまする。

秀　態々使者に及ばねど、其方が來たのは内府の馳走ぢや。シテ所勞は重症ではないか。

作　お心遣は御無用、至極輕症に御座りまする。

と、三成を睨む、三成顔を反ける。

秀　作左久し振じやな。其方は國許に在りしと聞きつるが、何時上り來りしぞ。

作　せめては老後の思ひ出に、都の花見と思立ち、二三日前若京仕りまして御座りまする。

秀　作左の花見か、コリヤ面白い、イザ大盃を取らすであらう、誰かある、盃持て。

侍女　ハ、ッ。

作左衛門との間に盃事よろしくある。

秀　コリヤ作左、何時ぞやは母が厄介になつたの、あの時歸つて後の小言には秀吉ほとほと當惑致した。薪の山にて四邊取卷き、今日火を附けやう、明日燒かうと其方は殊の外急いださうぢやが、其の火の炎は皆予の方へ參つたぞ。

作　仰せには候へども、京洛の形勢明かならぬに、我等の生命數萬寄せ集めたりとて代へ難き主君をお渡しての留守居、千軍萬馬の間の往來は些しも苦しう候はねど、あの時ばかり肝膽をくだきしことは御座りませぬ。

秀　其方としてさもあらん、北條征伐の折柄、秀吉駿府の城を借りしに、汝、凡そ國の主たるもの、己が居城を明けて人に貸す理あるべきや、人が女房を借らんと言はゞ貸し給ふやと

内府を諫めしことも聞いてあるぞ。德川殿はよき者どもばかり召仕はるゝな、秀吉羨ましく存ずる。作左、都の内は何處にても明渡せば綾りと見物したが可からう。

と、小姓の持てる太刀を奥へ。

秀　これを土產に取らするぞ。

作　ハ、ッ有難く頂戴仕ります。長居は却つて恐れあり、爺め御免を蒙りまする。

秀　内府に所勞大切にと傳へてくれ。

作　ハ、ッ。

と、三成を尻目にかけて、花道へ入る。

三　所々鬼が歸りました。

加　聞きしに優りし可怖しさ。

秀　其方達は太う嫌ふが、烏渡は得難い侍ぢやー——春の日永の長閑さにトント堪らぬ程睡うなつた、少し假寐む其の間皆の者は控へてくりやれ。

一同　ハ、ッ。

と、一同上下手に入り、太刀持のみ殘る。太閤脇息に凭れてウト〳〵となると、ダークチエンヂにて舞臺の光景一變す。

何處とも分かぬ荒野、枯芒物凄う生ひ茂り彼皮此處に獨樹落ち散りあり、時に青光キラリと照りて、陰森の氣舞臺に充つ。

太閤茫然として舞臺の中央に立ち、側に白の上下姿の者平伏し居る。

秀　醍醐の花見の宴に在りしと思ひしに、何時の程にか物凄き、斯る土地へ來りけん。ハテ何處にてあるやらん。

と、足下に眼を附け。

秀　其處にあるは、何者なるぞ。

（ハヽッ）と、頭を上ぐ。

秀　ヤア汝は秀次の家臣木村常陸介にあらざるか。シテ〳〵何故參つたぞ、また此處は何處ぢや。

常　此處を御存じ遊ばされませぬか、地獄へ通ふ道に御座りまする。

秀　ナニ地獄へ通ふ道ぢや。予は何故あつた斯樣のところへ參つたのか。

常　されば御座りまする。君、六十餘州を平げ給ひしより、俄に意驕らせ給ひ、無用なる朝鮮征伐に幕下股肱の臣を殺し、益なき瑤臺瓊閣の建築に財帑を費す、君御他界の後、天下を覗ふ者あらば掌中に握ること最と易し、殊に讒者の言を信じ秀次公を害し給ひしは、自

ら生ひ茂る枝葉を刈らせ給ひしも同然、豐臣の樹の枯れを一際早め給ひしもの、奥方始め若君迄酷しとも酷き刑罰に處し給ひしは、豐臣家に人心離るゝ兆とは御心附き給はざりしや、當時辻々の貼札に、因果の程を御用心と書きしもまこと遠からず、廻る浮世の小車に、君を迎へし其の意は、生者必ず滅亡する、盛衰の理を御目に掛け、悟りの道に御導き申すので御座りまする。

秀　ヤア小賢しき其の諫言、今更汝にそれを聞かうや。

常　さらば殿下は豐臣家を、萬々年の後迄傳ふる、御計策は御座りまするか。

秀　計策とて他にあらうや、今秀吉の武威天下を壓し、旋て大明攻亡さんに、誰叛逆を企てんぞ。

常　あゝ其の御心なればこそ、豐臣の御運も極つたり、今天下太平なりと雖、此は殿下御存生の間のみ、大明を攻亡さんなどゝは痴人の夢を語るの類ひ。

秀　えゝ聞きたうない無禮の雜言、其の儘には差置かぬぞ。

常　憚りながら、如何樣に御憤怒ありとても、此處は日本の外で御座れば、殿下の御威光は屆きませぬ、先ッ其の如く御德を積ませ給はぬ其の時は、御他界後迄御威光が恐らくは世に及びますまい。

秀　えゝ徳を積めよの威光が奈何のと、秀吉さほど短命でないぞ。地獄に武威が逸かすば、百千歳の後迄存へ、奈落の底迄攻入りて閻魔の王の首を刎ねん。

常　わら勇ましの其の御諚、ありし昔の御武者振を眼の前拜する心地すれど、如何なる智者も豪傑も定まる年齢を延す術なし――御覺悟遊ばされ候へ、殿下御他界は早一二年の後に候ふぞ。

秀　ナニト予が一二年の中に死ぬと申すか、汝何とて知りつるぞ。

常　恐れ多く候ふが、殿下は未だ人間の眼に迷ひの霧障れど、我は清々しき無形の靈、後の世の有様、手に取るやうで御座りまする。

秀　然らば予が死ぬ其の後に、天下は如何に變ずるぞ。

常　ハヽア……殿下の御前に斯々と、申上ぐるに忍びませぬ。

盛りなる都の花はちりはてゝ東の松ぞ世をば繼ぎける。

此の一首にてよしなにお判じを願ひまする。

秀　フム――スリヤ家康が天下を取るか――予は何やら彼奴が斬れぬわ。

常　仰せの如く徳川殿は、天運備はる身の上なれば、唯只管に御頼みあつて然るべし。今日も花見の莚に來らば、既に生命の無きものを、運の強きは家康公、必ず思ひ當らせ給ふこ

とあるべし。

秀　素より家康は片腕と頼めど、よも秀頼に害心あるまじ。

其の時上手奥より、髮を振乱せる白衣の者、秀頼を横抱きにして走出づ。太閤眼炎くそれを見附け。

秀　こは何奴なれば若を連れて行くのぢや。待て、待て。

と、其の袖を控へる。

冥　秀次殿の頼みに任せ、日夜苦悩を見せるのぢや。

秀　何、秀次の頼みぢやと、一體汝れは何者ぢや。

冥　これは五道の冥官にて、人の生死を司る者。

秀　何故あつて秀次に、若君を苦める事を頼まれたのじや。

冥　餘りに酷き畜生塚、怨恨の報ゐはあるが當然。

秀　シテ秀次に頼まれて、秀吉には頼まれぬと申すか。

冥　汝は修羅道に墮罪すべき奴、罪人の頼みを肯くべきや。

秀　秀次たりとて姙婦の腹を割かせし奴、無間地獄の底迄眞逆さまに落つべき者、地獄も依估の沙汰あるか。

冥　秀次殿も墮罪したれど、ありし罪科懺悔して今は清淨潔白の身ぢや。

秀　さらば秀吉も、懺悔しやうまで。

冥　イヤ〳〵汝は我念强く、洵の發心望み難し、凡そ地獄に苦む輩、名ある者ほど罪重きぞ。

秀　問答無益、若君を返せ。

冥　豈で汝の力及ばん。

と、兩々爭ふ常陸介太閤の袖を留める。

常　それほど若君がおいとしくば、何故仁政を施さ給はぬ。

冥　えい其處退け常陸介。五道の冥官たりとても、よも情を知らぬ事はあるまい。秀頼を奪らるゝは、此の秀吉の生命を奪はるゝよりも苦しい、コレ汝が欲しくば、日本國中のもの、何でも與らさう。返せ、返して呉れ、コリヤ拜む、頼むぞ。

と、太閤手を合せる。常陸介涙をハラ〳〵と流し。

常　太閤ともあらうものが、子故なればこそ御合掌、子の可愛さは誰も變らず、秀次公の御心が御解りになりましたか。

秀　えゝまたしてもツベコベと、常陸介、控へ居らう。コリヤ返せ、返せ。

冥　何とて汝に返さうや、所詮天命をだ終り難さ此の秀頼。

秀　ナニ天命を全うせぬとや。

冥　豐臣の家の滅亡も、今目前に迫りたり。あらゆる地獄や。

と、振向く。

秀　おゝさういふ汝は秀次ならずや。

秀次　常陸、例の如く秀頼を焦熱地獄に落して呉れうぞ。

三人くるゝと爭ひ、トゞ秀次が秀頼を投げると、仕掛にて赤き火燃ゆる。此の時ダークチエンヂにて、舞台元の花見の宴に戻る。

秀吉、茫然として夢の醒めたる態、左顧右視キヨロ〳〵する。幕の外にて唄々と謠曲唄ゆ。

『五十の春秋の、榮花もたちまちに、たゞ茫然と起きあがりて』

秀　さては今のは夢であつたか——我生れてより以來、夢てふものを見ざりしが、さてさて寤ひれば儚いものぢやな。

『さばかり多かりし、女御更衣の聲と聞きしは、松風の音となり、宮殿樓閣は、たゞ邯鄲の假の宿』。

夫の盧生に引代へて、寤ひれば榮華心の儘、柳櫻の錦の褥、春を我身に集めたれど、睡れば現々地獄の責苦。